

910.8

45

910.8-Ko45ㄅ



1200500754813



始



32.6.21

910.8  
K045  
111



文學博士  
藤井乙男著

文學史

日本文學社



610-200

# 國文學史

## 目次

序説……………一

### 第一章 上代の文學

- 一、序説……………三
- 二、國文學の發祥……………六
- 三、外邦文化の傳來……………九
- 四、古事記の選述……………一
- 五、祝詞と宣命……………一六
- 六、歌の發達と萬葉集……………二〇
- 七、萬葉の歌人……………二七
- 八、當代の漢文學……………三〇

## 第二章 中古の文學

一、序 説……………	三三
二、詩文の隆盛……………	三七
三、六 歌 仙……………	四〇
四、小説の源流……………	四四
五、神樂歌と催馬樂……………	四八
六、古今集の勅撰……………	五三
七、古今集の歌人……………	五七
八、後撰集とその撰者……………	六一
九、日記と物語……………	六六
一〇、拾遺集と當時の歌人……………	七一
一一、清少納言と枕草子……………	七五
一二、紫式部と源氏物語……………	七九
一三、源氏以後の小説と日記……………	八四
一四、榮花物語と大鏡……………	八七

## 第三章 近古の文學

一五、説話の集成……………	九〇
一六、歌壇の新調……………	九一
一七、歌論の興隆……………	九六
一八、藤原俊成と千載集……………	九九
一九、謠ひものゝ發達……………	一〇二
二〇、漢文學の隆替……………	一〇五

一、序 説……………	一〇七
二、新古今集と新勅撰集……………	一一〇
三、新古今時代の作家……………	一一三
四、師範家の興起……………	一一七
五、鎌倉時代の歌……………	一二〇
六、軍記文學の勃興……………	一二四
七、説話文學……………	一二八
八、鴨長明と方丈記……………	一三四

九、日記と紀行……………一三七

一〇、鎌倉時代の小説……………一四一

一一、宴 曲……………一四四

一二、南北朝以後の歌壇……………一四六

一三、兼好とつれづれ草……………一五三

一四、雑史と軍記……………一五五

一五、謡曲と狂言……………一六〇

一六、舞 の 本……………一六七

一七、御伽草子……………一六九

一八、連歌から俳諧へ……………一七一

一九、五山の文學……………一七七

### 第四章 近世の文學

一、序 説……………一八〇

二、書籍の刊行と學問の興隆……………一八五

三、幽齋と長嘯子……………一八九

四、松永貞徳の俳諧……………一九二

五、初期の小説……………一九六

六、元祿時代の漢學……………二〇〇

七、國學の勃興と歌の革新……………二〇四

八、談林風の俳諧……………二〇九

九、芭蕉と蕉風……………二一五

一〇、芭蕉歿後の俳壇……………二二〇

一一、西鶴と浮世草子……………二二五

一二、淨瑠璃の起源……………二三三

一三、近松門左衛門……………二三七

一四、歌舞伎狂言……………二四二

一五、享保期の概観……………二四四

一六、國學の勃興……………二四六

一七、八文字屋本……………二五〇

一八、近松以後の淨瑠璃作者……………二五三

一九、文運の東漸……………二五五

二〇、古學と歌文と……………	二五七
二一、狂詩狂歌及川柳……………	二六二
二二、天明の俳壇……………	二六七
二三、黄表紙と洒落本……………	二七二
二四、淨瑠璃と脚本……………	二七七
二五、文化・文政から天保・嘉永……………	二八〇
二六、幕末の歌壇……………	二八五
二七、一茶・大江丸その他……………	二八八
二八、讀本と合卷……………	二九一
二九、滑稽本と人情本……………	二九七

六

(以上)

## 國文學史

### 序 説

文學は人の思想感情を、文字を用ひて再現したものであるから、それを研究するといふことは、とりもなほさず作者を知るといふことであり、個々の作品を知ることによつて、その中から、自らその時代の思想感情の流れを汲み知ることが出来る。かくして古代から近代へと述べて來るとき、そこに人類の辿つて來た足跡を明確に捕へ得る。文學史のもつ重大な意義はそこに存するのである。

今本邦の文學を對象として、その發展の迹を觀て、吾等は吾等の祖先の精神生活を闡明すると同時に、吾等のそのの次代への進展についての暗示を得んとするのである。

文學史の研究法には種々の形式があるだらう。しかしその根柢をなすものは、作家であり、作品である。作家及び作品についての確實な知識なしに、文學史の研究はなし得る道理がない。故に、本講に於ても、作家と作品とについての解説をもととして講義を進めて行かうと思ふ。しかし上下二千有餘年に亘るそれらの總てについて、精細をつくすことは勿論なし得ざるところである。たゞ代表的のものは擧げて遺憾なきを期する。

さて、一口に文學といふものゝ、その種類は頗る多様であるが、大體に分つて抒情文學・叙事文學及び劇文學に分ち得る。そのいづれからいづれへ導かれるか、それはとにかく、いづれの國にもこの三種の文學の存在するやうに、本邦の文學にもこの三種は存する。そしてほゞ抒情文學は律語の形式により、叙事文學は散文の形式をかり、劇文學は律語・散文相交錯して成ると見ていゝ。建國以來二千數百年の間に、これらがいかに發達して來たかを、本誌に於て述べてみよう。

國文學史の時代の區分はいかに見るべきか。文學史には文學史として文學それ自身の推移の勢によつて、他の政治史などゝ特異な立脚地から時期を區分せらるべきである。しかし政治その他社會現象の大變動はやがて人心に大きな響を傳へて、文學の上にも變化を與へることの多いのは否むべからざる事實である。で、便宜上從來文學史にも他の史上の時代區分法を借り用ひて來た。今亦大體これに従うて左のやうに區劃する。

一、上古——國初から奈良朝の末まで。この時代は國文學の發祥の時代で、外來文化の移入によつて、多大の感銘を人心に與へ、後期に於てはかなりその影響を文學の上にも見せてゐる。祝詞・宣命・古事記・萬葉集等は代表的作品である。

二、中古——所謂平安朝時代である。前代に移入せられた外邦文化は、本邦固有の精神に消化せられて文學の上にも絢爛の時代を現出した。歌は古今集の勅撰によつて、後代にその典範をのこし、散文では、幾多の物語類や草子・日記の類出で、無比の黄金時代を現出した。

三、近古——即ち鎌倉時代から南北朝時代、室町時代を経て戰國時代までを包含する。宋元の文化の移入せられた時代であるが、文學では美術がうけたほどの影響は見られない。この期で注意すべきことは文學の上にも下尅上の傾向の見えること、劇文學の萌芽などである。

四、近世——徳川時代である。文學の下尅上は完全に行はれて、堂上文學は全く平民文學に壓倒せられてしまつた時代である。前半の京坂時代——元祿時代——と、後半の江戸時代——化政時代——とに分けられる。相俟つて平安朝時代に匹敵すべき文學の全盛時代である。

五、近代——明治時代である。新興の機運に乗じ、歐米文化の急劇な移入によつて、文學の上にも實にめまぐるしい程の變遷を來した時代。この間四十餘年にすぎないが、文學のあらゆる方面に長足の進歩を來して、次の大正・昭和の時代に接してゐる。

## 第一章 上代の文學

### 一、序 説

前にいつたやうに、こゝに上代といふのは、國初から奈良朝の末までをいふ。年数は、神武天皇以前は得て知るべからず、神武天皇即位以後のみで、約一千五百年を數へる。かくの如き長い年月を一括して一時期とするの茫漠たる



は思はないでもない。しかし太古の世、人智未だ進まず、感情素樸にして、思想亦單純、從て文學の進歩は遅々として見るに足るものも多くない。支那思想の移入せられたのもこの間であり、印度思想の傳來亦さうではあつたとはいへ、彼等はなほ國民思想の根柢に深く影響を及ぼしたとも思はれない。固有の國民精神が最も率直に文學の上にも表現せられてゐる時代である。

しかし、千五百年を省察する時、その間多少時期を分つことが出来ないでもない。即ち左の三期にこれを小分する。

(イ) 太古から應神天皇まで (九七〇)

この時期はまだ文字のない時代で、すべてを口から耳へと語り繼いだ時代である。或は太古に既に文字のあつたことを主張する學者もあるが、その根柢は頗る薄弱である。かくの如き時代であつたが故に、文學亦口誦を以て傳つた若干の律語を、後代に記録せられた書冊の中に見出すに過ぎない。要するに國文學の搖籃期である。

(ロ) 仁徳天皇から近江朝まで (一三三〇)

この期間は本邦文化史の上で特に注目せらるべき時代である。支那文化は前期の終り (應神天皇の十六年、紀元九四五年) に三韓を経て移植せられた。公に文字が移入したのは亦この時であつたらう、書記のこの史上に見えるのはこれ以後のことである。朝廷に史官がおかれたのも、この期の初頭であつた。その後三韓を經由し、或は直接に支那から、異邦の文化は駁々として輸入せられたが、こゝに欽明天皇の十三年に、百濟から佛像經卷を奉獻することあつて、印度思想が受入れられ、朝廷の手厚い庇護の下に、當代貴族の間に大に行はれ

た。かくて造形美術は俄然著しく進歩を見たやうだが、文學の上では、海外の思想も爾く深刻な影響を及ぼすこともなくて過ぎた。支那との直接交渉が公に開かれたのは、推古天皇の十五年 (一六二) であつたが、その結果か、歌の形式の上に詩賦の影響が、舒明天皇頃から窺はれ得る。孝徳天皇の大化改新は、政治上の大事件であつたが、文學史はこれを雲烟過眼視して、近江朝時代を以て第二期を終る。要するにこの期の文學は、前期のそれと大差なき状態にある。但し次期に處すべき準備は着々としてその間に培はれつゝあつた。書記の術は大に進んで、この期に書かれた遺品は今日に残されてゐるが、文學的内容の見るべきものは少い。而して漢詩がこの期の終り頃から作られたことも注意すべき點である。

(ハ) 飛鳥朝から奈良朝まで (一三三〇—一四五〇)

この時期は、國文學の上に最初に來た恵まれた時代である。前期以來發達の途を辿りつゝあつた書記の法は益々進んで、漢字の驅使は頗る自由を極めて驚くべきものがある。而して奈良朝の初頭に於て、國初以來傳誦し來つた舊辭は書記せられて、建國の神話・傳説や、肇國以後の史談は集大成せられた。即ち古事記及び日本書紀の編纂がそれである。既にこれのみでも偉觀とするに足るに、これに加ふるに、前期まで徐々として進展し來つた歌は、この期の劈頭、まづ大才柿本人麿の出で、氣を吐くあり、ついで幾多の歌人輩出して、こゝに空前の黄金時代を現出した。結集せられた歌集また五指を屈してなほ足らぬが中に、萬葉集二十卷は今日に傳つて、なほ陸離たる光彩を放つてゐる。その他の歌集は萬葉集にその存在の迹を留めてゐるのみで、既に滅びてしまつた。萬葉集以後、國文學は見るべき作を残すことなしに、文壇は一時暗黒の中に没したまゝ中古の時代に入るのである。

なほこの期の文學(そのあるものは前二期若くは前)期の作にかゝるものもあらう)としては、祝詞と宣命とのあることも忘れてはならぬ。又、漢詩の集である懷風藻が編纂せられたのもこの期である。

これを要するに、千數百年とはいへ、たゞ最後の飛鳥・奈良期にのみすぐれた文學があるのみで、それ以前は文學史上さして重く見らるべき時代ではない。なほ文學の品類を以ていへば、純國文もて書かれた散文の文學は殆どこれなくして、律語のみひとり榮えた時代である。附けていふ。この時代に外邦文化の影響をうけて、印刷の術が開けられたことは注意すべき事項であつた。但しそれも盛行するに至らなかつたらしく、今日残存せるものは、稱徳天皇神護景雲四年(三四)に追福修善の爲に、百萬の小塔を法隆寺に寄進し給うた時、その中に納めた陀羅尼があるのみで、他に遺品の見るべきものがない。もしこれが盛行するに至つてゐたなら、文學の上に多大の影響を及ぼしたことであつたらう。惜しむべきことである。

## 二、國文學の發祥

太古無文の時代に於て、あらゆる重大事は口々傳誦によつて後世に傳へられた。古代の姓氏に天語連があり、また海語造があることは、やがて萬事傳誦を以て彼等の家職としてゐたであらうことは想像するに難くない。彼等によつて語り傳へられた萬事の中に含まれてゐた幾多の歌謠こそ、——その書記せられたのは遙に後であるとはいへ——やがて發祥期の文學といつてよ。

今、古事記及び日本書紀を主として、發祥期の歌を數へると隨分の數に上る。しかしその全部を所傳のまゝの時代に、所傳のまゝの作家によつて歌詠せられたと信すべきであらうか。

今歌の原始的の形を考へると、それは恐らく後世のやうに整正された形式のものではなかつたらしい。そのはじめは恐らく間投詞的の言語であつたらしく、この點から見て、古來歌の起原として、諸册二章の唱和「あなにやしえをとこを」「あなにやしえをとめを」を擧げるとは當を得るよう。かくの如き自然の聲から出發して、だん／＼彫琢を經、鍊磨を經て所謂「歌」の形が出来上るのであるが、とにかくその基本的要素は、短句と長句との交錯であり、短長句を重疊して一首の歌が成立する。既に短長句の交錯といひ、又その重疊といふ以上、歌の原始的形式は、その句數は偶數であるべき筈である。即ち

天なるや           をとたなばたの

うながせる        玉のみすまる

みすまるに        あな玉はや

み谷                ふたわたらす

阿遲志貴        高彦根の神ぞや (神代記)

のやうな形が古い歌の形だつたらう。かうした偶數句の最後に一句獨立的の句が添うて奇數句の歌の出現を見る。

やくもたつ       いづもやへ垣

妻ごみに 八重垣つくる

そのやへ垣を (神代記)

澳つ鳥 鴨とく鳥に

わがるねし いもは忘れに

世のことくくに (神代記)

かうして出来た歌の毎句の音数は、その初めは必ずしも一定してゐなかつたものが、いつとはなしに五七音に整へられて、こゝに後世見る歌の形が出現する。そしてその五七音の重疊の度合に従つて、後世にこれを片歌(575)と5ひ、短歌(57.57.7)と5ひ、旋頭歌(57.7)と5ひ、長歌(57.7)と5ひと歌體が生れて来る。

既に口誦によつて傳つた歌であるが故に、古傳の作者をそのまゝ受入れることは危険である。口誦の間に傳誦の便のために歌の形で物語の傳つたものもあらうし、或は聽者により多くの感動を與へんがために、故らに作爲せられた歌もあるかもしれぬ。忍熊王が、將に入水せんとして、

いざ吾君振熊が痛手負はずは鴉鳥の淡海の海に潜ぎせな吾

と歌ひ、大山守命が河中に落ちて、水のまに／＼流れながら、

千早振宇治のわたりにさをとり速けむ人にわがもこに來む

と歌つた如き、果して信じられようか。しかしその作者は知らず、とにかく無文時代の歌謠であると考へて差支な

らう。

今内容によつて古代の歌を見ると、その最も多いのは戦争詩であり、戀愛詩であることは、争闘と戀愛とを生活の基調とする古代人としては、常に然るべきことである。しかも彼等が歌ふのはその光明の半面である。戀愛詩では、男は女を得て、飽滿せる戀を禮讚し、女は夫をほめてこれを慰安する底の情を多く歌うてゐて、後代のやうに、ならぬ戀を歎ち、待つ戀の心もとなさを歎じてはゐない。戦争詩でも同じく勝利の愉悅に陶醉し、敵の敗亡を嘲笑して、わが意氣を誇らうとしてゐる。古代人の心境は單純である。彼等を圍める自然は明媚であり、彼等の耕す田陌は豊饒である。加之、氣候は中和を得て四時その序を違へない。單純な古代人がこの間にあつて、心常に樂天的に傾くのは當然である。彼等の間に生れた歌に如上の響のあること、これ亦あたりまへのことである。

さてこの期の歌の修辭を見るに、單純ながらも、古代人と雖も全然無技巧ではなかつた。彼等の最も好んで用ひた技巧は疊句であり、對句であつた。これ傳誦に便する上に、當に用ひられるべき技巧である。次で譬喩も亦可なり用ひられるが、そこには幼稚ながら古代人の生活の片影が窺はれる。その他枕詞や序歌の類もこの間に萌芽してゐることも注意せられよう。

### 三、外邦文化の傳來

三韓との交渉は既に神話時代からあつた形迹はある。しかし、それが公然のこととなりて、彼土の文化がわが中つ

國に及んだのは神功皇后以後のことと思はれる。經典も既に渡來し、太子菟道稚郎子が阿直岐及び王仁に師事し給うたのは應神天皇の十六年のことであり、超えて二十八年に高麗王の上表の非禮を責められたことを見れば、太子の學識は随分進んでゐたものと見てよい。更に應神天皇の崩後に於ける太子と御兄大鷦鷯命との皇位繼承についての挿話は、人情の自然に出た美談であるといはゞいへ、その間に儒教的教養の影響は見られないだらうか。とはいへ、かうした事も限られた少数者間のことで、概していへば、なほ太古人の佛は一般に残つてゐたと考へてよい。

こゝに注意すべきは文字の傳來である。外邦との交渉が應神以前にあつた以上、文字も亦必ずしも阿直岐等の渡來を俟つて來たものではなかつたらう。が、史に文字使用のこの見えるのは仁徳紀の所見を最初とする。ついで履仲天皇の四年の紀に「始めて諸國に國史こくしをおき、言・事ことを記し、四方の志こゝろを達した」旨の記載が見える。しかも史は皆歸化人をこれに充てたことは、文字が國人の間に流通することの少きを語るものである。要するに筆録のことはこの頃から漸次行はれたがなほ微々たるものであり、その今日に残るものはない。

次いで欽明天皇の御宇に、佛敎が渡來したことも前述の通りである。しかもこれ亦三韓を経て、漢譯佛典によつてその引通を見たことは、やがて前に流通しそめた文字の使用をいよゝ繁からしめる結果を來した。現存せる古記録は盡く佛敎渡來以後のものである。この頃の記録には既に假名の源流と認むべきものが存して居る。そして漢字の使用はますますその自由を極めんとする傾向を示してゐる。

なほ文章についていへば、そのはじめはもとより純漢文が用ひられてゐたらうことは、書記のことに當る人が彼

土の歸化人であつたことからの當然の歸結である。漸次邦人がこれに當るに至つては、漢文の嚴格な布字法がいくらか和らげられて、文字の布置の和様な變態な、文章の出現したことは、現存の古記録によつて知ることが出来る。ついでには假名を用ひて助辭を區別した文章があらはれる。これがやがて純粹の意味での國文の出現である。が、これらの書き様では筆者の思ふ通りに第三者をして讀ましめ得ないおそれがある。即ちこゝに於て全文假名書の文があらはれて來る。即ち(一)純なる漢文、(二)一見漢文のやうに見えて、文字の布置和様になつた文、(三)助辭に假名を用ひたもの、(四)假名のみを以て書いた文、以上の四種が、漢字渡來以後奈良朝時代までに行はれた文章の類である。かくて、漸く文字の使用に慣れて、その使用は次第に自在となつて、諸種の書籍も書かれたが、一方經典學習の便に従つて、奈良朝の末頃から所謂かなの發生を見るに至つたが、このことは後に述べることとする。

#### 四、古事記の選述

既に前節で述べたやうに、本邦に於ける記録の術はかなり悠遠の時代に淵源し、現存のものも推古天皇の御宇に溯ることが出来る。しかし文學として價值あるものは、遙かに下つて奈良朝に入つてはじめてあらはれる。即ち古事記がそれである。

古事記の撰述は、元明天皇の勅を奉じて、その和銅五年(七一三)に太安萬侶(變老七)によつてなされたが、この修史の業は遠く天武天皇(朱鳥元)の御旨を紹ぎ奉つたのであつた。即ち安萬侶が

於是天皇詔之、朕聞諸家所<sub>レ</sub>費、帝紀及本辭、既違<sub>二</sub>正實、多加<sub>二</sub>虛僞。當今之時、不改<sub>二</sub>其失、未經<sub>二</sub>幾年、其旨欲<sub>レ</sub>滅。斯乃邦家之經緯、王化之鴻基。故惟撰<sub>二</sub>錄帝紀、討<sub>二</sub>覈舊辭、削<sub>レ</sub>僞定<sub>レ</sub>實、欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>後葉。時有<sub>二</sub>舍人、姓稗田名阿禮、年是廿八。爲<sub>レ</sub>人聰明、度<sub>レ</sub>目誦<sub>レ</sub>口、拂<sub>レ</sub>耳勅<sub>レ</sub>心。即勅<sub>二</sub>語阿禮、令<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>習帝皇日繼、及先代舊辭。然運移世異、未行其事矣。

と、序——實は古事記を上る表である——の中についてゐるのを見て、天武天皇の聖旨を知ることが出来る。天皇に大規模な修史の御計畫のあつたことは天武紀に見える。もと推古天皇の御宇に聖德太子が修史の御事業を完成し給うたことは著名の事實である。惜しい哉、それは蘇我氏滅亡の時に祝融氏の災にあうたが、一部は火中に救はれて中大兄皇子の御手に入り、再び天武天皇の御事業となつたのだ。しかし天皇の崩御によつてその御事業も中道にして頓挫したのであつたが、元明天皇は舊辭の誤り忤へるを惜しみ、先紀の謬り錯れるを正さんとの大御心から、和銅四年九月十八日に、安萬侶に勅して阿禮が誦せし所の勅語の舊辭を撰録して獻上せしめられたのである。かくて年を越えて、聖五年正月成つて獻上し御覽に供へ奉つたのが、即ち古事記三卷である。

阿禮の傳記は詳かでない。否その男性であつたか女性であつたかさへ定説がないから、安萬侶が古事記撰述の當時まで存命してゐたかどうかも判然しない。前にひいた安萬侶の上表中にいふところがいかに故人めかしいところから、或は既に現世の人でなかつたかもしれぬ。安萬侶は神武天皇の皇子神八井耳命の後裔で、王申亂の功臣多品治の子、和銅四年の正月に正五位に叙し、その年古事記撰述の勅を受けたのである。八年に従四位下、靈龜二年に氏長

者、更にその後民部卿に陞り、養老年間には日本書紀の編纂にも従事し、その完成後三年養老七年七月に歿した。

古事記三卷、記載の範圍は神代から推古天皇に及んでゐる。即ち、

上卷 天御中主神以下、日子波限建鞆草薺不合尊以前。

中卷 神倭伊波禮毘古天皇(神武)以下、品陀御世(應神)以前。

下卷 大雀皇帝(仁德)以下、小治田大宮(古折)以前。

に分ける。要するに、上卷は神の世界の物語であり、中・下卷は人の代の物語である。

古事記は既に述べたやうに、天武天皇が稗田阿禮に誦み習はしめ給うた帝紀及び舊辭を安萬侶が筆録したものが、その帝紀・舊辭とは一體何であるか。帝紀は即ち天皇の御紀であり、舊辭は古記録であることは、記傳に説くところであり、古語を傳へることに着眼し給うたことは舊事といはずして、舊辭といふところに窺ふことが出来る。安萬侶は、これを録するに當つて甚深の注意を拂うたことは、その序の末文に、その用意を述べて、

上古之時、言意竝朴、敷<sub>レ</sub>文構<sub>レ</sub>句、於<sub>レ</sub>字即難。己因<sub>レ</sub>訓述者、詞不<sub>レ</sub>逮<sub>レ</sub>心、全以<sub>レ</sub>音連者、事趣更長。是以今或一句之中、交<sub>二</sub>用音訓、或一事之内、全以<sub>二</sub>訓錄。即事理匡<sub>レ</sub>見以<sub>レ</sub>註明、意境易<sub>レ</sub>解更非<sub>レ</sub>註。

といつてゐるに徴して、その苦心の迹は推察せられる。その文は漢文のやうな外貌を有てはゐるが、決して純粹の漢文ではない。當時の訓み方は、既に今日に於いては正しく知ることは出来ない。今は本居宣長(天保六)の訓點に従つて普通には訓んでゐるが、果してそれが編纂當初の訓み方に一致してゐるかどうかは疑問であり、現に幾多の異説も

ある。

本書は平安朝以後その讀まれることは日本書紀に及ばなかつたが、近世に至り古學興るに及んで漸く學者の注意を惹くに至り、宣長の古事記傳成つて、ほどその研究が完成された。かくて國學者の間に本書の重んぜられること甚しく、その所傳は盡く神聖な古代史實として見られるに至つた。しかし、本書は決して嚴密な意味での史書ではなく、記載は必ずしも史實そのものではない。神話傳説を經とし、史實を緯として、織りなされた一篇の叙事詩として見るべき作である。

叙事詩としての古事記の中核となるべき主題は、いふまでもなく皇室の由來を中心として、國家組織を説明せんとすることに存する。この主題を繞つて幾多の神話が語られ、傳説が生れる。そして物語は天上から地上へと推移し、筑紫から大和へ、出雲から大和へ、東國から大和へ、諸民族は力強い歩みを以て大和朝廷に參觀する。しかもその文學的價值は上巻から中巻・下巻へと漸次遞減するかに見える。太陽神としての天照大神と暴風雨神としての素盞鳴命とを中心として描かれた高天原を舞臺とする神話、更に英雄神として描かれた素盞鳴命及びその後裔たる大國主神に關する傳説等の神彩を見よ。又中・下巻では、神武天皇及び日本武尊・仁德天皇・雄略天皇等の御記に於いて勝れた文學を見ることが出来る。

古事記撰述の後十年、元正天皇の養老四年に日本書紀が撰せられた。これは天武天皇の修史の大業を繼承せられた鵜葉であつて、舍人親王(天平七年)を編纂總裁とし、古事記の撰者太安萬侶等も加つて、當時殘存してゐた多くの材料を

按じて、その宜しきに従ひ、異説の捨て難いものは「一書曰」として、これを列舉し、或は外邦の史書を参照した等周到な用意の下に執筆せられた。通編三十卷、別に系圖一卷があつた旨續紀に見えるが今は傳らない。文章は漢文を用ひてゐるので、近世の國學者は國史の眞髓を失つてゐるかの如く考へてゐたが、歴史としては、その價值古事記の上にあることは近時の定説となつた。但し文學としては古事記に及ばないこと違ひ。

なほ記・紀中の歌謠については前節に述べたところを参照せられたい。萬葉以後の歌を見る上に於て、この二書が貴重な資料であることはいふまでもない。

また古代の神話・傳説は風土記及び氏文等にも散見する。風土記は和銅六年に諸國に詔して上らしめ給うた地誌であるが、その中に傳説を交へることが多く、文學的價值亦さうした個所に見えるが、大體に於いて文學的要素は稀薄なものといはざるを得ない。現存の古風土記は播磨・常陸・出雲・肥前・豊後の五國のものに過ぎず、しかも多くは零本をとめてゐるに過ぎない。その概要を左に述べよう。

播磨風土記は「里」といつて「郷」と稱しないところから推して、靈龜改稱以前の撰であることが知られる。興味深い郷土傳説の多くを含んでゐることは特に注意すべきである。これも完本ではない。

常陸風土記は和銅撰進のものであるといふ。文章もいたく漢文風の潤飾がある。菅政友は或は藤原宇合が常陸在任時(養老初年)のものでないかといふ。書中の傳説は日本武尊を中心としてゐる。現存本は完本でない。

出雲風土記は現存古風土記中唯一の完本である。卷尾に「天平五年二月卅日勅造」と記してあるので、その制作年

代も明らかに知られる。傳説はあまり多からぬ中に、八束水臣津野命が國引き給へる傳説は有名であり、興味も深

い。肥前風土記と豊後風土記と、共に殘缺本で、前三者などよりはやゝ後のものと思はれる。殊に豊後風土記について、狩谷掖齋(天保六年歿)は「此書は疑はしければ今取らず」といひ、田能村竹田(天保五年歿)の如きは偽書と斷じてゐるほどである。

風土記は要するに地誌であるが故に、採録せる傳説も、多く地名説明傳説であるは自然のことである。傳説から地名が生じ、地名から傳説が生れる。風土記のそれは多く後者に屬するものらしい。

氏文は國史編纂の資料として、諸氏をして奉らしめた自家の歴史であるが、今殆ど佚して、わづかに他書の中にその佛をとゞめるに過ぎない。中に有名なのは高橋氏文であるが、これは延暦十一年に高橋・安曇二氏の中に神事に關して爭議のあつた時に奉つたもので、祖先磐鹿(いしか)六獵命(むつ)の事蹟をはじめ、世々膳夫として奉仕し來つたことなどが書いてある。

### 五、祝詞と宣命

上代にあつて政治は神意のまに／＼行はれたが故に、祭祀はやがて政治であつた。國語「まつりごと」は即ち祭祀であることを思へ。そして祭祀と關聯して發達して來た文學が祝詞である。

祝詞はこゝに「ノリト」と訓じる。「のりとごと」、「のつと」の「と」などは、その異名であり、音便であり、略言である。「のりと」の語義については古來「のりとときごと」の略であるとして、神意を宣りごとく詞の義と考へられ、又神に申す詞とも説かれるが、要するに祝詞はその性質から考へて祈禱の詞であるらしい。古代人は深く言語の神祕的な力を信じ、吉凶禍福すべてこれに支配せられると信じた。故に、めでたき語を喜び、凶惡な語を惡んだのは自然である。祝詞はかうしたところから發達して來る。素盞鳴命の暴行を惡み給うて、天照大神が天岩戸に籠り給うて、天地晦冥邪神横行の災のあつた時、群神岩戸の前に集つて神饌を奠し、神樂を奏し、天兒屋命(あまのむすこ)が太祝詞(なほまこと)を誦(よみ)したことは記・紀の語るところである。その祝詞のいかなるものであつたかは今日知ることが出來ないけれども、美言宏辭を連ねたものであることは古記によつてうかゞひ知ることが出来る。

今日現存する祝詞は延喜式(延長五年)第八卷に收められてゐる二十七篇と、台記(藤原朝長の日記、康治元年—久壽二年)別記にのせた一篇とで盡く平安朝期に入つて、典籍に載録せられたものである。しかし、齋部廣成の古語拾遺(大同二年)に、神武天皇の即位の儀を叙したところに、

天富命率ニ諸齋部、捧ニ持天璽鏡、奉ニ安正殿、平懸ニ瓊玉、陳ニ其幣物、殿祭祝詞。其祝詞文 在ニ於別卷、次祭ニ宮門。其祝詞亦 在ニ於別卷、といつてゐるやうに、延喜式以前既に筆録せられた祝詞のあつたことが知られる。(古語拾遺の別卷は傳りない)しかしそのいづれの時に作られたかについて、賀茂真淵(明和六年歿)の如きはその祝詞考に文體・用語の點から考察して、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に、大祓詞は天智・天武の御宇に、遷却崇神・大殿祭は持統文武の朝に成つたものである旨を論じて

はゐるけれども、それは要するに彼の一家言たるにとゞまり、本居宣長が、「おほかたはいと古代より申しならへるまゝにて、いと／＼ふるきを、そのつゞりさま、いひさまなど、いさゝかづゝは世々にうつりかはり來ぬることも、おのづからありと見え、又後に加はりもし、省かりもし、かはりもしたることなども、すこしづゝはまじれるもありと見えたり。かくありて、全く今式にのれる如く定りたるは、大寶令のころならむか、はたそれよりやゝ前つかた天智天武の御世のほどなどより、定まれるもありやしむ、それはたしかにはいひがたし」と大祓詞後釋にいつてゐるのに従ふべきである。大體に於いて出雲國道神賀詞や、大祓詞や、祈年祭詞やなどが古く、春日祭・平野祭・遣唐使時奉幣等の諸篇の新しいことだけは、内容・形式から推定せられる。

祝詞の性質が神前に奏して祈願の意を強調したものであることは既に述べた。建國以來農業を以て立國の大本として來たが故に、農事に關する祝詞は可なり多い。祈年祭・月次祭の五穀の豊穰を祈り、廣瀬大忌祭・龍田風神祭の風水の災を除かんことを願ひ、神嘗祭の豊年を感謝するが如き、これである。しかもこれらの祝詞と雖もことゝに皇室の安泰を祈り、御世長久を祝せざるはないが、その點の特に強調せられてゐるもの亦夥しく、鎮御魂齋戸祭・遷却崇神・道饗祭・大殿祭・御門祭・鐘火祭等皆それである。もしそれ清淨を愛し觸穢を嫌ふ國民性は、大祓詞の上に明に看取せられる。なほ天皇の御代を祝福するのに出雲國造神賀詞・中臣壽詞があり、遣外使臣の安全を祈るものに遣唐使時奉幣がある。

祝詞は多くその祭祀の由來・緣起を語る神話的部分と、幣帛を捧げて神徳を讚美し、祈願の意を述べる部分との二部から成り、その前後に序言及び結語が附せられてゐる。(中にはかく全き形をとらずに、神話的部分を缺如してゐるものもあるが、それは大體から見て比較的新しい時代のものである。)これまづ神話的記述に於いて人々を遠い神代に誘うて莊嚴の感を抱かしめ、さて祈願の意を強く響かせんがためであつたらしい。そしてその企圖は表現法と相俟つてその効果を大ならしめる。

祝詞の表現法は上代人のなし得る限りを盡して雄大莊重ならんことを期してゐる。抽象的に叙して印象を漠然たらしめ、冗漫の中に自ら悠揚たる風格を備へてゐる。修辭法としては列舉法・反覆法・對句法等が最も多く用ひられる。そしてこれらの併用は結局、雄大・莊重の感を深くし、快美な讚詞を文に附與するのである。祝詞が散文といふよりは、より多く律語的であるのも亦その故である。

神を對象としてゐる祝詞に對して、天子が人民に下し賜はる詔勅が宣命である。古からかうした宣命の下らなかつた御代があつたらうとは想像せられない。しかし日本書紀には、それらがすべて漢文で書かれてしまつて、本來の形を傳へない。その今日に傳はるものは續日本紀(延暦十  
六年)なる文武天皇即位の宣命を以て嚆矢とする。

宣命は祝詞と異つて、人を對象としてゐるが故に、祝詞に比してその表現法は著しく現實性を帯び、同時により多く散文的である。しかもその中に天皇がいかに國家を中心として御身を謙退し給ひ、蒼生の上に限らなき仁恵を垂れ給ふかを窺ひ奉ることが出来る。上代の散文として誠に勝れたものである。その文體は前節で既に述べたところだが、所謂宣命書と稱せられて、助辭を假名もて小書して分別すること、



是以百官人等四方食國手治奉任賜幣國國宰等爾至麻氏爾天皇朝廷敷賜行賜幣國法手過犯事無久明支直支誠之心  
以而御稱文而緩息事無久務結而手奉詔大命手諸聞食止詔(文武天皇元  
年の宣命)  
のやうな書きさまである。

## 六、歌の發達と萬葉集

發祥期以後歌は漸次發達の道程を辿つて、その形式はますます整備すると共に、その内容亦漸く複雑となり、飛鳥・奈良の朝に至つて、その盛を極めたのである。この時代の歌は萬葉集二十卷に結集せられて後代に遺される。

太古無文の世にあつて歌はいふまでもなく耳に訴へる文學であつた。それが文字の傳來以來だん／＼眼に訴へる文學に移り來り、作歌を記録して後昆に傳へようとする傾きを示して來た。かくて相次いで歌集が編纂せられるに至つたらしく、柿本人麻呂歌集、雙金村歌集・高橋蟲麻呂歌集・田邊福麻呂歌集のやうな家集や、古歌集のやうな總集——と察せられる——や、類聚歌林のやうな類題集——ともいふべきものゝやうである——などの輯められたことが、萬葉集によつてうかゞはれる。

萬葉集の名目については古來兩説がある。即ち一は萬世の義とし、他は萬辭の意に解く。萬辭の意に説くは萬時の學者の取り來つた説であつたが、鹿持雅澄(安政五  
年歿)はこれを古記に考へて斷然前説の勝れる旨をいひ、「長く萬世の後まで朽せず傳はれとてしか名づけられたるにぞありける」といつてゐるのは、従ふべき説の如く考へられる。

さてこの集の撰者については異説區々で、果していづれに従ふべきかに惑はざるを得ない。まづ古く顯昭(建啓頃  
寂?)は平城天皇の勅撰なるべきを主張したが、近時またこの説を支持する學者もある。尤も勅撰といへど、その大部分は未整理のまゝ残されたと考へるのである。又聖武天皇の勅によつて、橘諸兄がこれを撰び、更に孝謙帝の勅をうけて藤原其楯が補うたと見る説もあり、孝謙天皇の勅で諸兄が撰び、その死後大伴家持が續撰したともいふ。契沖(元祿十  
四年歿)は「集中を考へ見るに勅撰にもあらず、撰者は諸兄公にもあらずして、家持卿私に家若きより見聞に隨て記しおかれた」ものであらうと論じ、眞淵は必ずしも諸兄の撰と家持の家集とのみでなく、憶良その他の集が混じて成つてゐると説く。その説を更に精細に説いた説は、卷一卷二の二卷のみは勅撰である(卷一は或は人麻呂・憶良その他の歌人  
と)  
の中で奉勅し、卷二は大伴旅人かと)とし、卷七、卷十乃至卷十六は別集であり、その他は家集であるとする説である。以上の諸説を通觀して、撰者としては大伴家持までの誰かと考へられてゐる(平城天皇勅撰  
説を除いて)が、近時武田祐吉氏の説によれば、本書が現在の形に整備せられたのは種々の點から見て家持以後であるが、平安朝期には下らないといふ。要するに卷一卷二の撰定はかなり古(養老頃には既  
に成つたか)といはざるを得ず、或は勅撰説亦必ずしも否定は出来ない。そして大體家持の手で整理せられ、家持以後多少補訂せられたのではないか。

とにかくに、この書が奈良朝以前の歌を盛れる大歌集であることは疑ふべくもない。この書に採録せられた歌の數は、雅澄の萬葉集古義によれば、合計四千四百九十六首で、内長歌二百六十二首、短歌四千七百七十三首、旋頭歌六十一首である。集中最も年代の古いものは卷二なる仁德天皇の皇后の御歌であり、新しいものは淳仁天皇の天平寶字三

年因幡國總で饗を國郡司等に賜うた時の詠である。この間約四百五十年。随分長い時日といはなければならぬ。しかしその大部分は持統天皇以後の作で、所謂藤原・奈良朝の歌が多きを占めてゐる。

歌體は大體の 57.5 形式からなる長歌、57.57.7 の形式をとる短歌、及び 57.57.7 の形式による旋頭歌の三體である（この各の全體の歌に對す）。しかしこゝに普通短歌と考へられてゐるものゝ、あるものは實は所謂短歌ではないらしいことである。即ち

伊夜彦乃神乃布本 今日良毛加鹿乃 伏良武皮服著而角附奈我良（卷十六、越中國歌）

のやうな形のもので、大和薬師寺なる佛足跡歌碑の歌

御足跡つくる石の響は天に到り地さへゆすれ父母がために諸人の爲に

三十あまり二つの相八十種好と備れる人のふみし足跡どころ稀にもあるかも

と同形式なので佛足跡歌體と呼ばれるものゝあることも注意すべきで、これらは諷詠せられた歌のなごりであらう。又、長歌に添へられる反歌も記・紀の歌時代には見られなかつたもので、その初見は舒明天皇が内野に遊獵し給ひし時中皇命が間人連老をして獻らしめ給うた御歌に於いてである。これは明らかに漢土の文學の影響と認められる。彼上の詩賦に長歌を擬し、詩賦に添へるところの反辭を摸してこゝに反歌が起つたものと考へられる。

既にいつた通り、本書は大部分が未整理のままに残されてゐるものであるから、従て分類など、後の歌集のやうに嚴密に施されてはゐないが、雅澄が「卷別につきて部をたつること、いさゝか差異たりといへども、集中に大抵六種

をもて部を分たり、一には雜歌、二には相聞、三には挽歌、四には譬喻歌、五には四季雜歌、六には四季相聞なり」といつてゐるは當つてゐる。そして整理せられた卷々では、その各類について、ほど年代順に排列してゐるやうである。

二十卷の中最初の二卷は最も整備した卷である。勅撰と見られるのも所以ありと考へられる。卷九・卷十六の二卷は興味饒かなものが多い。傳説を主題としたものあり、詞書の長く添はつたものがあり、叙事詩的趣致の掬すべきものがある。卷十四の東歌・卷二十の防人歌は相對して民謠的興味に富んでゐる。卷十三の抒情歌亦同様の意味に於て面白い。なほ東歌は必ずしも東國人のよんだ歌でないかもしれないが、土の匂ひの饒かなことは認められよう。

作家としては、上至尊の貴より、下、役民・遊行婦・乞食に及んでゐるとはいへ、その中心をなすものは貴族・官人の詠である。しかも前にいつたやうに東歌・防人歌等によつて幾多民謠的作物を見ることが出来ることは中古の文學が全く堂上文學であつたに對して一大特色といふことが出来る。

歌の形の上に漢土の影響が反歌となつて現れてゐることは既に述べた。題材の上にも彼土の感化の及んでゐることも看過することは出来ぬ。早く孝徳天皇の紀に、皇太子が妃蘇我造媛の薨去を悼んで哀泣し給うた時、野中川原史滿が進んで奉つた歌

山川をし二つゐてたぐひよくたぐへる妹を誰か率にけむ

の如きは、明らかにその表現法に外邦文學の影響を見ることが出来る。かうした傾向は萬葉集に至つて著しく見ら

れる。又、或は行幸に陪して作を献じ、或は讌飲に侍して歌を作る等、いづれか彼土の影響でないといはれよう。また、

男子やも空しかるべき後の世に語りつぐべき名は立てずして 卷六、山上憶良

世の中を何にたとへむ朝びらきこぎいにし船の跡なきがごと 卷三、滿誓沙彌

のやうな思想は、現世的であり、樂天的であつた古代人の思ひも及ばなかつたことで、支那・印度思想の感化と見なければならぬ。

かく外邦思想の感化はその歌詠の上にも見られるとはいふものゝ、なほ大體に於いて、太古の世を去ること甚だ遠くはなく、且つ諸般の文化の翹造の時代であつたが故に、彼等の心は朴直であり、簡素であり、且つ進歩的でもあつた。故にその作品亦徒らに先人の躰を追ふことをのみ能事とせず、わが偽らぬ感情を端的に表白することを忘れなかつた。この集の歌が後のものに比して遙かに貴く、生き／＼として直に讀む者の心奥をつくものゝあるのはその故である。

次に注意すべきことは、歌人として後昆に傳はるべき人々のこの時代になつて現れたことである。記・紀の時代には歌は傳説と共に傳り、歴史と始終して残つたので、作家は同時に史上有名な人々であつた。然るにこの時代は然らず、もとより史上の人物は概して教養に富んで居り、趣味も洗練せられてゐたらうから、作家としても有數なものであり、且つこれを傳へる者が彼の周圍の者であつた關係から、貴族等の作が多く残つてゐることは前述の通りであ

る。しかし史上に何の足跡をとゞめず、その人の出現と否とが歴史に何の痛痒も感じない人達で、歌人として不朽の名を残した人々がこの時代から著しく殖えた。柿本人麻呂・山上憶良・山部赤人・高市黑人・高橋蟲麻呂・田邊福麻呂などはその尤なる者である。

なほいふべきは本書の書記法についてである。所謂かな文字は既に多少の萌芽を奈良朝末に見てゐたとはいへ、なほ、そが大成せられ流通せられるまでには至らなかつた。乃ち本書亦幾多の不便を侵しつゝ漢字を専用せざるを得なかつた。古事記に於て既にその巧みな使用法を見たが、本書に至つては實にその妙を極めたと云つてよからう。用字法については釋春登に萬葉用字格(文化七年)の著があつて、その大概を知るに便である。とにかく

一、漢字を訓讀したもの。

吾、君、秋、年魚、神祇、京都、白水郎のやうな所謂正訓。

暖、寒、乞、丸雪、未通女、猶預不定のやうな所謂義訓。

三、漢語を音のまゝ讀んだもの。

餓鬼、法師、布施、擅越のやうな佛語系統のもの。

三、漢字の音を假りたもの。

阿、伊、宇、安、吉のやうな一字一音のもの。

南、念のやうな一字二音のもの。

四、漢字の訓を假りたもの。

射、蚊、荷、市、跡、常のやうな一字一音のもの。

五十、嗚呼のやうな二字一音のもの。

五、わざと工夫して、たはむれた書き方をしたものを、所謂戲書。

重二、十六、義之、山上復有山などやうのもの。

のやうに、その用法は自在である。だからその當時はとにかく、やゝ時を経ては何と訓むべきか、わからなくなつてしまふのは當に然るべきことである。村上天皇の御代には、既にその傳を失つたによつて、天曆五年梨壺の五人(この五人のことは後に説くであらう)が勅によつて訓法を勸へた。即ち古點である。ついで、大江佐國・大江匡房・藤原基俊等が補つたのを次點といひ、更に鎌倉時代のはじめに律師仙覺の研究によつて、古點と次點とに勸へ及ばなかつたものを訓んだのが新點とよばれる。かくて江戸時代に入つて、自由討究の盛に興るに及んで、萬葉の學も長足の進歩を來し、古訓も更に訂正せられることが多く、今日に至つたが、なほ決定的の訓み方の得られぬ歌もある。

## 七、萬葉の歌人

萬葉集の歌は、おほよそ飛鳥・藤原朝の歌と、奈良朝の歌とに分けて見ることが出来る。飛鳥・藤原朝とは天武・持統・文武三帝の御代をいひ、奈良朝とは元明天皇以後をさすことはいふまでもない。そしてその中心をなす歌人は、前者にあつては柿本人麻呂であり、後者にあつては、聖武天皇の御代を界線として、前に山部赤人・山上憶良・大伴旅人等があり、後に大伴家持等がある。今これらの歌人達を一瞥しよう。

人麻呂は、その本貫については、或は大和といひ、近江といひ、又石見ともいつて、異説區々である。天智天皇頃に生れたものらしく、持統・文武の兩朝に歴任し、和銅年間に、病んで任地石見で死んだ時は四十八九歳であつたらしい。その精細な閥歴は知られないが、官位は極めて卑かつたらしく、後の古今集の序に「おほきみつのくらむ」といふのは當らぬものゝやうである。古く人麻呂家集と稱せられた集のあつたことは萬葉集にも見えるが、それは今日に傳はらない。今傳へるそれは後人の輯めたもので、憑據も頗る疑はしいものである。所詮彼の歌は萬葉集に載るところの約八十首以外に信すべきものはない。

人麻呂の歌は、内容的にこれを見ると、從駕の歌、傷亡の歌、回顧の歌、いづれにしても頗る單純なものゝみで、特にいふべきこともない。しかしその歌として優れてゐる所以は、實にその表現の方面に存するのである。その作るところは、長歌・短歌・旋頭歌の各體に亘つてゐるが、その力量の最も窺はれるのはいふまでもなく長歌である。そ

の結構は祝詞にも比すべく、雄渾にして莊重、しかも全篇を貫くに詩的諧調を以てしてゐるところ、斷じて他の追隨を許さない。枕詞・序詞の用法、譬喩・擬人の驅使、對句・疊句の應用、一として不可なるものはない。試みにその作中最長篇である高市皇子尊城上殯宮の時によめる歌をとつてこれを檢して見よ。人麻呂の技巧は間然するところなく善用せられて、詩的效果を高めてゐることに氣附くであらう。

戀愛と鬭争との外を知らなかつた古代人の生活から、文化漸く進んだ萬葉時代に入つて、人々は漸く自然を愛することを知り、これを詩材として歌詠するやうになつた。そして自然愛を詠じたすぐれた歌人は山部赤人である。赤人の生涯は亦知ることが出来ないが、人麻呂よりは二三十年後れて奈良の御代に入つてからの人であることは、天平八年聖武天皇の芳野行幸の供奉をしてゐることによつて明らかである。そしてその足跡東は下總に至り、西は伊豫に及んでゐる。歌は赤人集といふものはあれど、後人の纂めたものである、なほ萬葉集によるの捷徑たるに若かぬ。

赤人の歌は長歌よりは短歌に、その自然を直観した眞率な表現を窺ふことが出来る。長歌ではその技巧に壓せられて眞の自然の姿は蔽はれて了つてゐる。かの有名な不盡山を詠める歌にしても、神岳に登つて詠んだ歌にしても、さうした點は認められる。

わかぬ浦にしほみち來ればかたをなみあしべをさしてたづ鳴きわたる

ぬば玉の夜のふけゆけばひさき生ふる清き河原に千鳥しば鳴く

などいかによく客觀的に自然をうつしてゐるかを見るべく、

春の野にすみれ插みにと來しわれぞ野をなつかしみひと夜ねにけり  
に、その限りなき自然愛を掬みとることが出来るよう。

家持が「幼年未<sub>レ</sub>運<sub>ニ</sub>山柿之門<sub>コト</sub>といひ、大伴池主が「山柿之壽泉、比<sub>レ</sub>之加<sub>レ</sub>蔓」といつてゐるが、このやうにならべ稱せられる「柿」が人麻呂であることは論がないけれども、その「山」は普通に赤人と考へられてゐるけれど、又これを以て山上憶良に充てる説もある。げに憶良は家持には大きな感銘を與へた作家であつた。

憶良の死は天平五六年の交であつたらしく、とすれば享年は七十四五であつたことはその沈痾自哀文によつて知ることが出来る。大寶元年に遣唐少録として渡唐したのは四十二歳の時であつた。和銅七年從五位下、養老五年頃に東宮に侍し、神龜三年頃に筑前守となつて鎮西に下つた時はもう六十七の高齡であつた。都に歸つたのはいつかは知れぬが天平四年頃か。その後の彼は蓋し貧窮と疾病とに苦しめられつゝ、後の世に語りつぐべき名をえ立てぬを歎じながら死んで行つたのである。

現存せる憶良の歌の多くはその筑前在任中及びそれ以後のもので、それらは殆ど萬葉集の卷五に纏つてゐる。彼の思想はその教養が然らしめたのであらう、多分に外來思想の影響を受けてゐる。しかも遂に捨てかねたものは、人間愛に根ざす現世への愛着である。貧窮問答の歌はその傑作であり、そこに表現せられた大きな人間愛の精神は殆ど無技巧に近い表現の中に躍動してゐることを認めざるを得ない。

憶良等は今はまからむ子泣くらむそのかの母もあを待つらむぞ

富人の家の子等の著る身なみくたしすつらむ絹綿らはも  
稚ければ道ゆき知らじまひはせむ黄泉シヤクの使おひてとほらせ  
にその純情を見ずや。

憶良の歌の多く傳つたのは、彼が筑前在任中に知遇を得た大伴旅人の賜といふべきか。旅人は神龜年間に太宰帥となり、天平二年大納言に遷り、翌三年從二位を以て薨じるまで、順境な生涯を送つた。おだやかなその境遇はその歌作の上にも反映して、その作は平明にして快適である。その思想は支那の老莊思想の影響をうけてはゐるが、たゞその退嬰的な半面を取つてゐるのみである。讃酒歌は明らかにこれを歌つてゐる。

この世にしたのしくあらばこん世には蟲に鳥にもあはれはなりなむ  
生るれば遂にも死ぬるものにあればこの今生なる間はたのしくをあらな

旅人の子は即ち家持である。天平十八年越中守となり、少納言・兵部少輔・同大輔・右中辨を歴て天平寶字二年因幡守となつた。その歌は天平八年以後の作が残つてゐる。青年時代に彼を過つて幾多の女性があつた。その女性達と贈答した歌詠は多く卷三・四・等に残つてゐるが、その作はいかにも繊細な感傷的なものであつた。かくて越中守となつて漸く戀愛生活を脱したが、この間に古歌の研究がなされたものと見てよい。そして都に歸つて来て、兵部に職を奉じては、こゝに名家大伴氏の家長として、國家といふ觀念が強く彼に生きて來た。喩族歌はかくて生れる。

歌人として家持の天分はさしたるものではなかつた。憶良のやうに思想的にも深くはなく、人麻呂のやうに技巧的にも豊贖ではなかつた。しかし國家に對し、傍人に對しての心からの愛は、その作の中に一脉の生氣を送つてゐることを認めないわけにはゆかぬ。なほ萬葉集が今日に残るを得たのは、家持に負ふところが蓋し尠少でなかるべきは前節に既に述べたとほりである。家持の晩年はかなり數奇を極めてゐる。一度惠美押勝の失脚に連坐し、再び桓武天皇の延暦元年に氷上川繼の反に坐して罪せられ、間もなく宥されて延暦四年に死んだが、その死後、族人繼人が藤原種繼を殺した事件によつて、三度罪故人に及び、こえて同二十五年漸く本官に復せられたのであつた。

その他傳説を材料とした高橋蟲麿や、女流歌人としての額田女王・坂上郎女や、その外にもなほ傳ふべき作家は多いけれど、萬葉集を代表する作家として以上の諸家を擧げるとどめて本節を終る。

## 八、當代の漢文學

支那から文字が移入せられてから、漢文が作爲せられたことは、さして遠からぬ時代のことであることは既に述べたとほりである。しかしその當初にあつては勿論實用の文章に限られてゐたであらうことは想像するに難くない。その文學的作品はそれからかなり後れて作られたであらう。現存のそれは、聖德太子の行啓し給うた折に書かれた伊豫國道後温湯碑文(釋日本紀に見える)を以て最古のものと考えられるが、その作者は或は百濟僧惠聰であるまいかといはれる。その盛んに興つたのは近江朝以後のことである。天智天皇英邁に在して銳意治を圖り給うたにより、天下泰平を樂んだ。「旋招文學之士、時開置醴之遊。當此之際、宸翰垂文、賢臣獻頌、彫章麗筆、非唯百篇」とは懷風藻序のいふ

所である。蓋し事實であつたらう。しかしそれらは「時經亂離、悉從煨燼」と同上にいふ如く、湮滅したつてたゞ弘文天皇の御製五言二首をとゞめるに過ぎない。

爾後飛鳥・藤原朝を経て奈良朝に及んで、漢詩文は歌と並んで行はれたことは懷風藻や萬葉集を見てこれを知ることが出来る。しかし歌の多くが天真の感情を眞率に表現してゐるに對して、漢詩文は從駕、陪宴の作多く、ともすれば題詠に流れて、歌のやうに讀者を動すものゝ少いのは蓋し己むを得ぬところであらう。

懷風藻一卷はその撰者を詳にしない。或は淡海三船(延暦四年歿六十四)を以てその撰者に擬する者があるけれども、その據るところを知らない。卷末載せるところの亡名氏こそはその撰者ではないかと疑うた人もあり、武田祐吉氏は葛井連廣成をその亡名氏にあてゝ説を立てゝゐられる。そはともあれ撰者はその序の末文に

余以薄官餘閑、遊心文圃、閱古人之遺跡、想風月之舊遊。雖音塵渺焉、而餘翰斯在。撫芳題而遙憶、不覺淚之泣然、攀緜藻而遐尋、惜風聲之空墜。遂乃收魯壁之餘蘊、綜秦灰之逸文、遠自淡海、云暨平都、凡一百二十篇、勒爲一卷。作者六十四人、具題姓名。并顯爵里、冠于篇首。余撰此文、意者、爲將不忘先哲遺風、故以懷風名之云爾。于時天平勝寶三年、歲在辛卯、冬十一月也。

といつてゐるので、撰述の年代、動機等を知ることが出来る。

懷風藻の詩人としては弘文天皇・大津皇子等は申すも畏し、藤原宇合・石上乙麻呂、又かの葛井廣成等は勝れた作家であつた。宇合が常陸に在つて京師なる友に贈つた詩や、不遇を悲しむ詩の如きは出色の作ともいふべく、乙麻呂

は朝譚を蒙つて南荒に飄寓して銜悲藻二卷の作をなしたといふ。懷風藻には四首の作をとゞめてゐる。

懷風藻以後詩は歌の衰へると反對にますます盛に作られた。安倍仲麻呂・淡海三船・石上宅嗣等は文名の高い人達であつた。仲麻呂は元正天皇の靈龜二年(七三)留學生として入唐したまゝ、彼土に留り朝衡と名を改めて唐の朝廷に仕へ、天平勝寶年中歸朝しようとして果さず、遂に光仁天皇の寶龜元年(一四三〇、唐の代宗の大曆五年)彼土で歿した。王維・李白等は彼の詩友であつた。

かくて詩文の勢は漸次歌を壓したまゝ、次代に入るのである。

## 第二章 中古の文學

### 一、序 説

萬葉集の結集あつて以後國文學は姑く暗黒の裡に没してしまつた。しかも機運熟して復興の緒についた時、天下の大勢はかの時代とは全く一變してゐた。帝都は青丹よし奈良山をこえて、つぎねふ山城の國に遷り、前代の權門は多く失脚して、北家藤原氏のみ獨り榮えてゐた。そして冬嗣・良房に至つて後代權權の基礎が確立したのであつた。邊塞武を用ふることが全く熄んだのではない。しかし足一度都門に入れば、牛車ゆるく軋るところ、大路の楊柳は櫻花と相映じて、時じくの春を憐はしめ、都人士はひたみちに歡樂の夢を追うて、悠々讌飲を樂しみ、或は堂塔徒らに輪奐の美を競うて、佛事供養に國幣の空しく費ゆることを顧みず、うち見るところこの世ながらの淨土を樂んでゐる

のであつた。

かくて昌平日久しきにつれ、上代樸野の風は銷磨されて文雅の氣は滿朝に及んだ。京師に大學寮あつて諸生の教化を掌り、その他諸家の私學は自家の子弟を教養した。弘文院(和氣氏)・勸學院(藤原氏)・學館院(橘氏)・獎學院(在原氏)等はその重なるものであり、空海の綜藝種智院は宗教々育を施す特殊の學舎であつた。かうして教育機關は備はると雖も、その恩恵を蒙る者は名門の子弟に限られ、庶民は文化の餘澤をすらうけることが出來ず、永へに社會の下層に沈淪して貴族の顧使に甘じてゐなければならなかつた。かうした状態の下に、教養ある者は貴族のみであつたが故に、當代の文學も亦自然の結果として彼等によつて制作せられ、彼等によつて鑑賞せられたことは自明の理である。

然らば彼等の生活はどうか。彼等は、たゞ宮廷と、それを遶る彼等同族の間のみを活動の舞臺として、またその他を知らなかつた。國家の隆替も、極言すればその眼中にはなかつた。家門の繁榮もわが榮華の前には犠牲に供せられる。而してその權勢を得る捷徑は外戚たるにある。後宮に進めまわらせた女子が恩寵を得ると否とは彼等の死活に關する大問題であり、そが皇子を生み奉ると然らざるとはまたその休戚に關した。かくて彼等は各自分に應じて榮達を求めざるなく、阿附迎合黨同伐異はその日常である。

又當時の朝廷では施すべき政策もなく執るべき政務も殆どない。あるものは、たゞ煩瑣な儀禮のみであり、それに附隨して管絃の演奏と、詩歌の贈答とがあるばかりである。それに堪へ得るだけの教養と、優婉な容儀帶佩とは當代の貴族に要求せられる。宮廷で行はれるほどのことを、また權門はこれをその私邸でも行つた。かうして當代人士の

生活はおのづから享樂的生活に墮してゆく。

かくて彼等の生活には些の清新味がなく、單調で退屈なものであつた。この結果その興味は自ら女性の方へむかふ。實に當時の男女關係は後世の道義的見地から見れば、頗る亂雜なものであつた。當代文學はさうした世相を隨所に反映する。一人の男子が數人の妻を擁してゐることはいはずもがな、有夫の婦が他の男と關係するが如きことも屈指に違がない。繼父母と子女との戀、異母兄弟の戀、甚しきは同母兄弟の戀愛なども文學の題材とせられてゐる。しかも彼等の戀愛生活も亦徹底したのではなく、眞劍味を缺く遊戯的なものであつた。

佛教亦當代人士の生活に影響するところが多かつたこと前代と異るところがない。南都の諸宗は遷都と共に漸く衰微したといへ佛教の信仰それ自體が衰へたのではない。前代にその端を開いた神佛習合、本地垂迹の説は、この期に入つて益々發展して人心に浸潤すること深かつた。本朝の劈頭、最澄・空海の二僧出で相ついで渡唐傳法して、顯密の二教を弘布してより世を擧げて尊信すること頗る厚かつた。しかもその目的とするところは南都佛教と相等しく鎮護國家の爲めに神明佛陀の佑助を仰がうとしたものである。臺密と東密と相對して事相の隆盛を來し、國利民福のだから治病安産の小まで、皆修法加持によらないものはなかつた。しかも深遠な教相に至つては當代人士を動すに至らなかつた。而して緇衣の徒弟權門と結んでその勢力を張らうとする觀があつた。

かく狭小の世界にあつて現世の享樂を貪つてゐた彼等の生活はあくまで中正の美を求めてやまなかつた。彼等は決して極端に走り得なかつた。戀をしても、情の動くまゝに盲目的になることの出來なかつた彼等である。そこから生れ



る文學には熱烈奔放なものは見らるべくもないが、さりとて乾燥無味なもの亦ない。整齊優麗こそは實に中古文學の姿である。

さて、平安奠都以降鎌倉開府まで約四百年、文學推移の大勢に従うて時期を小分すれば、大體次の三期とすることが出来る。

(イ)平安奠都から寛平の頃まで(一四五〇—一五五〇)上代の末をうけて、本期の初頭は漢文學のみ榮えて、さしにも萬葉集で發せられた赫奕たりし光輝も、全く見る影もなくなつてしまつた時代であつた。既にいつたやうに前代に萌芽してゐたかな文字が漸く發達したのもこの時期の頃であつたらしく、この期の末には、その使用もかなり盛になつて來たものゝやうである。なほ、今まで影を潜めてゐた國文學は貞觀以後再び興隆の機運を示しつゝ次期に入る。

(ロ)醍醐天皇の御代から白河天皇の頃まで(一七五〇—一八五〇)前期の終に遣唐使の廢止せられたことは、邦人にとつて支那文化からの獨立を暗示したものと如く、醍醐天皇の御宇に至つて國文學は一大飛躍を示すに至つた。即ちこの二百年間は實に平安朝期の核心をなす時代であつて、その初頭に古今和歌集の勅撰があつて、歌壇に一時期を劃し、爾後頻繁に行はれる歌集勅撰の魁をなした。實に前百年は律語の時代ともいふことが出来る。それに對する後百年は散文の時代とも見られよう。即ち清少納言・紫式部等の閨秀作家が輩出して、文學史上不朽の名作である、枕草子・源氏物語などが殘された時代である。なほこの時期に於て注意すべきことは歌論が漸く勃興しようとする傾を示して來たと、歌がこの期の末葉に入つて沈滯の極から何等かの轉回をしようとする萌しを見せて來たことなどである。

(ハ)白河院々政の世から頼朝開府まで(一八五〇—一九五〇)御堂關白の世を頂點として藤原氏の勢は峠を下り初めたが、此の期に入つてはますますその勢は微弱となりしかもそれに代るべき新勢力は生れようとして、まだ明らかに形を成さない時代である。政治上の中心を失うた時代は文壇的にも不振であつた。過去の盛時を回顧追慕するの情は、發して雜史となつて現はれ、新しく興るべき文學への暗示は今昔物語等を産んだ。一方前代に萌した歌論はこの期に入つて歌の専門家を生じ、二條六條の兩家は歌壇に對立してゐたが、結局二條家の俊成は二流を合して、歌壇に典雅の風を定めて更に次代の大成を待たうとする。

## 二、詩文の隆盛

大學寮に諸分科のある中に、文章道獨り盛で、明經・明法等の諸道はこれに壓せられ、博士とのみいへば文章博士をさすやうな有様であつたに徴しても、いかに文章・詩賦の當代に重んじられたかは察せられよう。苑遊・畎獵相ついで行はれ、その都度詩賦は唱和せられたこと、奈良の御宇以來の事で、さながら唐朝風俗の移入であつた。「文は文案・文選」と清女もいつたやうに、文選と白氏文集とは當代人士の必讀の典籍であり、それに倣うて彼等の詩文は作爲せられた。

抑も平安朝の初頭に當つて好文の天皇の君臨し給うたことは、やがて文學の盛を致した所以であつた。平城・嵯峨・淳和の三帝は相次いで立ち給うたが、いづれも詩文を好み給うた。殊に嵯峨天皇(承和元年)は天資英邁にましく、

豊麗な詞藻は煥發せる叡才と相俟つて聖作も多く且つすぐれてゐた。而して皇子皇女にも亦優秀な詩才ある方も多かつた中にも、有智子内親王はその尤なる者におはし、後世の評家或は初唐の遺響があるとまで評し奉るほどである。その他權門に藤原冬嗣等、亦詩作に名を得てはゐたが、作家として嶄然頭角を現はしてゐた者は、僧空海と小野篁とであつた。

空海(承和二年)が教界の偉人であることは今更いふまでもない。しかし詩人として亦當代に特異の地歩を占める。その在唐時に(彼が入唐したのは延暦二十三年(一四六四)であつた)彼土の才人をして華人も亦かくの如きは稀であるとして、嗟嘆せしめたといふによつて、その作詩に巧みであつたことは知られよう。その詩文は集められて遍照發揮性靈集にある。この集はその弟子眞濟が師の遺篇を輯めたものであるが、卷中、

閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞。一鳥有聲人有心。聲心雲水俱了了。(後夜聞佛法僧鳥)

の一篇は藤原惲窩(元和五年)が稱して壓卷とするところのものである。又、三教指歸は壯年の作であるが、華麗な駢體文は、その縦横の才を見るに足るものがある。なほ彼にはかうした創作の外に詩文の法格を論じた文鏡秘府論のあつたことは注意せねばならぬ。後に歌論が起るに至つたのもこれらの書に刺戟せられるところが無かつたとは言ひ得ないだらう。

篁(仁壽二年)は參議岑守の子、父子ともに詩文に秀でてゐた。嵯峨天皇の恩寵を蒙つてゐたが、性狷介、時に不測の厄に罹ることもあつた。西道謠(今傳ら)を作つて遣唐使の專横を痛憤し、ために流謫の苦を嘗めた如きはそれで

ある。詩篇の遺るもの多くはないが、才華は遙に時流を抜き、詩才唐の白樂天と相通じてゐたと稱せられる。

反覆單于性。邊城未解兵。征夫朝摩食。戎馬曉寒鳴。帶水城門冷。添風角韻清。隨頭一孤月。萬物影云生。

色滿都護道。光流欣飛營。邊氣候侵寇。應驚此夜明。(奉試隨頭秋月明)

なほ篁は當代の歌人として、

わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人にはつけよあまの釣舟

思ひきやひなの別れにおとろへて海人の繩たぎいさりせむとは

などの詠を古今和歌集にとめてゐる。

奈良朝に懐風藻の撰のあつたことは既に述べた。當代に入つては詩文の隆盛につれて撰集亦相次いだ。而も彼が私撰であつたに對し、これは盡く勅撰であることは注意すべきである。即ち

(一) 凌雲新集は弘仁五・六年の交に成り、延暦以降弘仁に至る二十三作家九十首の詩を集めてゐる。小野岑守勅を奉じ、菅原清公・勇山文繼撰に與り、賀陽豊年亦これに干與した。

(二) 文華秀麗集は弘仁九年に成る。藤原冬嗣を總裁として、仲雄王・菅原清公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤等これ撰修した。作家二十八人、詩百四十八首、分つて三卷とし、類を以て遊覽・宴集・饗別・贈答・詠史・述傳・艶情・樂府・梵門・哀傷・雜詠等に項を分けてゐる。從來の諸集が、或は年代順(懷風)により、或は官位順(凌雲)によつて次第してゐるに對して、この集が類題の法をとつたことはやゝ注目し得る。

(三)經國集は二帙二十卷の大部の集であつた。嵯峨上皇の御企てと覺しく、淳和天皇の天長四年に成つた。良岑安世を總裁として、滋野貞主・南淵弘真・菅原清公・安野文繼・安部吉人がその撰に與つた。前二集が當代の作のみを集めたに對して、これは遠く古人に溯つて、その作を探りしかも詩のみならず、賦・序・對策をも收め、作家も百七十人に及ぶといふ。但し惜しい哉、今日に完本を傳へず、たゞ六卷を残してゐるのみである。

以上當代の詩文を概観して來た。要するに當代の詩文は、大體に於て題材より表現に至るまで、すべて唐朝の模倣といつて可なるべく、これによつてわが感懐を端的に表現することは到底凡手のよくするところではない。嵯峨上皇の崩御、空海・篁等の物故の後、詩文は漸く衰微しはじめた。貞觀から寛平に互つて大江音人・島田忠臣・橘廣相・都香良・菅原道真・紀長谷雄・三善清行等の諸家が輩出して、詩壇亦濟々たる多士を擁するが如くは見えるけれど、技巧いよ／＼進んで、光彩ますます／＼薄く、到底大同・弘仁の盛時に比すべくもない。しかもこの間國文學復興の機運が暗黙の中に動きそめたのは自然の數である。

附けていふ修史の業は、前代の日本書紀の後をうけて、續日本紀は延暦十六年に、日本後紀は承和七年に、續日本後紀は貞觀十一年に、文德實錄は元慶二年に、三代實錄は延喜元年にそれ／＼勅撰せられたが、以後その事が中絶した。この五部を日本書紀に併せて六國史と稱せられる。

### 三、六 歌 仙

外國の語で、外國の詩形に、わが情感を盛らうとすることは到底不自然である。故に詩人篁もその切々の情を現はさうとした時には歌を以てした。かくて歌は邦人にはどうしても忘れ得ない文藝の形式であつた。しかも詩文隆盛の時運に壓されて、當代の歌として明らかに指示し得るものこそ甚だ多くは聞えないとはいへ、歌そのものは決して滅びてしまつたのではなかつた。桓武天皇にも、平城天皇にも、嵯峨天皇にさへも聖作と稱せられるものは傳へられてゐる。たゞ歌人として聲名を後昆に垂れてゐる者がないだけである。強ひて求めたなら猿丸大夫の名を挙げられよう。しかしその作は一首も知られてゐない。たゞ詩人篁のみが平安朝初葉の歌人として、その名とその作とを今日に残してゐる。なほ古今集の中に「よみ人しらす」として採擇せられてゐる歌の中に、當時の作でないかと思はれるものはいくらかもある。すなはち歌は漢詩文の蔭に、黙々として靜な歩みをつゞけてゐたのであつた。

かうして來たのが六歌仙の時代である。古今集の序に「近き世にその名きこえたる人」として、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・僧喜撰・小野小町及び大友黒主の名を擧げて、各その歌を批評してゐるところから、世にこの六家を稱して、六歌仙といふ。中に就いて業平最もすぐれ、遍昭・小町はこれと雁行するに足るべく、他の三家に至つては作歌の傳はるものもすくなく、その眞價を知るべくもない。

僧正遍昭は、桓武天皇の皇子で經國集を撰進した良岑安世の男、俗名を宗貞といひ、年少風流の貴公子であつた。仁明天皇の寵遇を得て、累進して從五位上左近衛少將・藏人頭に至つたが、天皇の崩御(嘉祥三年)にあうて、哀悼のあまり叡山に上つて剃髮し、道心堅固に行ひすました。陽成・光孝の御世の頃に僧正に任ぜられ、洛北雲林院に住し、

又花山に元慶寺を創建してその座主となつたが、寛平二年(一五)、七十六の高齡で示寂した。その歌は婉雅輕妙であつて、しかも俗に墮しないところに、非凡の手腕を窺ふことが出来る。たゞし、ともすれば技巧の陰に、その天真の蔽はれようとする嫌は認められる。「歌のさまは得たれど、まことすくなし」と古今集の序に、評せられた所以である。

あまつ風雲のかよひち吹きとちよおとめの姿しばしとめむ

山風にさくら吹きまき亂れなむ花のまぎれに君とまるべく

たらちねはかゝれとてしもぬば玉のわが黒髪をなですやありけむ

遍昭の歌を集めた遍昭集といふものが一卷あるが、かなり杜撰なものである。

業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子、父親王の上表によつて天長三年(八六)兄行平等と共に姓を在原と賜うた。從四位上右近衛權中將兼美濃權守を以て元慶四年(一五)に歿した。年五十六。體貌閑麗・放縱不拘とは國史の彼を評した語であつた。豐潤な感情と富麗な詩才とは相俟つて珠玉の詠となつて千歳の下なほ永久の生命をもつてゐる。歌はずにはゐられない衷心の聲は、時にその表現の技巧を待てぬものがある。所謂「ころあまりてことば足らぬ」感みは、やがてさうしたところから生じる。とはいへ、技巧を無視して顧みなかつたところに、えもいはぬ情熱の閃きは、われらの胸裡に徹せずにはおかないのである。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして

わすれては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふけふとは思はざりしを

その歌を集めて業平朝臣集一卷があるが、杜撰な點では遍昭集と同じやうなものである。

小町はその傳を詳にし難い。出羽國司の女であるともいふが何の根據もない。その生涯に關して、幾多の説話が物語られてゐるけれど、盡く妄誕にして信を措くに足るものは一もない。たゞその作品の上から考察して、ほと前二人者と時代を齊しくすることが想像せられるにとゞまる。歌は濃艶纖柔の風をおび、多感の性情は自ら詠歌の上にあらはれてゐる。女流作家としては、古今集中に群を抜いてゐるのみでなく、全平安朝を通じて比倫稀な作家といふべきである。「あはれなるやうにてつよからず」とは、古今集の評語である。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを

花のいろはうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに

わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

小野小町集一卷を奉書類説に收めてあるが、その據り難いこと遍昭集・業平朝臣集以上である。

「詞たくみにて、そのさま身におはず」といはれた康秀は、元慶三年(一五)に縫殿助になつた。歿年はわからない詞かすかにして、はじめをはりたしかならず」と評せられた喜撰は、洛南宇治山に隱栖してゐた。歌學の書に喜撰式といふのがあつて、その作といはれてゐたが、偽書だらうとは近來の定説である。黒主は近江滋賀郡の大領で醍醐天皇

の御世の大嘗祭の御屏風の歌を奉仕してゐるから、他の諸家よりは後輩であつた。さてこの三家は到底前の三家と比肩すべくもない。「たゞそのさまいやし」といはれた黒主の詠が、古調を交へて、やゝ注意すべきものゝあることをいへば足る。

陽成天皇の元慶六年(一五)に日本紀の竟宴に和歌を召し給ひ、なほそれと前後して在民部卿(平)家の歌合が行はれた。ついで宇多天皇の御代には后宮歌合・是貞親王家歌合・朱雀院女郎花合などが行はれ、寛平四年(一五)には新撰萬葉集が撰せられた。又菅家萬葉集ともいひ、菅原道真の撰と傳へられる。眞字で書いた歌の傍に七言の詩を添へたものである。とりたてゝいふほどのものではない。かくて時運は駁々として國風興隆にむかつて進みつゝあつた。

#### 四、小説の源流

前節に述べた國風興隆の機運は當に來るべくして來たものであつたに相違ないが、こゝにそれを促進するに與つて力ある一現象を看過することは出来ない。即ち假名文字の發達がそれである。

漢字を假借して國音を寫すことがかなり悠遠の時代に於てなされたであらうことは前章でこれを述べた。しかしそれが字畫のこみ入つてゐる漢字であるに於て、甚だ煩瑣であることは想像するに餘りあるだらう。師の講説を筆起しようとする學生・學僧達がこれに悩んだであらうことも考へ得られる。こゝに於て自らの心覺えに字畫を便宜省略して用ひたらしい。かうしたところから假名文字は發達して來る。經文に傍訓を施したものゝ中に假名文字の源流が求

められるのは這般の消息を語つてゐる。假名及假名遣沿革資料(大矢透氏)によれば、この種の資料の最も古いものは清和天皇の天安年間(元年は一)のものであるが、なほ古く溯ることの出来るのは確かである。勿論今日行はれる片假名、平假名が判然と區別せられたのはいつの頃であつたかはとにかく、その萌芽は随分古いといつてよからう。かくして假名文字が發達して漸く世人の間に弘布せられるに至つて、各人をしてその思想を自由に發表するに多大の便宜を與へ、その結果、散文の文學が擡頭して來る。但し、假名文字は女文字と稱せられて、苟も士たる者は漢字を以て漢文を綴ることを本則としてゐた。當時の作品に作家の名を缺くのは斯うしたところからも來てはゐないか。

かにかくに六歌仙の時代——と考へられてゐるが——に、竹取物語が出て、はじめて國文學に小説の作を加へた。今竹取を説くに先だつて聊か本邦小説の源流を探らう。

古事記は既に述べたやうに一篇の大叙事詩である。物語られてゐるものは英雄譚であり、戀愛譚であつた。萬葉集にはこれから系をひいて、幾多の物語詩とも稱すべきものを含んでゐることは注意すべきことである。こゝに唐朝文學の輸入と共に遊仙窟・列仙傳等は耽讀せられ、その影響をうけて、萬葉集の時代に於て發して神仙譚となつたのである。拓枝傳・浦島子傳・比治眞井の物語などがそれである。かうした戀愛譚・神仙譚等から平安朝の物語が導かれる。

「物語のいで來はじめのおや」といはれる竹取物語はいつ頃に書かれたものか、これを稱すべき明徴はないが官名「頭中將」といふこと、又源氏物語の記載などから推して、弘仁以後延喜以前の作と見るのが穩かであらう。この書

は假りに竹取翁の子となつて人界に生をうけた流謫の仙女な上竹のかぐや姫が、再び昇天するまでの人間に於ける生活を描いた傳奇である。既に超自然人たるかぐや姫の生涯は、その出現から世の常でなく、開卷既に著しく童話的色彩を帯びてゐる。彼女を圍繞して、その愛を得ようとして懸命となつてゐる五人の皇子・公子の狂態は、著しく現實の世相を誇張して描いてゐるとも見られる。しかも仙女は遂に彼等のものではなかつた。人界の王なる帝の御力でさへ、彼女の清淨を如何ともすることを得させ給はぬ中に、最後の日が來た。さすがに猛き衛府の兵どもも、愕然たる中に悲泣せる翁嫗に心をひかれつゝも、天の羽衣をうちはおつて、月光の中に靜に人界を離れゆく仙女よ。作者は飽くまで詩人的感興に浸りつゝ筆をやつてゐる。最後に帝は姫の遺した靈藥を山嶺に焼かし給うた。富士の頂に今も立つ煙はやがてその焚藥の煙だと作者はいつて巻を終へてゐる。

本書の出典については種々の説が立てられる。田中大秀(弘化四年)の竹取物語解附録に、此物語に似よりたる古事を列擧して殆ど餘すところがない。それによれば和・漢・梵に亘つて幾多の典籍の中にその類似點が発見せられる。しかしその一々を作者が意識して用ひたであらうか。それは容易く首肯し得ないであらう。竹取の翁といふ名は萬葉集卷十六に見えてゐるが、彼と此との間に説話としての直接の交渉はなさうである。

要するに本書は既に傳奇であるが故に、その人物の性格描寫の點に於て至らぬものゝあることは己むを得ない。説話の首尾の整然たる點、文章の簡朴な點などは、作者の凡手でないことを明らかに示してゐる。

竹取と並び稱せられるものは伊勢物語である。しかしこの兩書の間には截然たる區別がある。彼は一貫せる傳奇で

あるが、此は個々の小話の結集である。彼は神仙譚の要素を多分にもち、此は戀愛譚の系統をひいてゐる。彼は純たる散文であり、此は散文と律語との交錯に成る。

伊勢物語は百二十五段(段の數へ方については學者によつて多)から成る歌物語である。抑も文學史の上で歌物語は遠く萬葉集に淵源を有してゐる。その卷十六なる有由縁歌はやがてそれである、とは、夙に學者が注意してゐるところである。殊にその詞書に「昔者有<sub>二</sub>娘子、字曰<sub>一</sub>櫻兒、云々」といひ、「昔者有<sub>二</sub>壯士與美女、云々」といつてゐるのを、本書の各話が、多く「むかし男ありけり」で筆を起してゐると比べる時、蓋し思ひ半にすぎるものがあらう。

さて、源氏物語(合)に、「次に伊勢の物語に正三位をあはせて云々」といひ、「よの常のあだごとの、ひきつくりひかされるにおかれて、業平が名をやくたすべき」とあるに徴して、寛弘の當時伊勢物語と呼ばれてゐた物語は、業平を中心としたものであつたことを知るべく、これを現存の本書がやはり業平の歌を中心とした歌物語であるによつてその内容の寛弘の昔から殆ど變らないものであると見てよい。又古く本書は既に平安朝の頃から「在五が物がたり」、「在五中將の日記」などもよばれてゐたものらしく、「中將の集」と更級日記にあるのも亦本書のことだと考へる學者もある。

かく「在五が物がたり」など稱せられたことによつても知られるやうに、本書にある歌物語は多く業平に關してゐるとはいへ必ずしもことごとくそれがそのみではなく、或は古今集中のよみ人しらすの歌をとつて説話を附會し、或は萬葉集その他からも歌をかり來り、しかもその全歌をとり、又は巧に換骨脱胎して原歌と別趣の歌たらしめ、或

は時に全く關係のない二つの歌を恰も贈答であるかの如く結びつけるなど、毫も拘泥するところがない。實に作者の自由な想化はその暗示的な筆致と相俟つて一脉の生氣は全篇に漂うてゐる。

本書の作者については種々の説がある。藤原定家(仁治二年 没、八十)はその校訂した所謂天福本の奥書で、古人の説として業平自記説と伊勢筆作説とのあるよしをいひ、しかもそのいづれも信じ難いことを述べてゐる。或は業平自記の原本に後に伊勢が補筆したのではないかと説いて、この二説を打つて一九としようとする學者もある。伊勢の著作といひ、又その補筆といふのは、たゞこの書名から揣摩して、これを才媛伊勢に附會したに止つて、他にその根據はない。伊勢集の發端の筆致が本書に酷似してゐるといはれるけれども、その筆法の異なることは既に先人もこれを説いてゐる。又業平説については、その淵源するところの遠いことは既に述べたとほりである。しかし古今集の詞書を本書と比較して考へる時、或は本書を古今集以後のものとする説も、ひげて否み去ることも出来ない。後撰集以後に年代をひき下げよとする説は、容易く同じ難い。要するに本書の素材となつた業平の日記様のものが古くあつて、それによつて古今集前後の時代に物語風に書き改められ、更に後人の書入が竄入して今の形となつたものではないか。

## 五、神樂歌と催馬樂

こゝに平安朝初期の文學をほど講じ了へようとするにあつて、なほ附加すべきことは、謠ひ物についてである。當時の謠ひ物として残つてゐるものは、神事歌謠たる神樂歌・東遊及び遊宴歌謠たる催馬樂・風俗歌などである。こ

れらは勿論曲譜と相俟つて完成すべき性質のものであるが、文學史ではたゞその詞章をとつて考察すれば足る。

神樂は又神遊ともいはれる。その名の示すやうに神前に奏する謠ひ物で、特に清景堂、内侍所の御神樂に奏せらるものをいふ。勿論その起源を溯れば神を祭ることの起つた太古にまで至るを得るであらうが、歌詞の現存するもの凡そ九十首。その整理せられたのは貞觀(清和天皇の御代 元年は一五一九)の頃だといふ。なほその後醍醐天皇の延喜二十一年(一五一五)頃に改定せられ、更に圓融、花山の頃(六三〇頃から六四五頃まで)に源雅信(正暦四年(一) 六五三、没)によつて大補正が加へられて今日に傳へられたといふ。大別して探物の歌と前張の歌とする。

探物の歌は神樂の本體をなすもので、神徳を讃嘆し、神事に列る光榮を歎ぶ。形式は多く佛足跡歌體で、二首を合せて一とし、これを本・末の兩座に別れて相唱和するのである。

神樂の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとゐせりけるまとゐせりける (神、本)

神籬のみむろの山のさかき葉は神のみまへにしげりあひにけりしげりあひにけり (同、末)

そのかく稱へられるのは神樂を奏する時に取り舞ふ神、幣等の探物に應じて歌はれるからである

次に前張の歌とは、神樂を奏してしまつた後で歌はれる餘興の歌である。形式は探物の歌に比して自由な句法が用ひられ、内容も戀愛を取扱うたものが多く、明らかに民謡から出たものであることを示してゐる。その他には佛敎味をおびてゐる吉々利々の一曲のこれに含まれてゐるのも注目し得る。而して本・末二首を合せて一曲をなすこと探物の歌と異るところがない。

さいばりに衣はそめむ雨ふれど雨ふれど (前張、本)

雨ふれどうつろひがたし深くそめてばふかくそめてば (同末)

したらがまうどの單の狩衣なとりれそいとねたし (妻、或説、本)

な取りれそ小雨にそぼぬらせ夜離するいとねたし (同、末)

これが前張と稱せられるのは、次にいふべき催馬樂が神樂の餘興として用ひられたからだともいふが、なほ「前張」といふ曲(詞章は前記した)が餘興の最初に詠はれた時代に於て、その同類の歌曲の總名となり、更に餘興歌を總括する名となつたのせらうといふ高野辰之氏の説が従ふべきものゝやうである。

東遊は東國の歌曲の義であつたが、これを寛平元年(四九)賀茂臨時祭に用ひられてから神事歌謠として、各社にも用ひられるやうになつた。一歌・二歌・駿河歌・求子歌・加太於呂志(大廣(オホ)ビレ歌)の五曲から成る。悉く東國の民謠を用ひ、求子は曲にあはせてその時々新作せられたものである。駿河歌は六段に分れて、やゝ複雑であるが、他は短歌の形をとり、その句を繰返し、或は間に拍子の詞を挟んで歌つたものにすぎぬ。

次に遊宴歌謠の一なる催馬樂について説かう。その名目については梁塵秘抄口傳集(後白河院(建久三年)崩、六十六御親)に「大藏の省(つかま)の國々の貢物納めける」(四)の口ずさみに起れり」といひ、鄂曲抄(撰者未詳、口傳集を距る遠からぬ頃の作)に「樂の催馬樂の拍子に唱て、もとその樂より起るなるべし」といひ、近世に至つて眞淵・宜長等にも説があるが、高野氏はこれらの諸説を検討した末、「催馬樂は馬子歌の意で、唐樂の曲名に摸してこんな名を附したに過ぎない」と解釋を下してゐられる。催馬

樂の曲目は口遊(天祿元年(一六三〇)源爲憲の撰で、當時の人々の常識を養ふための編纂)によると律の曲十八、呂の曲二十一、計三十九曲の名を擧げてゐるが、天治二年(崇徳天皇の御代、一七八五)の催馬樂譜には呂三十一曲、律曲、計四十八曲を擧げ、なほ傳の絶えた曲名十三を掲げてゐるを以て、六十一曲が當て歌はれてゐたことが明らかである。そして詞章は六十一を悉く今日に傳へてゐる。

さて、貞觀元年(一九)に八十有餘の高齡で薨せられた廣井女王が催馬樂を善くせられ、「諸大夫及少年好事者、多就而習之焉」と史見えるによつて、もと路頭巷里之謠歌であつた催馬樂が、當時既に宮廷・貴族の間に詠ばれたことは察せられる。その後ますます盛に行はれて、一條天皇の御代の頃にその極に達したといつて可なるべく、源氏物語の卷の名にも、梅枝・竹河・東屋などこの曲名にとれるものゝあるを見ても推知することか出来よう。

既にいつたやうに催馬樂は、その大部分がもと民謠或は童謠である。従つて人事殊に戀愛に關するものゝ多いことはまた自然の數である。村嬢野郎の戀は優雅ではなからうが情熱的である。

貫河の瀬々の小菅のやはら手枕やはらかにぬる夜はなくておや離くる夫 (一段)

おやさくる夫はまして麗はしも しかもあらば矢はぎの市に沓かひに行む (二段)

沓かは線鞋の細底をかへさしはきて上裳とり著て宮路かよはむ (三段) (貫河)

又戀愛の歌のみならず、

力なき蝦(かへる)力なきかへる骨なきみゝず骨なき蚯蚓 (無力蝦)



西寺の老鼠わか鼠御裳喰んづ袈裟喰んづ法師に申さむ師に申せ法師に申さむ師に申せ（老鼠）

の如き諷刺もある。その他、賀の歌には典雅なものもあり、童謡の無邪氣なる、風俗詩の野趣深きに交つて二三の叙景詩も見える。而してその詩形は到底これを一言もて蔽ひ得ないほど複雑を極めてゐること、以上舉げた例を以ても知るべく、彼の謠ひ物に多く用ひられる七五調・七七調など、明らかにこゝにその發生が認められる。

風俗は即ち地方の俗謠である。古今集に「近江ぶり」「水莖ぶり」「しはつむ山ぶり」などあるのは、「ぶり」は今いふところの「ふし」と同じで、これらはやがて風俗と見るべきである。「歌は風俗よくうたひたる」と枕草子にあるを見れば、その頃にはかなり既に既されたものと考へられる。今傳へるところの風俗歌は二十數首、多くは東國の歌である。詩形は短歌に似たものが多く、その創作年代は平安初期までのものと考へられる。前にもいつたやうに東遊はたまた風俗がとられて神事に用ひられたものである。その内容はやはり戀愛に關したものと多いこと催馬樂と異るといふがな。

以上ほど平安朝初期に於ける謠ひ物について述べた。奈良朝の頃までに輸入せられて來た外邦樂に對して、かくの如き俗樂が貞觀以後に於いて宮廷・貴族の間に既ばれるやうになつたところにも、國風復興の機運の動きが見られる。そしてつひに古今集勅撰の盛時に到達する。

## 六、古今集の勅撰

奠都以來無事昌平の中に一百年は過ぎた。移植せられた唐朝文化もその爛熟の極に達し、國民の教養は漸くそれを咀嚼し消化するに至つた。碧瓦朱楹の宮殿と共に、檜皮葺ゆるやかな寢殿造は發達し、草假名は長足の進歩を來し、男文字と相並んで、貴族等の私的生活と不可離の關係を保つに至つた。これ恰も遣唐使派遣のここの中止せられた前後のことである。かくして國風興隆の機は暗黙の間に迫つて來る。而して遂に發して古今集勅撰となつたのである。

醍醐天皇徵明にましくて、「よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろくのこをすて給はぬあまりに、いにしへのことをも忘れじ、ふりにしことをも興し給ふとて」、こゝに歌集勅撰のことを思召し立ち給うたのであつた。「野べにおふる葛のはひ廣ごり、林にしげき木の葉の如く多か」つた當時の歌人達の中から選ばれて、この榮譽ある勅撰のことに與るべき仰を蒙つた人々は、紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑の四人であつた。この四人はただ歌人として當時に優秀な人々であつたが故に、徵されて勅撰のことに與つたのであつて、決して閥族でもなく、又顯官でもなかつた。かく階級意識に囚はれずに、適材をお選びになつたことは、まことに天皇の御英斷と申し奉るべきである。

かくて四人の撰者達は承香殿の東廂で、銳意その業に従うたが、やがて選を了へて留鑿に供へ奉つたのが續萬葉集である。假名序は「たゞ萬葉集にいらぬ古き歌、自らのをも奉らしめ給ひてなむ」といつてゐるのみだけれども、

爰詔<sup>ニ</sup>大内記紀友則・御書所預紀貫之・前甲斐少目凡河内躬恒・右衛門府生壬生忠岑等、各獻<sup>ニ</sup>家集、並古來舊歌、  
曰<sup>ニ</sup>續萬葉集。於<sup>レ</sup>是重有<sup>レ</sup>詔、部<sup>ニ</sup>類所<sup>レ</sup>奉歌、勅而爲<sup>ニ</sup>二十卷、名曰<sup>ニ</sup>古今和歌集。

と、その真名序にいふところによつて考へると、古今集の撰は、明らかに二段の段階を経て成つたことが首肯せられる。即ち最初に古來の舊歌を撰者達の歌を緝めて續萬葉集が成り、後更にこれを整理し、分類して奏覽したのが今日傳る古今和歌集の初度の奏覽本であると見るべきである。時に延喜五年四月であつた。しかしその後も度々補訂を加へられたことは延喜七年の大井川御幸の折の歌、同十二年の女郎花合の歌などの選入せられてゐるのでも明らかである。

本集に採擇せられた歌は約一千一百首、これを春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體(長・旋頭歌及・び辨語歌)・大歌所歌等に分類し、各部立の中について、亦類を以て聚め、而してこれを二十卷に分ち盛つてゐる。秩序整正、實に勅撰歌集たるに背かぬ體裁を具備して、永く後世に範を垂れてゐる。

戀々たる太平を樂しめる都會人士の生活は四時の行樂を纏綿たる戀愛まで、漸く色づけられる。二十卷の中、四季の歌は六卷を、戀歌は五卷を占めて、一部の中心をなしてゐる。しかもその内容に於て古代人に見るが如き眞摯な態度、熱烈な情感は見るべくもなく、著しく思惟的な理智的な傾向が、その歌作の上に現れて來たのは見のがすことが出来なく。

年のうちに春は來にけり一とせを去年みやいはむ今年とやはむ(春上、在原元方)

夏とあきとゆきかふ空のかよひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ(夏、凡河内躬恒)

雨により田蓑の鳥をけふゆけば名にはかくれぬものにぞありける(雜上、紀貫之)

のやうなものはその例として擧げ得られよう。物名の如きは最もその甚しいもので、そこに詩を見ることは出来な

い。少くとも感情の純真さは著しく遊戯心にうち勝たれてゐるといつてもよい。

かうした缺點を有してゐるとはいへ、古今集の歌は大體から見て典雅・醇正な抒情詩といつてよからう。歌詞は眞淵の所謂「たわやめぶり」で、上代の歌に見えるやうな「ますらをぶり」は影を潜めてしまつたものゝ、それは時代の反映である。萬葉時代の末頃の歌は既に古今集の歌風を暗示してゐたが、百年にわたる過渡期を経て、こゝに新時代の歌が完成したのである。

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば(冬、源宗子)

したにのみ戀ふれば苦し玉のをのたえて亂れむ人などがめそ(戀三、紀友則)

あき風の吹きうらがへす葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな(戀五、平定文)

信屈なもの、蕪雜なもの、それらは古今集の中には見るべくもない。纖巧の嫌はあるにしても、醇雅にして平明な作は比々然らざるはないといつてよい。本集一度成つて歌人のゆくべき道は擧示せられ、後の歌人はこれを瞻仰して斯道の聖典視して近世にまで至つたのである。

然らばその歌風の醇雅の由つて來るところは何か。前にも述べたやうに唐朝文化が漸く消化せられて、新しい時代

の文化がこゝに樹立せられ、それが文學の方面に發して、こゝに古今集の歌風が大成したと考へられる。なほこのことは歌調の變遷によとも考へ得よう。即ち

年月はあらた／＼にあひみれどあがもふ君はあきたらぬかも（萬葉二十）

あらたまの年ゆきかへり春た／＼ばまづわがやどに鶯はなけ（萬葉二十）

など、その例を舉げ得るやうに、萬葉集の時代から既にその萌しを見せてゐた七五調が殆ど完成したことである。即ち 37.37.7 なる詩形は漸く變つて 5.7.5.7.7 となつて來たことである。五七調から七五調へ、それはやがて信備から流麗への流れである。そして助詞の夥しい使用が、又歌調をなだらかにするに著しく役立つてゐることも、亦見のことが出来ない。

又、本集に於て注意すべきことは、長歌の衰微である。萬葉集に於いても時代下るにつれて漸くその數を減じる如く見えた長歌は平安朝に入つてその姿を没してしまつたといつても過言でないほどの衰へ方を示した。仁明天皇の嘉祥二年三月に、興福寺大家が天皇の寶算四十に滿ち給うたことを賀し奉つて、奉獻した長歌を續日本紀には録して、  
季世陵遲、斯道已墜、今至僧中、頗存古語。可謂禮失則求之於野。

と、撰者は附記してゐるが、その作は凡拙見るに堪へないものである。本集に選ばれたところは纔に五首に過ぎず、しかも萬葉のそれとは比較することの出来ぬほどの低調のものである。長歌が既に此のやうである、旋頭歌が顧みられないのは怪しむに足らぬ。四首選ばれてゐるが、見るべきものはない。

なほ本集で特に注意すべきは、その序及び歌の詞書のことである。これらは古傳のやうに撰者の一人なる貫之の作であらう。歌の詞書はもたらあつたものもあらうが、貫之の加筆によつて統一せられたと見るべきであらう。國民的自覺の時代であるといへ、公の文書はなほすべて漢文が用ひられてゐた當時にあつて、純國文を以てそれをもした點はまづ第一に敬服すべき點で、撰者の胸中に確乎たる信念を抱いてゐたことは推察せられる。殊に集の序は撰者等の抱負を見得る點に於て貴重な文獻である。撰者等がいかに歌——ひいては文學の本質を考へてゐたか、そしていかにその尊嚴を認めてゐたかは、序中に端的に知ることが出来る。たゞしその文は四六文の影響をうけて、こちたきまでに文飾を施して讀者をして、聊か煩瑣の感を抱かしめないではない。序で一言する。集にはまた別に漢文でものした序が添うてゐる。そして貫之がその同族淑望に作らせたところのものだと傳へられてゐる。その兩序の前後、及び漢文序の作者などについては、先人もいろ／＼論議してはゐるが、的確にこれを知ることが出来ない。兩序ともにいふところは全體に於て同じことではあるが、まゝ漢文序に假名序の足りないところを補ふところもあつて、輕々にこれを捨て去ることは出来ない。

## 七、古今集の歌人

古今集はその撰者等の歌を中心として選ばれたことは疑ふべくもない。その撰者等について少しく述べよう。

四人の撰者の中、貫之が中心になつて撰集のことに當つたものらしい。彼は御書所預から累進して延長八年土佐守

さなり、天慶三年女蕃頭さなり、後木工權頭に任じ、同九年を以て卒した。古傳によれば、延喜の古今集撰進の折は年二十三であつたといふけれど、その根拠はない。香川景樹(天保十四年歿、七十六)はこれを考定して、撰集の時四十五六歳、卒した時は八十五歳ぐらゐだつたらうといふ。この説信すべきに近い。貫之の歌は天才の歌ではない。かの業平のやうに衷情頻りに動いておのづから口にいつるのではなくて、推敲に推敲を重ね、工夫に工夫を積んで、刻苦の餘に成るものゝやうである。故に完成の美はあるけれど、時に雕琢に過ぎて興趣轉た索然たるものがある。彼が遍昭を評していつた話は、やがて彼が歌の上に移して見ることが出来る。

人はいさ心もしらず故里は花ぞ昔の香に匂ひける

夏の夜のふすかとすれば郭公なく一聲にあくるしのゝめ

君まさで煙たえにし埴釜のうら淋しくも見えわたるかな

などの詠を見るに、さすがに一代の巨匠であつたことが點頭される。しかし貫之は歌人としてよりは、一層批評家として重んぜられるべき人である。後の歌人達が貫之を目して歌聖と稱して直に古の人麻呂等に踵を接するかのやうに考へたのは、古今を宗とする餘りに出て、その歌人としての眞價を評し得なかつたのである。その歌は集めて貫之集十卷にある。

貫之は古今集を撰進して、歌の歸趣を示したが、また散文の方面に残した業績も特筆せらるべき價値を有する。即ち男文字全盛の間に立つて女文字の文學を遺してゐることである。古今集序のことは前に述べた。その他には大井川

御幸和歌序、土佐日記等がある。前者は延喜七年宇多法皇が大井川に御幸し給うて群臣に和歌を徴された折のものである。この時の和歌は六十三首あつたといふが、散逸して盡くは傳らない、井上文雄(明治四年歿、七十二)は選集・家集等を博覧して四十八首を考證してゐる。序は駢體を學んで繁褥なことは古今集序にも超えてゐる。漢文を出て、なほそれを離れえないのは、文の性質上やむを得なかつたのだらう。とに角假名文を以て勅撰集の序を書き、御幸和歌の序をものした。その意氣は盛だといはねばならぬ。土佐日記については後に日記文學をいふ折に一所にいはう。

貫之と相對して延喜歌壇に一方の覇を稱してゐた者は凡河内躬恒である。官途は貫之に比して頗る遅々たりしが如く、延喜に古今集撰進の時は甲斐前少目とあるが、その後も僅に和泉・淡路等に據たりしに止つたものゝやうである。その歿年も享年も更に明らかでない。貫之とは交情頗る密かであつたらしく、「おもしろしとて凡河内躬恒がまうで來たりけるによめる」貫之の歌は古今集にも入つてゐる。しかしその歌作の態度に至つてはかなり異つてゐるものゝ如く貫之が謹嚴で苦心して作歌したらしいに反し、躬恒は機智に富んで、時に興の走するに任せて推敲することもなく詠歌したやうに考へられる。措辭に巧を缺くものはあるが、却て天真のその間に閃くことあるは、その長所である。さはいへ奔放なる情感などは到底彼等に求むべくもない。

都にて春をだにやは過しこぬいづちに雁のないてゆくらむ

わび人の思ふ心を散る花にそへて雲に吹きつけよ風

松風に山とびこえて來る雁の羽むけにきゆる峰のしら雲

などは佳調といへよう。朝恒集一卷はその歌を集めてゐる。

友則は紀氏、貫之と同族だらうが、系譜は明らかでない。延喜五年に歿したと傳へられる。その死を悼んだ貫之と忠岑との歌が古今集にあるを見ると、古今集の完成を俟たずに物故したものゝやうである。官は大内記でをはつたやうである。

夜や暗き道やまどへるほととぎすわが宿をしもすぎがてに鳴く

夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥なくなり

久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

に見るが如く典雅なその歌は、その人となりを見せしめるに足る。友則集一卷がある。

忠岑は壬生氏。右衛門府生から攝津大目になつたが、その歿年は知られぬ。その歌は貫之・友則よりは寧ろ朝恒の風に近い。

春日野の雪まをわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

折しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを

有明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし

その集に忠岑集一卷がある。

以上四人の撰者を外にして、當時に名ある者、清原深養父・坂上是則・大江千里等、又女流に伊勢などを數へるこ

とが出来るが、今は總てこれを省く。

## 八、後撰集とその撰者

古今集勅撰の後、醍醐天皇は更に貫之に勅を下して、集中の佳什を選ばしめ給うた。しかし撰成るに先つて貫之は任に土佐に赴き、秩罷みて歸る日將に之れを獻ぜんとするに、天皇既に晏駕の後とてまた奈何ともせん方なく、空しく篋中に藏せられてゐたのである。これ即ち新撰和歌四卷である。春・秋、夏・冬、賀・哀、別・旅、戀・雜と相對せしめて、兩々雙書し、總て三百六十首を収めてゐる。なほ古今集とほぼ時を同じくして古今和歌六帖六卷の撰がある。貫之の女が輯めたと傳へられるが疑はしく、その古今集との前後すら容易く判じ難い。採擇せる歌數四千四百首を超えてゐる。これを春・夏・秋・冬・天(以上第一帖)山・田・野・部・田舎・家・人・佛事(以上第二帖)水(第三帖)戀・祝・別(以上第四帖)雜思・服飾・色・錦綾(以上第五帖)草・蟲・木・鳥(以上第六帖)の各部類に分け、更に中に就いて小分類を設けてゐる。私撰の類題歌集として注意せらるべき歌集である。

かくして天曆の御代が来る。天曆の御代は延喜の御宇と共に平安朝四百年間を通じて最も治績の擧つた時代と稱せられる。將門關東に誅せられ、純友西海に戮せられて、天下また急を告げる地方もなく、都門の内、春永しへに闌である。太平の春は文化の花を育くむ。この時代に文人の出ることの多かつたのも偶然でない。漢詩文の作亦一時に盛ではあつたが、それは姑く後に譲り、今少し歌壇の瞥見を續ける。

村上天皇が昭陽舎に和歌所を置き給うたのは天曆五年(一六)十月のことであつた。藏人少將藤原伊尹を別當とし、讃岐大掾大中臣能宣・河内掾清原元輔・學生源順・近江少掾紀時文・御書所預坂上望城——この五人を世に梨壺の五人といふ。蓋し昭陽舎をまた梨壺といふによるのである——を召して、當時既に難讀となつてゐた萬葉集を訓讀せしめられた。この時に勅へ定められた萬葉集の訓法を古點といふことは前章(二六)に既に説いたところで、萬葉集研究の第一歩はこゝに踏み出されたのである。

天皇はまた和歌所に詔して古今集に漏れた歌、及び古今集以後の歌を緝めしめ給うた。そして成つたのが後撰和歌集二十卷であつた。この集が既に完成せられて奏覽を経たのか、或は未だ然らざるかについては古來兩説があるが、要するにその選擇が杜撰であり、序を缺く點、その他の點に於いて體裁亦頗る備はらず、しかもその奉勅のことのみ物に見えて奏覽のことの所見なきに徴して未定稿のまゝに傳はつたと解すべきではないか。

後撰集の選者等がその撰集に對する態度はどうだつたか。彼等は古今集の撰者等が絶大の自信を以て新時代の歌風を確立しようとする意氣を示したに比して頗る他氣ない態度を示してゐる。集に題して「後撰」といふ。既にその消極的態度を窺ふことが出来る。更に集の内容を檢する時、まずくそれは明らかになつて来る。即ちその作者に見よ。その作六十を超えて選ばれた者貫之・伊勢があり、二十首をこえる者に兼輔・躬恒、十首を出る者に業平・時平・忠岑等を數へることが出来る。(歌の數は藤原氏の國文) 而して撰者等の歌は一首も探ることを敢てしないのである。然らば天曆時代の人々の歌は全然探ることなきかといへば、右大臣師輔・左大臣實賴等の作は十首の上に及び、その

他權門・貴紳の作は選に入ること多かつたのである。これ果して何を語るか。撰者等が自己及び自己の時代を以て遠く古人及び先代に及ばないことを固く信じ、自作を先人の作に並べおくことを以て大なる非禮と考へたものゝ如く、古今集を以て金科玉條として、新に獨自の境地を拓くことをも忘れてしまつたのである。先人を重んじたことはなほ恕すべしとして、撰者等が徒らに權門に迎合して、その詠歌を嚴選することなくして探つたことは、時代の趨向といはゞいへ、餘りに自ら屈するの甚しきを覺えしめる。

要するに延喜の古今集に對して天曆の後撰集が到底その匹に非ざることはいふまでもない。その撰者の意氣に於て既に月籠の差があるに於て、當代の歌は一般に彼の時代に於ける一脈の清新味も失はれて、まずく形貌の整正をのみ追うて核心に於いて或るものを缺き、萎靡沈滞の淵に第一歩を踏み入れて、歌道の衰微はこゝに萌しそめたのである。そしてまた古今集の選者とその序に於いて「今の世の中いろにつき人の心花になりけるよりあだなるうたはかなきことのみいでくれば云々」と嘆いたことは、またそのまゝ當代に移していふことが出来る。後撰集の戀の部六卷に於て、その半を占めるものは即ち之れに外ならぬのである。作品の價值はいはず、その事實に興味を覺えて探られたものが多くはなかつたか。これも亦集に反映せる時代の相の一つといへばいへよう。

次に後撰集の撰者達について一言しよう。撰者五人についてその歌品を論じようとする時、まづ思ひ出されるのは順徳院(仁治三年(一九〇)崩、四十六)のお言葉である。即ち八雲御抄に

梨壺の五人めでたしといへどもかの古今の四人の撰者に及ぶべからず。能宣・元輔は重代のうへもつとも然るべ

きの歌人なり。順また重代にあらずといへども、この道稽古のものなり。望城・時文は父が子といふばかりなり。と仰せられてゐるやうに、能宣・元輔の二人は歌人として許されるだらう、順やこれにつき、爾餘の二人は殆どいふに足りない。

能宣は伊勢祭主大中臣頼基の子である。父子共に歌をよくしたが、子の才は父を凌駕してゐた。神祇大副、正四位上に至り、正暦二年(五一六)七十一歳で歿した。祭主輔親及び伊勢大輔はその子で、共に作家として名高い。

さりとも頼む心にはかれて死なれぬものは命なりけり

あふことを待ちし月日のほどよりも今日の暮こそ久しかりけれ

御垣守衛士のたく火の夜はもえて晝は消えつゝものをこそ思へ

などにその歌品は味ひ得られよう。

元輔は古今集の作者清原深養父の孫で、一代の才媛清少納言の父である。従五位下肥後守に進み、永祚二年(一六五)の年(正暦)八十三の高齢を以て歿した。歌人としての天分は寧ろ能宣にも超えてゐたやうに見える。

秋の野の萩の錦を故里に鹿の音ながらうつしてしがな

ひく人もなくて年ふるみ吉野の松は子の目をよそにこそきけ

契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじまは

などはその秀歌である。

順は嵯峨源氏、大納言定の曾孫左馬允舉の子であつた。老來官位沈滞して進まず、貧賤不遇を嘆じつゝ永観元年七十三歳で歿した。彼は一代の學匠で、學和漢を兼ねてはゐたが、歌人としては能宣・元輔に遠く及ばない。その歌も多くは豊富な學才を驅つて巧に人の難しきところをなすのみで、詩味甚だ索然たるものがある。その「五日菖蒲につけてある所に奉らせ」た歌

進上 ころざし

深 ふかき

右葉之菖草 みぎはのあやめぐさ

千年五月五日可珂 ちとせのさつきいつかかるべき

の如きに至つては徒らに才に誇るもの、詩趣を求め無理であらう。順は詩文にも巧みであつたが、その功績は寧ろ倭名類聚抄編纂の業にある。倭名抄十卷(又二十卷の本もある)は順が醍醐天皇の皇女勤子内親王の爲めに、辨色立成・楊氏漢語抄・日本紀私記・和名本草等によりて、漢字を擧げて、之に註を施し併せて和名を添へたもので、「上舉天地、中次人物、下至草木、勅成十卷。卷中分部、部中分門、廿四部、百廿八門」と作者はその序でいつてゐる。本書は當時の物名を明らかにするに闕くべからざる貴重な文献である。因にいふ倭名抄引くところの辨色立成・楊氏漢語抄・日本紀私記の三書は、今日既にその傳を失ひ、深根輔仁(醍醐天皇頃の人)勅を奉じて撰するところの和名本草のみ現存して、近年日本古典全集中に覆刻せられた。その他この類書としては昌泰年中(元年は一五五八年)に僧昌住の撰に成る新撰

字鏡及び恐らく延喜以前の撰と認められる類聚名義抄がある。

時文は古今集の撰者貫之の子、望城は同集の作家是則の子、共に歌人として謗許の名譽を負ふべきかを知らぬ。そのたゞ父が子なるが爲めと八雲御抄に仰せられたところを首肯せざるを得ぬ。

當代の歌人としてなほ他に壬生忠見・平兼盛・源重之・中務(古今集の女歌人伊勢の女)がある。忠見と兼盛とはかの五人の撰者等と雁行して寧ろ優秀な歌をのこしてゐる。忠見は忠岑の子、歌詠を以てその名を知られてゐた。天徳歌合(四十三月内裏で行はれた歌合である。)に敗れて悶死したと傳へられるがその眞偽は知られぬ。歿年享年共に不詳。兼盛はその盛名忠岑と相匹敵してゐた。光孝天皇の皇子是忠親王の裔である。正暦元年に歿した。天徳歌合にその第二十番で、

左

忠見

戀すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか

右

兼盛

しのぶれど色に出にけりわが戀はものや思ふと人のとふまで

と相あうた時、判者小野宮實頼がこれを判じかねて聖斷を仰いだ時天皇が「しのぶれど」と口ずさみ給うたことによつてその勝敗が決し、爲めに忠見が悶死したと傳へられるのは有名な傳説である。

### 九、日記と物語

假名文字が流通してから、散文の文學も漸く傳へられるものが多かつた。曩に出た伊勢物語の系統をひいたものに大和物語がある。彼が多く業平を中心としての歌物語であつたに對して、これは前半に當時の戀愛譚を收め、後半には古い傳説を集めてゐる。その歌を中心とせる物語であることは同じである。伊勢物語のやうな簡勁な趣は見るべくもないが、後半に輯められた傳説には興味饒かなものがある。求女塚の話、難波芦刈の話、姥捨山の説、猿澤池の話、さては暹昭の出家物語などがそれである。作者は業平の男滋春を擬する説もあるが、根據はない。その制作時代はほぼ後撰集の前後かといはれてゐる。

こゝに當代の散文文學に日記と名に負ふ一類がある。こゝにいふ日記はかの所謂「男もすといふ日記」ではない。それはことごとしい男文字でものせられた日記で、歴世の天皇の御記をはじめ奉り、皇族・重臣の人々の日乗の今日に傳はるものは多い。しかしこゝで取扱ふものはそれらではなく、假名で書かれたものであるが、等しく日記といふ中にも、日々に記した如き體裁のものと、感想記のやうな形のものとのあることは注意すべきである。

日記文學の現存せる最も古いものは土佐日記である。「をともすといふ日記といふ物を、をむなもして心みむとてするなり」と冒頭せる如く、女人の筆に托してはゐるが、その貫之の手になつたものなることは古來の定説である。承平四年(一五九四)土佐守の任滿ちてその十二月二十一日門出し、翌年二月十六日歸洛するまでの日記である。「この書の大むね、亡兒の悲みを主とし、下に海賊のおそりをふみ、これをかすむるに全文俳諧をもてす」と景樹はいつてゐる。貫之時に年七十二三歳(景樹による)老後の作とて筆路漸く簡潔にして平淡、しかも切々たる哀感を抒するあたり、



思はず讀者を感動せしめるものがある。

土佐日記は要するに旅日記であつた。わが日常の感情生活の如實の記録は、彼より三四十年遅れて出た。即ち蜻蛉日記である。作者は藤原倫寧の女で、攝政兼家の妻となり、右大將道綱を生んだ。この日記は天曆八年(一四六)當時右兵衛佐であつた兼家を通ひそめた頃に筆を起し、爾後天延二年(一六三四、)に至る二十一年間のその家庭生活を描いてゐる。作者は才貌兼備へてゐた上、當時のおしなべての女性には似ず、その性質も敦厚であつたが、その後見のたどくしさに、又相反してゐた性格などから、一子道綱をあげて後、夫兼家との間もとかく圓滿を缺き、天祿二年(三一六)には遂に洛西鳴瀧にかくれて尼とならうとしたが果さず、迎へられて京に歸つても、夫との關係は依然として變ることになつた。しかし彼女は漸く淋しい諦めを得たらしく、わが子のおひ先を見まもりつゝ、兼家の愛のかへり來る日を待つてゐる。作者の性格はかうした境遇と相俟つて、この書に一種沈痛の氣を與へてゐることは看過せられぬ事實である。

本書は一部三卷、上卷は天曆八年から安和元年までの十五年間に亘る記事を含んでゐるが、これは後に筆をこつたものらしく、中卷は安和二年から天祿二年までの三年間で、この卷で夫妻の間に破綻を生じたことは前述のとほりである。この破綻の前後に作者は筆をこりそめたのではないかといはれる。下卷は天祿三年から天延二年の擱筆に及ぶ記事詳密を極めて、ある部分は日記の體を備へてゐる。要するに蜻蛉日記は日記とはいへど、決して全部がその日々に筆をとつて書かれたものでなく、全く一篇の自傳小説といふを妥當とする。

蜻蛉日記のやうな感情生活の記録に多少の想化を加へ、脚色を施す時、こゝに小説が生れる。この時代に物語が多く作られたことは怪しむに足りない。枕草子(後に)「物語は」の段に、

住吉・宇津保の類。殿うつり・月まつ女・交野の少將・梅壺の少將・人め・國ゆづり・うもれ木・道心すゝむる。松が枝。こま野の物語は古きかほりさしいでゝもいにしがをかききなり。

といひ、又別段に「交野の少將もどきたる落窪の少將などはをかし」ともいつてゐる。かく多くの物語が枕草子の時代には既にあつたのである。以上の中殿うつり・國ゆづりの二は宇津保物語の卷の名であつたにしても、(現存の宇津つりといふ巻はないが、これは今の藏開の古名だといふ説がある)なほ且つ十指の上に出る。この中宇津保・落窪を除いて他は悉く湮滅して傳らぬ(住吉は後代の作と考へられる)

宇津保物語は音楽の天才たる清原俊隆の數奇な生涯からときおこし、その血をうけた藤原仲忠の生立ちに及び、轉じて源正頼の女なる絶世の美姫貴宮を點出し來つて、それを繞つて仲忠はじめ幾多の男性をして戀を争はしめるあたり、頗る竹取物語の結構に似てゐる。しかし赫奕姫は遂に月界に去つたが、貴宮は東宮妃となり、貴宮を失うた仲忠以下亦夫々配を得ること、彼と頗る趣を異にしてゐる。物語は更にその後及び、立場に關する紛議などまでも素材として用ひられてゐるが、最後に仲忠がその子大宮に外祖から傳つた琴の秘曲を傳へること、その京極殿で管絃を催すこと、俊蔭に贈官の沙汰あり、一門加階のことに及んで筆を納めてゐる。一部二十帖、帖ごとに俊蔭・藤原君・嵯峨院等の名を附してゐる。構想は竹取に比して著しく複雑ではあるが、なほ幼稚の域を出ず、人物の性格の描寫な

ど見るよしもない。とはいへ當時にあつてこの大作を残したことは頗る注目するに足らう。たゞ本書に於て惜むべきことは善本の傳はるもの少く、巻の順序すら學者の間にその前後について異論があり、註釋書の出るもの少くて廣く讀まれないことである。

落窪物語は四卷又は三卷に分けられてゐる。材を繼子説話にとり、復讐説話を加味して脚色せられる、中納言の女で、繼母にさいなまれてゐた落窪の君が、天皇の信任を得て、當時權勢第一であつた少將の妻となり、少將は事ごとくに中納言の北の方に復讐し、後中納言の老後を顧み、その一家を幸福にするといふのがそのおほむねである。宇津保に比しては短い物語であり、且つその筋も簡單であるが故に筋の運び方も自然であり、前後の照應などにも充分意が用ひてある。人物も類型的の嫌はあれど、かなりよく活躍してゐる。比較的纏つてゐる佳作と見ることが出来る。通篇背景を描いて情景を髣髴せしめる手段をとらず、飽くまで人物の動きを叙するに終始してゐること、隨所に滑稽味を加へて空氣に和かみを添へようとしたのはその特異な點である。

以上の二作ともその作者は知られないが、ともに圓融天皇の御代頃には成つてゐたものと考へる。さてこれらを外にして、他のものがいかなる價值をもつてゐたかは、今日からこれを知ることが出来ないが、これらで見ても、わが物語作家の技倆は竹取の時代からは長足の進歩をしたことは看取するに難くない。傳奇ロマンから小説ノベルへ。かくして大作源氏物語の出るべき素地は作られてゐたのである。

### 一〇、拾遺集と當時の歌人

かく散文の文學が感になる趨勢を見せてゐる時、一方歌はどんなさまであつたか。古今・後撰二集の後をうけて、ます／＼先人の迹を踏んで、その埒外へ一步も出ないといふやうな退嬰的傾向は著しくなつた。時人にとつて歌はもう已むに已まれぬ哀心の感懷をもらすものではなくて、社交の一手段として、貴族の修養の一として缺くべからざるものであつた。作爲せられること益々多くして氣魄・精神に於て見るものもないのはもとよりその所である。歌集勅撰のこと亦昭代行事の一である。拾遺和歌集はこの間に勅撰せられた。

拾遺和歌集二十卷その體裁亦萬葉集に倣うてゐる。この集はその撰者についても異説がある。或は花山院の御自撰であるともいひ、花山院の宣を承けて藤原公任これを選ぶとも傳へる。又別に拾遺抄といふものがある。花山院集を選び給ひ、公任抄を作るともいひ、兩者共に院の御選だともいひ、集は公任選び、抄は院が作り給ふともいふ。なほその前後についても異説があり、抄まづ成り、その後増補して集が成つたのであるともいひ、兩者共に院の御手に集められたとも、又抄は長徳三年(一六)以後に院これを作り給ひ、更に長保三年(一六)に公任がこれを増補して集を撰したのだともいひ、又その成つたのは寛弘(元年は一六六四)以後だともいはれる。いづれに従ふべきか決しかねる。

この集は後撰集の後をうけて、前代の二集に遺れるを拾ふといふ心で輯められたらしく、殊に天曆時代の作家の作を多く收めてゐる。「その體ことの外に物近くなりて、理ことばくまなくあらはれ、姿すなほなるをよしとす」と無名抄

(後にとくこ)に評してゐるのはほとゞ肯綮に當つてゐる。卑俗に流れた新奇、情熱を缺く巧緻、これがこの集の傾向である。集められた歌は總計千三百を超えてゐる。中に就いて人麿・貫之の詠が夫々百首の上にあるは注意すべく、貫之はこゝに至つて全く偶像化せられ、古今の歌風は、後撰から本集に至つて牢として抜くべからざる根柢を下したといつていい。要するに古今から本集に至る三集を世に三代集といひ、古今は文質兼備し、後撰は質文にすぎ、拾遺は文質を凌ぐと稱せられ、特に古今の戀、後撰の雜、拾遺の四季はその精粹といはれる。

さて拾遺集の選ばれた時代は所謂道長時代の劈頭であつて、文學の黄金時代である。作家の名ある者亦僅指に堪へざるものがある。中に就いて一代の聲望を集めてゐた者は、拾遺の撰者に擬せられる藤原公任である。小野宮實頼の嫡孫である。しかも道長支流に出で、一人の人となつては、彼亦その膝下に雌伏せざるを得なかつた。正二位大納言を以て、その愛娘の死に値うて憂愁の極仕を致し、長久二年(一七一七)七十六歳を以て歿した。彼は學和漢を兼ね、典例故實に博通してゐた。即興にまかせて歌詠口を衝いて出るの概はあるが、そこに詩人的情懷は見るべくもない。かくの如きに加へてその名門の出であることは、その名を一時に高からしめたのではないか。彼は歌人としてはかの源順の流で、特に擧げる價值はない。その眞面目は自ら他にある。即ち所謂歌學の方面にその名は不朽であるだらう。歌學のことは後に説き及ぶことがあらう。今は姑く割愛しておかう。

公任には寧ろ先輩であつて、歌人としては彼にまさる才能をもつてゐた者は曾爾好忠である。好忠の傳は詳でない。丹後に掾たりしが故に、世に曾丹後、略して曾丹といはれてゐた。不通にして狷介、人に容れられず、世をも容

れず、不遇の一生を終へたらしい。船岡山の子日の御遊(寛和元年一六四五)に召されざるに推參して自ら一代の歌人を以て居れど、徒らに一座の響聲と排斥とを買つたに過ぎなかつたが如き、その面目躍如たるものがある。當時の歌壇は、その思想も用語も、すべて先人の迹を一步も出ないことを力めてゐた。かくの如きは好忠の堪へ得るところではない。彼はまづ語彙の制縛から逃れようとした。つとめて世俗の耳なれぬ語彙を捉へ來り或は俗語をも自由に用ひて、つとめて新味を添へようと試みた。

荒小田の去年の古根のふるよもぎ今を春べとひこばへにけり

鳴けや鳴け蓬がそまのきりくすすぎゆく秋はげにぞ悲しき

由良のとを渡る船人かちをたえ行くへもしらぬ戀の道かな

好忠既に革新の曉鐘を撞けど、時流はなほ覺むべくもない。しかし彼にも人を動かすだけの内的燃焼が足りなかつたことも否まれない。たゞ語彙の新奇のみを以て優れた詩の生れないことは自明の理である。好忠の歌が終に顧みられなかつた所以である。

さて寛弘前後の時代は、歌に散文に本邦文學史上稀有の女流文學の時代を現出するに至つた。上に好文の天子一條天皇君臨し給ひ、配するに皇后定子、中宮彰子また文學に興味を有してゐ給うた。加ふるに昇平日久しく、宮廷はさながら文墨の場の如き觀を呈した。當時にあつて歌に於て最も著れた者は即ち和泉式部と赤染衛門との二人であつた。和泉式部は越前守大江雅致の女で、初め和泉守橘道貞の妻となつて一女を産んだ。歌人として著聞せる小式部がそ

れである。又冷泉天皇の皇子爲尊親王ミ、親王薨後はその御弟敦道親王等と戀を語らうたが、幾程もなく丹後守藤原保昌に嫁して丹後に下つた。上東門院に奉仕したのはその前のことであらう。彼女の歿年も享年も共に知られない。式部は多情多感の才女、古の業平を女にしたやうな人である。一生を戀に狂うて送つた。情輩赤染衛門は歌を遣つて責め、紫式部亦その日記に彼女を非難の語氣を洩してゐるやうに、當時にあつてさへ、そのなすところは倫常を無視したものと考えられてゐた。しかしその奔放無碍の戀愛は、凝つては即ち一卷の和泉式部日記ミなり、又正續七卷の歌集となつて千載の後なほ光彩を放つてゐる。

人の身も戀にはかへつ夏むしのあらはにもゆき見えぬばかりぞ

もの思へばさはの螢も我身よりあくがれ出したまかとぞ見る

とよめおきて誰れをあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり。

赤染衛門は赤染時用の女、實は平兼盛の女だといふ。大江匡衡(後にとくこ)の妻となつて舉周・江侍従等を生んだ。その歌は到底式部と匹敵すべくもないがなほ時流にはすぐれてゐた。榮花物語(後に)の作者に擬せられるけれど、當否は知らぬ。

やすらはでねなましものをさよふけてかたぶくまでの月を見しかな

かはらむと祈るいのちは惜しからで別ると思はむほどぞ悲しき

など人口に膾炙してゐる。

以上の二家を外にして巾幗の歌人には伊勢大輔・馬内侍など著聞し、男子には藤原實方・同長能・源道濟等、緇衣に能因などその尤なるものである。

## 一一、清少納言と枕草子

一條天皇の御宇に名媛才女の輩出したことは既に述べたところである。歌に於て和泉式部の傑出してゐたことも前節でいつた。散文では、清少納言と紫式部とはその双壁と稱せられ、その手になれる枕草子と源氏物語とは、實に國文學史の上に絶大な光輝を放つて、不朽の名を恣にしてゐる。

清少納言は清原氏、舍人親王の末裔である。古今集の作家深養父の曾孫、梨壺の五人の一人元輔は實にその父である。名は諾子ノコといふに疑はしい。生年を知らず歿年亦明らかでない永祚二年(この年正尊と改元、清少納言の父元輔この年に歿す)藤原道隆(兼家の子この年攝政となる)の女定子入内し、次いで中宮となつたが、それから一二年して彼女の宮廷生活は始つたらしく、その時年二十五六歳であつたミ考へられる。こゝで長徳元年(五五)道隆の死について、その弟道長の擡頭は、やがてその翌年伊周・隆家(道隆の子、中宮の御兄弟)の失脚となり、ひいて中宮にも壓迫の手は加つて、中宮は剃髪して一時宮を出られたこともあつた。かうした間にあつて彼女は渝らざる信任を中宮に得て、長保二年(六一)中宮の皇后(道長の女影子がこのこと、要するに一冊立からその十二月崩御に至るまで奉仕してゐたらしい。ついで故皇后の御妹原子女子(三條天皇の東時の御養女。長)に仕へたといふが明徴はない。その後中宮彰子にも仕へたミも傳へられるが、これ亦確説ではない。

晩年落魄して漂浪して難波あたりに居たことも物の本に見える。

少納言性篤敏にして驕慢、當時の一般の女子に比しては學識も備へてゐたものゝ如く、大進生昌の門の狭きを、「されど門のかぎりを高くつくりける人も聞ゆるは」といつて、「古き進士などに侍らずば承り知るべくも侍らざりけり」と驚嘆せしめたのも有名な逸話であり、「夜をとほして昔ものがたりも聞えあかさむとせしを彌よのこゑにもよほされてなむ」といつた行成に「いと夜深く侍りけるとの聲は孟嘗君のにや」と酬たまひたことも人口に膾炙してゐる。しかもその犀利な觀察力と冷徹な批評眼とは儕輩の誰もが有つてゐなかつたところのものである。彼女は律語の天地に踏躡するには餘りに奔放な性格を持つてゐた。歌もよまないではないが、自らも「つゆとりわけたる方もなくて、さすがに歌がましく、われはと思へるさまに、最初によみ出で侍らむなむ、なき人(亡父元輔のこと)のためにもいとほしく侍る」といつて居り、庚申の夜伊周から歌を召されても、

その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌はまづぞよまゝし

といつて辭してゐた。さて律語を以てしては到底一家をなせないことを知つてゐる少納言の筆のあとが、即ち枕草子である。

この書を書いた動機、また内容については、まづ彼女自身の口から聞かう。

ものくらうなりて文字もかゝれずなりたり。筆もつかひはてゝ、これを書きはてばや。このさうしは目に見え、心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて、つれ／＼なる里居のほどに書き集めたるを、あいなく人のために

便なきいひすゞしなどしつべきところ／＼もあれば、きようかくしたりと思ひしを、心より外にこそもりいでにけれ。宮の御前に内大臣うちのおとぎの奉り給へりし御さうしを、「これに何を書かまし。うへの御前は史記といふ史をなむ書かせ給へる」などの給はせしを、「枕にこそはし侍らめ」を申し、かば、「さばえよ」とて賜はせたりしを、あやしきを、故事や何やま、つきせす多かる紙の數を書きつくさむとせしに、いとものおぼえぬことぞ多かるや。即ち中宮から冊子を下賜せられたことが、やがて彼女をして筆をとらしめたのであることは、この文が語るところである。そして今「枕草子」とこの書がよばれることも、彼女が「枕にこそし侍らめ」と啓したことに由る。こゝにいふ、「枕」とは「枕草子」の義で、「枕草子」とは、即ち座右に備へて心おぼえを書きこむ冊子をいふ語である。たゞし今の題號は作者のおぼせたところでないことは、八雲御抄などにたゞ、「清少納言記」とあるによつて知られる。さて本書の内容は大體二つの要素から成る。即ち一は自然・人事に關するその警拔にして皮肉な感想であり、他はその經驗し、見聞せる宮廷生活の精到にして緻密な描寫である。富貴華麗なものを稱美禮讚し、朴野卑俗なものに對して揶揄嘲笑に至らざるなきは當時の時代相を代辯せるものなるべく、趣味廣汎にして山川草木を品藻し、才氣横溢して有髯男子を翻弄するあたり、その獨壇場といふべく、何人の追隨をもゆるさぬ慨がある。實に古今の隨筆文學の冠冕たる榮はもとよりその所である、ある一面から見ると、本書は實に一篇無韻の詩といつても溢美の言でない。

書中の記事でその年時を明らかに知り得るものは、寛和二年六月(花山院遜位に先づ數日のこと)の小白河殿の八講の記事を以て最も古しとし、下つて長保二年の記事もあるが、人々の官位の記載から考へると、長保三四年に下るものもある。いつ頃

から書きはじめたかは知るによしもないが、「左中將のいまだ伊勢守と聞えし時」既にこの書の一部は流布せられたことから考へて、長徳二年(一六五六、左中將源經房が伊勢守であつたのは長保元年末から二年末まで)頃には書かれてゐた。そして道長をして平伏させたことを見て、道隆の宿業のいみじくめでたかりしことを感じた餘り、「ましてこの後の御有様見奉らせ給はましかば」三いひ、また道隆の積善寺供養のめでたさも「今の世の御こと」に比べると物の數でもないことをいつてゐることから考へるに、この書の脱稿せられたのは道長の全盛時代即ち寛弘以後のことであることが知られる。即ちその間をりくに筆をとつて書きついでいつたものと考へる。

世或は本書の憑據を求めて、晩唐の詩人李商隱が雜纂に得たと説く者がある。雜纂の書亦四十の品目を擧げて奇抜な短句を列ねてゐること、本書と相似たものはある。「必不來」と題して「醉客遊<sub>レ</sub>席。客作<sub>レ</sub>儉<sub>レ</sub>物去。追<sub>二</sub>王侯家人<sub>一</sub>。把<sub>レ</sub>棒呼狗。窮措大喚<sub>二</sub>妓女<sub>一</sub>」といふが如き、その一例である。本書が「すさまじきもの」「にくきもの」等と題目を掲げてゐるを取り來つて、直に彼に摸したものであると斷じ、或は漢文大行の後に出了た作だから彼に粉本を求めたに相違ないといふが如きは殆ど取るに足らぬ説である。況や雜纂の本邦に將來せられたのは遙か後代のことだらうとの説もあつて、模倣説は内容の比較に見てもかた<sub>レ</sub>問題にはならぬ。

## 一一、紫式部と源氏物語

竹取から宇津保・落窪を経て、源氏物語に至つて平安朝の小説はその發達の極致に達したといつていい。源氏物語の作者の紫式部であることは蓋し疑ないところである。

紫式部は藤原爲時の女であつた。幼にして穎敏であつたことは、彼女が自ら日記中に書いてゐる。同族宣孝の妻となつたのがいつ頃のことかは知るによしもないが、大貳三位・辨局の二女を彼女に遺して夫が死んだのは長保三年(一六)四月のことであり、彼女は那時二十六七ぐらゐらうと推定せられる。さて寡居數年にして寛弘二・三年(二年は、一六六五)頃、召されて一條天皇の中宮彰子に仕へたものゝやうである。その歿年は詳にしえない。萬壽二年(八五)から長元四年(九一)までの間に物故したものだらうとの説もある。

式部の性行については、紫家七論(安藤爲章享保元年(二二七六)歿の著)以來淑徳無比にして謹直恭謙な婦人と考へられてゐたが、これは要するに儒家の見を以て力めて式部を高く評價したもので、必ずしもさうした理想人ではなかつたやうである。たゞその天稟のつゝまじさが、夫を喪うた憂愁によつて色づけられて、重厚味を加へて來たものと見て可なるべく、清少納言の如く驕慢ではなく、和泉式部の如く多情ではなかつたとしても、なほ且つまきの板戸をたゞきわびける御堂殿に、あけてはいかに悔しからましかへしたりしたことなどから考へて、「後世に説くところ道義を以て、平安朝を測らんとするは、そも<sub>レ</sub>謬ならずや」三藤岡氏のいつてゐるのは蓋し妥當の見とすべきであらう。

さて式部が源氏を書いたのはいつ頃か。式部の日記(後に言及する)によれば、寛弘五年十一月に公任が「若むらさきやさふ

らふ」といつた記事が見えるところから推して、當時既にこの物語が、少くともその一部の流布してゐたことは確かである。紫家七論は日記の文をひいて、「いかさまにも長保の末、寛弘のはじめ、式部やもめずみにて、里にはべりけるつれづれに作りたる歎」といつてゐる。しかしさほどの長篇が数年で書きえられなからうことから推し、更に作中二三の事例から、日記の頃までに成つたものはその最初の十数帖で、餘は漸次書きつがれて、完成したのはかなり後のことではないだらうかと疑ふ説もある。

源氏物語は五十四帖から成る大作である。その一々の巻に、桐壺・帝木・空蟬・夕顔等と名をおふせたのは、宇津保の先蹤に倣うたものであらう。とにかくに付取以來發展し來つた諸の物語は攝取せられて、鎔爐の中に投ぜられ、更に、作者の見聞せる周囲をとり入れて作られたものが本書である。論者は宇津保・落窪と本書との類似を舉示して、その影響を云々するけれど、局部々に相似を覚める時、それは必ずしも該二書のみには限らない筈である。

源氏五十四帖は大體に於いて、光源氏君の花やかな一生を描いた部分と、その子薫大將の恵まれぬ戀の半生を寫した部分とに分けて考へられる。その第一部はまづ光君の母の悲しい運命に始まる。幼くして母を喪つた美しい皇子は一世の源氏となつて、父なる當帝の寵を集めて成人する。思ふこと成らぬはなき中にもその義母なる藤壺中宮との戀の盃の味は苦がかつた。諒闇の暗の中に光る猜疑の蛇の目は凄かつた。父帝の崩後暮年ならずして、源氏は都をあとに淋しく須磨・明石の月を見なければならなかつた。しかし受難の日は久しはつゝかなかつた。やがて赦されて歸洛した後の源氏は、坦々たる大道に騶馬を驅るが如き概がある。この間源氏を繞つて幾多の戀物語が語られるが、その半

生の伴侶として配せられた女性は藤壺中宮の姪なる紫上であつた。作者は主人公源氏君に於て殆ど缺くるところなき理想の男性を描き、これに對して紫上を實にその理想に近い女性として寫さうとしたものゝやうである。源氏に配して描かれたその義兄頭中將(後に致仕)は源氏の美しさ、大きさを増すにのみ役立つ。多くの女性は紫上の立派さをますます際立つて感じさせる。かうした榮華の日にあつても源氏の心をともしれば暗くするものは古い藤壺中宮との戀であり、その間に生れ給うた冷泉院でいらせられる。そして終にその罪は源氏の妻の一人なる女三宮と柏木衛門督(頭中將の子)との戀と、その間に生れた薫大將とで報いられる。さうしてゐる間に源氏にも無常の風は襲ひ來て、まづ紫上が死に、ついで源氏は遁世の蹟を固めて文がらを焼く。——桐壺から幻に至る四十一帖がこの間の情史を語る。

幻の後をうけて匂宮・紅梅・竹河の三巻は光かくれ給うた後に於ける正篇の中に現はれる重なる人々の消息をまとめて、橋姫以下の巻々への連鎖をなしてゐる。——幻の後に源氏の終焉を寫すべき卷雲隱の名が傳へられてゐる。そしてこの巻はたゞ名のみあつて本文はなかつたのだといふ。果して然るや。恐らくその名も後世の人がつけたのではあるまいか。

さて第二部は所謂宇治十帖と呼ばれる巻々である。(匂宮以下の三帖を第一部の結末に入れるか第(二部)の冒頭と見るかは考ふべきことである。)この巻々は表面源氏の子となつてゐる薫大將と、當帝の皇子で源氏を外祖父とせる匂宮と、宇治八宮(源氏の弟で宇治に隱(栖)せる失意の皇子)の姫君達との戀物語である。而して前半で薫は八宮の大君に戀して酬いられず、わが妻として大君が薦めてくれた中君を匂宮に媒してまで、姉君をもとめたが、その中に戀人は亡き父宮の後を追ひ、薫は戀を失うて悲嘆の中に今は匂宮の妻なる中君



に淡い思慕の情を感じる。後半は中君によつて薫はその異母妹浮舟を知り、これを宇治に据ゑおいたが、運命の悪戯は意志の弱い浮舟を、色このみの匂宮をして奪はしめた。二人の男の間に苦悶した浮舟は宇治の流に投じたが、助けられて洛北小野の尼君の許にゐるが、薫はふとしたことからこれを聞き知つて文を遣つたが、返事はなかつた。――橋姫から夢の浮橋に至る十帖のほんの荒すぢである。

これを要するに、源氏の一生は時に浮沈あり、懊惱の伴はないことがあるとはいへ、概して平和であり、順調におかれてゐたが故に、描寫も概して明るく快い。洗練せられた平安朝文化の具象的縮圖としてこれを見ると、興趣頗る饒かなものがある。しかしその中間の卷々、即ち源氏が六條院での榮華の日を寫してゐる卷々はかなりの冗漫さを感ぜずにはゐられないものがある。さうしたところにも時代の空氣は遺憾なく反映せられてゐる。

源氏君も紫上も、その性格は餘りに理想化せられて、恐らく當時にあつても、あつた人々はあり得なからうと思はれる。薫と匂と、而して宇治宮の姫君達とは、恐らく當時の實在人中に指呼し得べき性格である。その十帖の描寫を實人生に於て充分可能性を有する一種陰慘な運命を描いたものであり、その觀察は老巧に、筆路圓熟して、規模が小さいだけによく纏つて居り、この十帖を通じて快い緊張味を感じる。

さて紫式部がこの物語を作つた作意は如何。これについて古來説をなす者が多い。或は深遠な佛教の教理を説かうとして、材を卑近な世相に假りたものであるといひ、卷數も天台六十卷に擬したものであるが、數卷が缺けて今の形になつたのだと説く。或は春秋に倣うて勸善懲惡の意を寓したのであるといふ者もある。その他或は此といひ、又は

彼といひ、諸説紛々たりとはいへ、畢竟するに、彼等自らの好むところに淫し、様に依つて胡蘆を畫くの類に過ぎない。作者の眞意は蓋しその最も親近せる社會をかり來つて、人の世のあるがまゝの相を寫し出さうとしたものであらう。その隨所に窺はれる佛教的思想は作者及び當時の社會が偶々佛教に影響せられてゐたこゝの深かつたが故であつて、それのみで佛敎文學と見ることは出来ない。

作者が抱いてゐた文學に對する見解は、繪合の卷で、

次に伊勢に正三位をあはせてまた定めやらす。これも右はおもしろく、うちわたりよりはじめ、近き世のありさまを書きたるはをかしう見どころまさる。

といつてゐるので、作者が必ずしも古名作にのみ價值を認めてゐるものでないことを知り、又蠶の卷で、

かゝる世のふることならでは、げに何をか紛るゝことなきつれづれをなぐさめまし。さてもこの僞りどもの中に、げにさもあらむとあはれを見せ、つきん／＼しうつゞけたる、はた、はかなしごこゝ知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫ぎみのもの思へる見るに、かた心つくかし。

といひ、同じ卷で、

神代より世にあることを記しおきけるなゝり。日本紀などはたゞかたさばぞかし。これらにこそみち／＼しくくはしきことはあらめ。

といつてゐるので、如何に作者が物語の本質について考へてゐたかを窺ふことが出来るだらう。



次にこの物語の準據説についても古來諸説はあれど、作者があらゆる先行の諸物語に啓發せられるところの多かつたゞらうことはいふまでもない。作中の人物を描くにその周圍の人々に粉本を求めたことはまた當然のことである。源氏君は誰、紫上は誰とさして明らかにすることは作者を地下に立たすに非ずば、到底知り難いが、摸索してほゞこれを盡したのは手塚節氏の研究であらう。(源氏物語の) 新研究参照) しかしその全部を直ちに首肯することは早計に失する。

源氏の作一度出で、その名聲の籍甚せしことは作者自らその日記にいふところである。以後の物語にこれが影響をうけないものが殆どなく、次代以後に及んでその行はれることの益々盛であつたことはその末書の多いこと汗牛充棟もたゞならぬに徴して知ることが出来よう。

紫式部日記一卷は彼女が中宮彰子に近侍してゐた頃の日記で、寛弘五年七月後一條天皇が道長の土御門殿で降誕に筆を起し、寛弘七年正月三宮(後朱雀)の御五十日の儀に筆を擱いてゐる。或は大部の日記の一部のみ残存したものだらうとの説もあるが、必ずしもさうではないらしい。その精到なる觀察になる日記は有職故實の好参考として珍重せられ、又隨所に自らを語つてゐることは、筆者の性格を知る上に貴重な資料として役立つ。卷中儕輩を批評せし部分については、或は彼女がその子(大貳三)に送つた消息文が、そのまゝ日記の本文に紛れ入つたものだらうとの説もある。(木村架空著) 文消息参照)

### 一三、源氏以後の小説と日記

枕草子と源氏物語とを堺線として、散文の文學はまた振はない。物語には狭衣物語・濱松中納言物語・夜半寢覺物

語・とりかへばや物語などの長篇があり外に、短篇を集めた堤中納言物語があり、日記には更級日記・讃岐典侍日記等の作がある。その外説話文學として今昔物語集・唐物語、歴史文學として榮華物語・大鏡・今鏡が出た。今昔以下の作については後節に譲り、こゝには主として小説と日記とを瞥見しよう。

源氏以後の小説中出色の作と見られるものは狭衣物語四卷である。帝の甥で、堀川大臣の子なる狭衣大將を主人公として、その従妹姉たる源氏宮に對する戀愛を中心とし、大將が宮を得んとして當今の女二宮をも斥けつゝも、思はぬことからこれと交渉を生じたが、結局そのいづれをも失ひ、僅に宮のゆかりなる故式部卿宮の女を北方とし、終に帝位にのぼつて、ありし世を追憶するといふを、その梗概とする。その脚色は多く源氏に得來つたものゝ如く、隨所にその痕迹を認めることが出来る。比較的短いが故に、源氏よりまとまりのよいのがその長所である。作者は大貳三位ともいひ、辨局とも傳へる。いづれも紫式部の女である。母の子とて必ずしも母のやうな作家であり得まい。いづれも信すべき確證は勿論ない。或は六條齋院(後朱雀の皇女、)の宣旨(源頼國)の作かともいふ。もし然りとすれば凡そ後冷泉天皇の御代(永承・天喜)の作といふことになる。大體その頃のものか。

狭衣が書かれた頃と前後して文學史上にその名をとゞむべき一女性が生れた。菅原孝標の女である。孝標は道眞の曾孫資忠の子である。學者の家に生れたが、上總・常陸等の介に歴任したのみで薄倖の日を送つた。その女はこの父と藤原倫寧の女(蜻蛉日記の)との間に生れた。寛弘五年に生れ、父の任國上總に幼時の數年を送つて十三の時都に歸り、後祐子内親王に仕へたが、既にして橘俊通と婚して仲俊を生んだ。天喜五年(一七)俊通が信濃守となり、その翌

年病んで卒するに至つた頃までの彼女の生活は録して更級日記にある。彼女は幼時から物語に深き憧憬を抱いて居り、殊に源氏を耽讀して、浮舟の女君の境遇は殊に彼女が最も愉快するところであつた。幻想の中に若い日をおくつた彼女は漸く老境に入つて彌陀の淨土を欣求するやうになつて行つた。更級日記一卷は實に夢と幻想との文學として、宮廷生活乃至戀愛生活の記録たる他の女流日記文學の上に一異彩を放つてゐる。

さて、更級日記の奥書に、誰れが書いたのかはしらねど、

よはのねざめ・みつのはまゝつ・みづからくゆる・あさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ。とある。その果して然るや否やは知らぬ。たゞみつのはまゝつは或は彼女の作ではないかといへど確證はない。

みつのはまゝつ、普通には濱松中納言物語といふ。孝標女の作でないにしても、大體その時代のもので、袂衣と前後して書かれたものと見てよからう。今傳はる濱松中納言物語は大分その冒頭を缺いてゐるものも考へられる。中納言が渡唐して、彼土の后と契り、歸朝して後、そのゆかりを尋ねて、吉野に、かの唐后の母なる尼君を訪ひ、その臨終に當り、遺托によつて姫君を都に伴ひ歸ることを中心にして書かれてゐるが、終の方も闕けてゐるらしく、全豹を知ることは出来ないにしても、現存の部分のみについて見るも、その結構に於て源氏、殊にその宇治十帖に負ふところの多いことは直に看取することが出来る。その描寫にも頗る秩序あり、主要人物の點出、亦そのよろしきを得、事件の推移を寫すにも亦要領を得て、冗漫に墮ちることを防いでゐるのは凡手でない。

夜半寢覺物語の現存せる本は後世の補綴を経て傳つてゐるもので、原本の佛をしのぶによしもない。みづからくゆる

る物語と、朝倉物語とは今日に傳つてゐない。この三種が孝標女の作と傳へられてゐたことは前述の通りだが、處にそれと決めることは出来ない。なほとりかへばや物語も現存せる本は後代の修補の加つたもので、その原本の成つたのも恐らく平安朝末期であつたらうと考へられる。源氏以後の諸作を通觀して、作家の力量著しく低下し、徒らに趣向の怪奇を求めて性格描寫を忘れ、源氏に大成せられた小説は早くこゝに衰退の途を辿るのであつた。

堤中納言物語はこの間に出て特異の光彩を放つ。十章の短篇を集めて一部としたもので、構想奇警、文章亦簡淨。愛すべき作品である。その堤中納言と題せられる所以は解し難い。或は堤中納言(藤原兼輔のこと)の作るところなるが故だといふ者もあるが、然らば本書は宇津保・落窪にも先立つべく、それは内容から考へて信じられないところである。本書の制作は鳥羽・近衛の朝の頃と信じられる。

上來述べて來たやうに源氏以後の散文、殊に小説は多く見るに足るものがない。源氏以後の作家達はその大きな光輝に眩惑せられて、全くそれに追隨する以外に新境地を開拓することを忘れてしまつたかの觀がある。日記亦更級のやゝ見るべき外、讃岐典侍日記——嘉祥二年(一七)堀河天皇の御惱について崩御のこと、翌天仁元年鳥羽天皇の踐祚大嘗祭に至る二年間の日記——も公事に關しての參考資料として以外さしたることもない。平安末期の散文は小説・日記以外のものに注意すべき作品を求めなければならぬ。

#### 一四、榮花物語と大鏡

さしにも全盛を誇つた御堂殿の世も、その人去つては空しく法成寺の伽藍にありし日の偲ばれるのみ。御堂殿の世

が去ると共に藝術の花も凋落しそめて、また昔日の面影をとどめずなつたこと、ほゞ前節で説いた通りである。前代の榮華を回顧する時、現代のあまりに落寞たるを嘆ぜざるを得ない。乃ち彼等は筆をとつて前代を紙上に再現しようとして企てる。こゝに歴史文學が生れる。榮華物語と大鏡とはかうして成る。

榮華物語四十帖、村上天皇の朝に、九條師輔出づるに及んで藤氏振興の機運大に熟したことに筆を起し、堀河天皇の御宇に、藤原忠實が春日祭の上卿を奉仕したことに筆を擱いてゐる。作者については古く赤染衛門といふ説が行はれてゐたが、安藤爲章はその信ずるに足らぬことを切論してゐる。或は前三十帖を赤染の作とし、餘を他人が書きついでと見る説も行はれるが、果してさうか、俄に決し難い。とにかく堀河天皇の朝に成つたものなることのみは、ほゞ首肯してよい。

本書はありのままの事實を、年代をおうて叙述した、所謂編年體の歴史であるが、その間作者が特に力をいれて寫さうと試みたのは、いふまでもなく道長の一代である。それ以前の叙述は、要するに道長の榮華に至る。藤氏發展の迹を示すにすぎぬ。故に道長をとくや頗る精細を極め、その薨去と共に一旦筆をおいてゐる。鶴の林の巻がそれである。殿上花見以下の十帖は、道長薨後寛治年間に至るおほよそを述べてゐる。

榮華物語が粉本としたところは、なほ源氏にあるものゝやうである。月宴から紫野に至る、各帖に名をおふせたと、鶴の林で一旦筆を收めたのは、源氏が幻で一とまづ擱筆した故智に倣うたのではないだらうか。更に續篇十帖も思へば宇治の巻々に擬したらしくもある。文章亦物語類を摸したものらしく、しかも作者の技倆は到底紫女の比でなからう。

つたがため、記事冗漫に流れ贅疣多くして、文章としても上乘のものではない。しかしその短所もまた長所とも見るべく、當代貴族のあるがまゝな生活も窺ひ得られること多く、物語とは、また別箇の趣致なしとしない。

榮華が編年體であつたに對して、大鏡は列傳體を採つてゐる。まつ文徳天皇から後一條天皇に至る十四代の本紀をたて、ついで、冬嗣以下道長に至る、藤氏歴代の列傳を立て、道長の薨去に先づ二年萬壽二年(八五)に至つて止んでゐる。作者は知らるべくもない。或は藤原爲業といふ説もあるが信じ難い。制作年代はほゞ榮華物語と相如くころだらう。

本書亦榮華と同じく道長の榮華を寫すことを目的とせること論を俟たぬころながら、作者の用意に自ら異なるものがある。即ち榮華の作者は道長を無條件に讚美すること、源氏の作者が主人公光君に對するが如きものがある。大鏡の作者は道長の榮華を寫すにしても、必ずしも彼が一舉一動を讚仰の眼を以ては見ない。その反對者に對しても萬斛の同情を惜しまないと共に、道長の行爲に對しても常に嚴正な批評を下すことを忘れない。本書はかくて史論として注目に値する。

又榮華物語がその粉本を既成の物語にとつてゐるに對し、これは新機軸を出して新様を創めてゐる。即ち大宅世繼・夏山繁樹といふ、それ〴〵百數十歳の老翁を點出し、その翁達が雲林院の菩提講に參りあうて、若い頃から見聞せることを物語つたのを、傍聽して筆録せるが本書であるといふのである。この體裁は後の所謂「鏡もの」に通じる形式をなしてゐる。その外榮華が宮廷内の出來事を主とせるに、此は必ずしもさうでないこと、又文章も彼が冗漫であるこ

とは既にいつたが、此は始終緊張せる筆致を以て讀者を厭かしめることなく、勁拔な筆力は同種の作品の間にあつて、嶄然頭角を抜いてゐることなど、本書の特色として數へられよう。

大鏡に追隨した「鏡もの」に今鏡がある。後一條天皇から高倉天皇の御宇までを寫した書である、體裁も文章も大鏡と榮華と兩方から影響せられてゐる。恐らく平安朝最末の作であらうといはれる。

### 一五、説話の集成

説話文學の起原は勿論太古に溯る。古事記・日本書紀等も體系づけられた説話文學と見ることも出来よう。しかしそれらはまた自ら別箇の見地から見らるべき作品だらう。説話を集録した本邦での最も古い作品は日本國現報善惡靈異記三卷である。(この書略しては、)弘仁の頃南都樂師寺の僧景戒の錄するところで、因果の理法を示す説話百十二を集めたもので、漢文で書かれてゐる。その後源爲憲の三寶繪詞(永觀二年一六四四)慶滋保胤の日本往生極樂記(寛和二年一六四六)鎮源の日本法華驗記(長久二年一七〇一)等がつぎに書かれてゐる。皆佛敎文學である。かうした諸作から系統をひいて編纂せられたのが今昔物語集である。

今昔物語集は現存せる卷數二十八。第八・第十八・第二十一を闕くを以て、少くとも三十一卷の大部である。分つて天竺(一五)・震旦(六一)・本朝(三十一)の三部とし、その中また話性によつてそれ／＼小標を分つてゐるが、要するに佛敎説話と世俗説話との二種が、殆ど相半して、合計一千有餘の説話が錄せられてゐる。圖卷の説話とり／＼の興趣に満ちてゐるが中に、本朝世俗の説話中に、平安末期の文化・世相を知るべき題材に富み、津々たる興味も溢れるもの

がある。

作者は古來源隆國と傳へられる。隆國は西宮左大臣高明(醍醐天皇の皇子、一世の源氏)の孫、官は正二位大納言に至り、承保四年(三七)七十四歳を以て歿した。傳によれば、隆國夏日晷を宇治南泉房に避け、往來の旅人を慰はしめて昔物語をせしめ、自らは内にあつて、これを筆録したのが積んで本書を成したのだといふ。この物語集を見るとき、この傳説のあまりに思はざるものなるを思ふ。本書の内容は到底道聽塗説であり得ない。即ち作者は博く内外の典籍を涉獵し、抄録し、分類して本書をなしたので、勿論巷談街説に材を得たものもあらうが、とにかく異常の苦心經營の結果、本書は成つたものといはねばならぬ。作者隆國説にも異説はあるが、隆國に、少くも本書の素材となつたと考へられる作(宇治大納言)のあつたことは認められる。

本書は説話を集大成した點で注目すべき作であり、世相史・風俗史上看過すべからざるものであると同時に國語資料として貴重なものであり、又文章史上、次代文學と緊密な交渉を有してゐる點で頗る重要な文献である。

説話文學としてなほ注意すべきは唐物語である。鎌倉時代に入つての作といふ説もあれど、なほ平安朝末の作であらう。二十七章から成つてゐるが、すべて漢文からの翻譯である。翻譯としては今昔物語集のある説話などもあれど、純國文脈に翻譯した作者の苦心は大なるものがあつたらう。説話文學はなほ次代に入つてその作品はますます多きを加へる。

### 一六、歌壇の新調

拾遺集の撰進があつてから約八十五年を経て、應徳三年(一七四)白河天皇の勅によつて後拾遺和歌集が撰進せられた。撰者は藤原通俊であつた。選ばれた歌は大體に於いて道長時代を中心としてゐる。これについて金葉和歌集及び詞花和歌集が、それより白河・崇徳兩上皇の院宣によつて、源俊賴と藤原顯輔によつて、前者は大治二年(一七二)に、後者は仁平元年(一一八)に成つた。(金葉集は三度撰進して始めて嘉納を得たのである)これらの三集は共に後撰集以後の歌を探ることを主として、それ以前に溯ることがない。今これらの三集を通觀するに、古今集・後撰集等が數人の撰者の合議に成つたに對し、この三集ともに一人の撰者の意見によつてその採否が決められたので、その撰進の後に、當時の歌人達から不平の出ることが多かつた。後拾遺集に對する小鯨集(津守國基が撰者に鯨を略して多く選に預つたからの名といふ)や、金葉集に對する臂突集(えせしふの意)の異名はその間の消息を語るものであり、難後拾遺(源經信の作と)の後拾遺集に於ける、良玉集(源仲)の金葉集に於ける、拾遺古今(藤原)・後葉集(長門前)の詞花集に於ける、いづれもその非難の書であることを思へば、その不平のいかに熾烈であつたかは想像せられよう。

このやうにこれらの撰集は世人の嘲笑を買つたとはいへ、果してその嘲笑に値するやうな集であつたらうか。通俊は後拾遺集に序して、

おほよそ古今・後撰二つの集に入りたるともがらの家集をば、世もあがり、人もかしくて、難波のよしあし定めむこともはゞかりあれば、これにのぞきたり。昔なしつぼのいつゝの人といひて、歌にたくみなるものあり。……これらの人の歌をさきこして、今の世のこと好むともがらにいたるまで、目につきこゝろにかなふをば入れたり。

といつてゐる。かの後撰集の撰者等が徒らに古を重んじて自らの時代を軽く評價したに比して、撰者の意氣は壯とするに足れど、なほわが時代に對する絶対の自信を缺くが故に、その撰歌の中心は勢ひ撰者が視て以て盛時と思惟したところの道長時代におかれたのであつた。これかの榮華・大鏡等回顧の文學の生れたと、その歸向を等しうするものではないか。而してその撰者の庶幾するところはやはり古今集の正調であつたらしいといへ、曾丹によつて唱道せられた新體は暗黙の間に作家達を刺戟して、

なには湯空ふく風に波たてばつものぐむ葦の見えみ見えすみ 讀人しらず  
 さ夜ふくるまゝに汀やこほるらむ遠さかりゆく滋賀の浦なみ 快 疊  
 のやうな清新の調子もあらはれたが、修辭の上に苦心するあまり、  
 梅が香を櫻の花に匂はせてやなぎの枝にさかせてしがな 中原致時  
 さゝがにの巢がく淺茅のすゑごとに亂れてぬける白露の玉 藤原長能  
 の如く纖巧に流れ、卑俗に墮したことはその餘弊である。

金葉・詞花の二集も、前集と同じく後撰以後の作を選んだものだが、更に一步進めて自らの時代を主とした點に於て殊に注目すべきである。殊に金葉集に於いては、撰者俊賴の自ら信ずることの厚きや、自作三十五首、父經信の作二十六首を探つてゐる。この兩集は實に當時に勃興した新派の撰集として、その清新味は後拾遺の遠く及ぶところではなう。

風早みとしまが崎をこぎゆけば夕浪千鳥たちるなくなり 金葉集—源顯仲

詞花集―藤原忠通

わたの原こぎいで、見ればひさかたの雲にまがふ沖つしらなみ  
などはそのすぐれたものだが、その聲響亦こゝに極つて、

達ふことはかたねぶりなる磯づたひねぶりふすともかひやなからむ

金葉集―よみ人しらす

君をわが思ふころは大原やいつしかこのみすみやかれつゝ

詞花集―藤原相如

のやうに拮屈贅牙なものゝ出たこと、恰もかの小説に於て趣向の怪奇を銜うたことゝ相如くものがある。

さて以上三集の中、後拾遺集のみは三代集とその體裁を同じくして、二十卷であるが、他の二集は共に十卷である。或は十卷なる拾遺抄が行はれて、それに倣うた結果ではないかともいはれる。そはとにかくその分類はやはり古今集のそれを襲うてゐるが、後拾遺集で今まで見えなかつた釋教といふ名目が雜歌の中に神祇と並んで設けられたのも、佛教が漸く人心に浸染してゆく趣が看破せられる。又同集で俳諧歌が再興したことも金葉集が連歌の目を樹たてと共に、また注目に値する。

後拾遺集から詞花集に至る頃の歌人として、當時の新派歌人を代表してゐる者は、源經信と、その子俊頼とである。經信(承徳元年(一七五)歿、八十二)は宇多源氏、敦實親王の裔で、官正二位大納言に至り、太宰權帥となつて任地で死んだ。和歌・漢詩・管絃一として達しないものとはなかつた。世に桂大納言といふのは、彼のことである。歌を公任に學んだとはいへ、その作家としての技倆は勿論その上にある。「古風に近し」と八雲御抄には評し給へど、その作風は決して古風を株守することなく、平穩雅醇である。

風さえてうき寝のとこやこぼるらむあぢむらさわぐ滋賀のから崎

夕さればかど田の稻葉おとづれて声のまろやに秋風ぞふく  
など、自然を寫して誇張もなく銜氣もないところは、實にその長所といつてよい。  
經信は一脈の新味を湛へつゝなほ古調をすて得なかつたが、その子俊頼に至つてひたすら歌壇に新奇を樹てるに至つた。古の好忠に踵を接して、その才氣遙に彼に超えた者は俊頼である。語彙の豊富なる、古語・俗語を問はず、その極は、

これきかむこせのさ山の杉のうれに雨もしみゝにくきら鳴くなり  
信濃なる木曾路の櫻さきにけり風のはふりよすきまあらすな  
など故らに耳遠い語を用ひて得々こしてゐたのは缺點だが、

きとすなくすた野に君がくちすゑて朝ふますらむいさゆきて見む  
風ふけば蓮のうき葉に水こえてすゞしくなりぬひぐらしのこゑ  
など佳調もまた多い。その歌の當時にもてはやされたこゑは、その家集散木奇歌集が出てまもなくその註(顯昭の著と傳へる)が出た一事に徴しても察知せられる。

俊頼と並んで藤原基俊亦當時作家として名高かつたが、その歌風は古今集を宗として、ひたぶるに温雅なよみ口であつた。歌人としては到底俊頼に敵すべくもない。基俊の本領は他にある。その他詞花集の撰者顯輔も、その父顯季、その子清輔と、三世相ついで歌道に名があつた。新古二風の中間にあつて、穩健・平明の調を以て名高い。  
むかし見し人は夢路にいりはてゝ月とわれとになりけるかな

基 俊

わが宿は庭もまがきもおしなべて今さかりなりなでしこの花

顯 季

秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月のかげのさやけさ

顯 輔

たまくらにかきやる髪のみだれまでもりも見えぬ秋の夜のつき

清 輔

その他、雲上にあつては崇徳院(長寛二年(一八)崩、四六)の御製は涙なくして拜誦すること難く、緇衣の徒には行尊最もすぐれて、西行の先行としてやゝ注目するに足る。

## 一七、歌論の興隆

歌が一般に流行するにつれて、歌合といひ百首といふやうなことが盛に行はれた。歌合はその起源を那邊まで溯るべきかは今姑くおく、その既に平安朝初期に行はれてゐたことは前節で述べた。さて歌合が行はれるにつれて歌の批評は自然に生じる。そしてその批評の標準となるものは歌論である。歌合・百首が盛行するにつれて歌論もだん／＼盛になつて来る。平安朝の歌論は基俊・顯輔・清輔等に至つて大に興つた。こゝに少しく歌論興起の迹を辿らう。

作家が歌に對して多少の工夫をめぐらし、その作歌の巧拙を思ふ時、既にそこに所謂歌論の萌芽はしてゐるといつていゝ。しかも古代にあつては、それが筆録せられて形の上には及ばなかつたのである。奈良朝から平安朝初期にかけて漢詩文の盛行を來したことは前に述べた。その頃に彼土の詩論の書が舶載せられたであらうこゝは察するに難くなく、又實に、嵯峨天皇の頃には、既に邦人の手に成つた詩論の書も出たこと、亦前述の通りである。かうした唐土の詩論に刺戟せられて、歌論の書は編述せられるに至つたのである。

歌論の書の最も古いものは即ち和歌四式と稱せられる歌經標式(又讀成)・喜撰式・孫姫式及び石見女式である。歌經標式は寶龜三年(三二)藤原濱成の作に係り、喜撰式は宇治山の僧喜撰これを作り、孫姫式は菅原道真がその孫姫のためにもつし、人麿の遺訓を傳へて石見から出たものが石見女式であると傳へられてゐる。これらの四書はいづれも支那の詩論の書に倣つて、歌の風體・疾病を論述したものだ、その果して所傳の作家によつて所傳の時代に作られたかについては異論がある。が少くとも歌經標式は、古寫本の發見によつて恐らく奈良朝期のものだらうと考へられるに至つた。(佐々木信綱氏和歌史の研究、及び武田祐吉氏上代國文學の研究参照)とにかくに歌論の書は詩論の刺戟によつて平安朝の初期に既にその著作を見たことは事實であるといつていゝ。

ついで古今集序は歌の本體を直觀して、心の底から滲み出る情感そのものなりとし、徒らに技巧に囚はれて天真の蔽はれることを排してゐる。しかも全然無技巧なるにも與みせずして、真情と技巧と相俟つて、始て詩美は完成せらるべきことを隱約の間に力説してゐる。卓拔な文學論といはねばならぬ。古今集序の前後にはたゞ歌合の判詞を外にしてはまた纏つた歌論は見ることが出来ない。歌論は公任が出で、こゝに漸く體を備へる。

公任の歌論は新撰髓腦・和歌九品等に窺はれる。その説が古今集序を祖述してゐるものであることは勿論であるが、修辭的技巧の上にもかなり深く説き進んでゐる。そして公任以後の歌論の主潮をなしてゐるものは實にその技巧論である。これ偏に歌合などの流行によつて、成るべく他から非難せられないやうな歌を作らうとするのが當時の作家の念願であり、その準繩となるものが、やがて當時の歌論であつたからである。

かくて當代に入つて、歌合はますます盛に行はれると共に、百首歌の詠せられるこゝも類繁となるにつれて、古歌

の研究も亦大に興り、歌について論議せられることよく、多くなつていつた。今平安朝末期に述作せられた重なる歌論書を瞥見してみよう。後拾遺集に對して難後拾遺、金葉集に對して良玉集、詞花集に對して拾遺古今・後葉集が、それ／＼作られたことは前述の通りである。これらに對してまた辨駁の書も編まれたこともある。(清輔の牧笛集は詞集に對する非難を父のために辨じたのだといふ)

基俊と俊賴とは兩々相對して保守と進歩と兩派の頭目であつたことは前章にも述べた。基俊に悦目抄の著が傳つてゐるが現存のものは後人の假托である。その歌に關する思想は隨時の歌合の判詞による外はない。俊賴には俊賴口傳(俊賴無名抄、俊賴抄、また山木儲顯ともいふ)と歌合の判詞があつて、その歌論は知られる。「大方歌のよしといふは心をさきとして、珍らしきふしを求め、詞をかざりよむべきなり」といつてゐるのは、その詠歌の實際と關聯して注意すべき説だとせられてゐる。その他この頃の書としては藤原仲實の綺語抄、藤原範兼の和歌童蒙抄等がある。

基俊・俊賴について藤原清輔(治承元年(一一八一)歿七十四)がある。父祖三代の歌人で、その父顯輔が詞花集の撰者であつたことは前に述べた。彼は二條帝の仰を承けて續詞花和歌集を撰んだが、帝の崩御にあうて奏覽を経るに及ばなかつた。歌論には袋草子、奥儀抄等の著がある。歌の句脚に韻があることを説くのも一の見解である。新舊二派の間に介在して、いづれかといへば新體により多くの關心をもちつゝあつた父祖の風をうけついで清輔の思想は、更に弟顯昭によつてうけつがれて、次期の六百番陳狀(建久四年(一一五三))に於て闡明せられる。彼は着想用語の必しも古例に囚はれる必要のないこと、歌は風情を重んじて必しも事實に拘るべからざること、詠歌の取材の廣かるべきことなどを力説してゐる。その外袖中抄の著があり、なほ古今集序註・古今集註・拾遺抄註・後拾遺抄註・詞花集註・散木集註等がある。

かく歌論が勃興して來たに附隨して、歌の道に門流の生じたことは注意すべきことである。基俊と俊賴との對立はやがてその前驅とも見るべく、顯輔その家學を傳へて、清輔に傳へるに及んで、こゝに一流の樹立を見るに至り、六條家の名一時に籍甚するに至つた。六條家と稱する所以は即ちその第が京烏丸六條にあつたが故である。今その相承を表示すれば、



の如くなる。このやうに六條家は平安朝末期に一時榮えたが、俊成の一家の興るに及んでまた振はずして衰運にむかつたことは次期に入つて述べるところがあらう。

### 一八、藤原俊成と千載集

仁平初年に詞花集が撰せられてから三十年の月日が流れた。保元・平治兩度の亂を経て平氏の勢望一世を蔽うたが、それも一時、木曾の義仲・關東の義經等相ついで入洛し、帝都は兵亂の巷となり、文學のことまた地を拂うたが、その間にも歌は一道の命脈を保つて、その間續詞花集撰選の命の下つたことは既に説いたが、天皇の崩御にあうて勅撰



集の列に入らなかつた。かくて物情騒然たる時、後白河法皇は撰集のことを思召し立たせられて壽永二年(一八)命を當時の歌人藤原俊成に下し給うたのである。

俊成(元久元年(一八)は道長の女孫に當る。初め基俊に贊をとつて歌を學んだが、また私かに俊頼の新體をも慕うた。嘗て顯輔の養子となつたといふ説もあるが、それは誤傳であるといふ。しかし六條家の風も窺つたであらうことは想像するに難くない。さにかくにこれも諸家の流風をとつて、打して一丸とし、その上に彼獨自の歌風を樹立した。傳へていふ、彼が歌を作るや、深更に灯火の影も薄くあるかなきかの中に、白い直衣のすゝけたのをうちかけ、古い烏帽子を耳までひき入れ、脇息により桐火鉢を抱き、詠吟の聲も忍びやかに、夜更け人靜るにつれて、苦吟の洩れることもあつたといふ。その眞偽は固より判すべくもないが、以てその作歌の態度を察知するに足るであらう。幽玄體の歌風をその理想とし、歌病説を難じなどするは注意すべきことである。古來風體抄及び歌合判詞にその説を見るべく、長秋詠藻にその作歌を見ることが出来る。

またや見むかたの、春のさくらがり花の雪ちる春のあけぼの

夕されば野べの秋風身にしみてうづら鳴くなりふかくさの里

世の中よ道こそなけれ思ひいる山のおくにも鹿ぞなくなる

顯輔清輔等六條家の人々のつき／＼に凋落して行つたあとには俊成は歌壇の第一人者であり、かくてこそ撰集の院宣は下つたのである。さて俊成が院宣を承けた時は兵馬倥傯の際であつたが、爾來四年、文治三年(四七)撰の成つた時は、天下漸く平いで、武家の世の礎のおかれた時であつた。永く千載の後に傳はれと祝福して、集は千載和歌集と命名せ

られた。都を落ちようとして詠草を托して去つた忠度の風流、東國にありて鳴立澤の詠の選に洩れたこゝをきいてまた旅をつゞけたといふ西行の執心等は本集に關聯した逸話であつた。二十卷、千二百首。集中の作家は基俊・俊頼・清輔等撰者の渴仰し師事した先輩を始め、同時代の俊慧法師・西行法師・後徳大寺實定等の歌が多く採られてゐる。

前述のやうに、俊成は諸家の門を敲いて、諸流の風を涉獵し、これを折衷して平坦にして典雅な歌風を興した。金葉、詞花時代のやうな、ことさらな新體は既に時代の要求ではなかつた。時代は再び古今の典麗を思ひ、雅醇を欲した。千載集の歌風は一言にしていへば典雅であるといへる。前出の各集の長所をとつて、その中正を得ようとして、ほゞその所期をなし得たといつてよい。

なほ前にもいつたやうに、この集の時代は政治的・社會的に見て、國民が大變革に際會した時であつた。戦亂につぐに戦亂を以てし、權門の一起一伏は、恰も走馬燈の如く激しかつた。現世の惡みがたいこゝはいたく人心を脅かした。嘗ては事相の一面にのみ偏して特殊階級の人達に弄ばれてゐた佛教も、漸く一般的に人々の心の奥にくひ入つてゆく。佛教思想が歌の上にしみ出るのは、蓋し當然であらう。千載集にはそれが目立つて來た。

要するに本集は古今集以來の歌風を整理して、混沌たりし平安朝末期の歌壇に、その向ふべきところを正しく指示したものとといふべく、なほ前諸集から蟬脱してその獨自の詩境を開拓するに至らなかつたことはこの時代として止むを得なかつたことであり、その點に於て本集は次に來るべき新古今集にその餘地をのこして置いたものといへよう。

千載集の撰者俊成と相並んで、その時代を代表すべき作家は僧西行である。つきに少しく西行について述べよう。西行は俗名を佐藤義清(靈清と)といひ、その先は田原藤太秀郷から出て、代々武を以て家をなしてゐた。鳥羽上皇

に仕へて北面の士になり、左兵衛尉となつたが、夙に出離の志があり、保延六年(一〇八)二十三歳の時祝髪して、法名を西行又圓位と稱した。出家後の西行は一簑一笠に身を托し、東西に行脚し、南北に抖擻し、悠々自適自然に没入して、飽くまでその真髓に参到して、歌詠に、その懐を述べてゐた。かくて生涯を漂浪の中におくつて、建久元年(一一八)二月示寂した。時に年七十三。山家集はその家集である。

西行の歌は直に自然の聲そのものである。座ながらにして名所を知る底の歌人の詠と混同してはならぬ。況やかの六條家・二條家といふ如き、その好むところによつて強ひて他を排擠しようとするやうな世間的名聲に囚はれてゐる人達とは同日に論すべきではない。西行は浮世は棄てたが、歌をまでは棄てなかつた。撰集抄はその著作と傳へられるが確證はない。

せとわたる棚なし小舟こゝろせよ霞みだるゝしまき横ぎる

つく／＼とものを思ふにうちそへてをりあはれなる鐘のおとかな

ねがはくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ

西行は俊成と共に平安朝の最後を飾るべき歌人である。その世間的の名聲はとふところでない。俊成が桐火鉢を擁して苦吟してゐる間に、西行は直に自然にまのあたり面つき合して歌作してゐた。その傾向は全く相反してはゐたが、ともかくにも平安朝掉尾の歌人として、この二人の名は不朽に傳はるべきである。

## 一九、謠ひもの、發達

謠ひものとして古く神樂歌と催馬樂とのあつたことは既に述べたところである。こゝには王朝中期以後に發達したそれについて少しく述べておかう。

まづ朗詠はその起源がいつ頃にあるかは詳にし難いが、醍醐天皇の頃から榮えはじめ、一條天皇の御宇にはかなり盛に行はれてゐたことは種々の物の本によつて知ることが出来る。始め琵琶を伴奏樂器として用ひたが、後には笙・箏・篳篥・笛を用ひるやうになつた。主として漢詩文の佳句に曲節を附けて朗吟したもので、古來の名歌をも亦朗詠したものである。もと一定の章句、一定の曲節があつたとも思はれぬが、後にこれを生じてこゝに朗詠といふ謠ひものとなる。和漢朗詠集(藤原公任撰)と新撰朗詠集(藤原基俊撰)とはそを集めたものであるが、果してその全部が朗詠せられたものであるか否かは疑はしいといはれる。漢詩文の句は多く一聯の對句をとつたもので、これを訓讀するにはなるべく國語の語法に従ふやうに苦心してゐるとはいへ、悉くが成功した翻譯文學だと稱することは出来ない。

嘉辰令月 歡無極、萬歲千秋樂未央。

金谷醉花之地、花毎春句、而主不歸。南樓甃月之人、月與秋期、而身何去。

朗詠は催馬樂と共に主として遊宴の際に歌はれた歌詠であつたが、こゝに佛教がますます榮えるにつれて、佛事に際して諷詠せられる佛會歌謠もいよ／＼發達したのは自然の理である。而して平安末期に於て聲明は大成したのである。聲明には二流ある。一は圓仁(慈覺大師、貞觀六年、一一二四)に始つて、源信(惠心僧都、寛仁元年、一一七九)に大成した天台の流と、空海に創り、寛朝(長徳四年、一一六五)に大成した真言の流とである。そしてその謠ひものは三寶を禮讚したもので、讚頌、唄讚、讚歎又は單に讚ともいはれる。そしてその用語から見て、梵語のまゝに唱

へる梵唄(單に唄と)、これを漢譯した漢讚、及びそれを國語にうつし又は國語を以て新作した和讚等に區別せられる。梵唄と漢讚とは今暫く措く、和讚は多く七五調をたゞんで作られる。そしてそれはやがて雜藝の源流をなすのである。その作られた時代は遠く平安朝の初期に溯ることが出来る。かの伊呂波歌は古く空海の作と信ぜられ、今なほその説の有力な保持者もある。

さて雜藝とは、平安末期に行はれた諸種の歌謠を總括してとなへる語である。今様といひ、古川様といひ、田歌・棹歌・辻歌といひ、神歌・法文歌・沙羅林といひ、その他種々の名目がある。それらの歌詞を集めて雜藝集といふ書のある。つたこまは物の本にも見えてゐるが、現存してゐない。また後白河法皇(建久三年一六五)はいたくこれを好ませられ、御自らこの類の歌を輯録し給うたものに梁塵秘抄がある。大部分は散送して、今僅にその一部分を傳へるにすぎないが、これによつて見ると、當時の謠ひもの形式は、七五四句の今様體、佛足跡歌體、短歌體等があり、内容も和讚の系をひいて佛敎に關したものの、催馬樂の系統をひいて民謠の性質をおびてゐるものなどがあり、歌が類型に隨したに對して別様の趣に富んでゐる。

ほとけはつねにいませども、うつゝならぬぞあはれなる。人のおとせぬあかつきに、ほのかにゆめにみえたまふ。まへへかたつぶり、まはぬものならば、むまのこやうしのこにくゑさせてん、ふみわらせてん。まことにうつくしくまうたらば、華のそのまであそばせん。

なほ附けていふ。催馬樂・風俗・朗詠及び今様をえいぎょ野曲と總稱することがある。而してこれらの謠ひものは次期に入つてます／＼發達してゆく。

## 二〇、漢文學の隆替

平安朝の初期に漢文學が隆昌を極めたことは本章の最初に述べたところである。さしもに殷盛なりし漢詩文の中期以後に於ける情勢はどうであつたか。

貞觀・元慶以後國文學の擡頭と共に漢文學が衰へはじめたが、なほ男子は當時漸く興りそめた假名を女文字と貶して、漢文學を修め漢詩文の製作に苦心してゐた。しかしその作るところは氣魄に缺けて、たゞ一聯一句の巧に誇る底のものゝみであり、行文著しく和習をおびて來た。大江音人・菅原是善・島田忠臣・都良香・菅原道真・紀長谷雄等の名が殊に著聞してゐる。その家集の中について、田氏家集(忠)・都氏文集(良)・菅家文集(香)・菅家後集(道真)等が名高い。

延喜の頃は古今集勅撰のことなどがあつて、漢文學は著しくは著はれなかつたが、それが暗々の中に國文學の上不及ぼした影響は蓋し大きなものがある。古今集の序、又集中の歌を見れば思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

天曆の御代は後撰集の撰進せられた時代だが、歌に生氣のなかつたことは前に述べたが、漢文學はこゝに一時復活の曙光を見ようとしたのであつた。大江朝綱・同維時・橘直幹・菅原文時・源順・兼明親王等は當時の名手である。朝綱と維時とは従兄弟で、ともに音人の孫である。才藻一時に高く、殊に朝綱が渤海の人の歸るを送る詩の序に「前途程遠、馳思於雁山之夕雲。後會期遙、沾纓於鴻臚之曉淚」といつて彼を感じしめたことは有名である。文時は道真の孫、菅三品と稱せられ、世に朝綱と共に天曆文壇の二星といはれる。その織月賦は林春齋が評して本朝文粹中の歴巻と評した作である。兼明親王は醍醐天皇の皇子、中務卿でいらせられたが故に、前中書王と稱せられる。藤氏に憚ら

れて憂悶措かず、嵯峨に隠れて兔裘賦を作る。かく文星一時に輩出したとはいへ、徒に美辭麗句にその巧を競ひ、空疎な内容を綺語に包むにすぎなかつた。

ついで一條天皇の御代も文運の隆昌な時代で、漢詩文は歌と並び行はれたが、その情態は天曆時代と毫も異なるところはなかつた。維時の孫なる大江匡衡は當時にあつて最も著はれた文人である。健筆を以て聞えたが、その文に品位の見るべきものはないのは蓋し人格の反映である。當時にあつて大江氏と相並んで文を以て家を樹ゝゝゝたものは菅原氏であつた。寛弘の頃輔正は一世の耆宿であつたが、聞えた作の残つてゐるものがない。慶滋保胤は菅原文時の門に遊び、後佛門に歸して寂心といつた。日本往生極樂記はその作である。その門に具平親王がある。村上天皇の皇子で、中務卿におはしたが故に、兼明親王に對して後中書王といふ。前中書王に比して才藻いたく劣り給ふ。その他紀齊名・源爲憲・藤原有國などもその名が聞えてゐる。

さて如上諸家の作を集めたものに本朝文粹・朝野羣載等がある。本朝文粹は藤原明衡(後冷泉天皇一七二八崩)の撰で、文選の體に倣うて古人の詩文を輯めたものである。明衡には他に雲州往來(雲州消息、明)や新猿樂記等の著もある。朝野羣載は三好爲康(延保五年一七一九)の撰である。爲康には拾遺往生傳などの著もある。爲康とほゞ同時に大江匡房(天永二年一七七)がある。匡衡の曾孫で、一代の鴻儒であつた。その暮年詩記に自ら「予四歲始談詩、八歲通史漢、十二賦詩、世謂之神童」といふを見て、その穎悟のほど察すべきである。續本朝往生傳、本朝神仙傳等の著がある。その江家次第は有職故實家の尙ぶところのものであり、江談抄は一種の雜纂として興味がある。藤原季綱は南家の流、本朝文粹について本朝續文粹の編がある。その子通憲は後薙髮して信西といつた。博覽宏才稀に見るの俊秀

である。後白河天皇の御乳母の夫として天下の樞機に參畫し獻替するところ多かつた。惜いかな才を恃み寵に誇り、その終をよくせず、平治元年(一一八)藤原信賴亂を起すや慘禍にあうた。本朝世紀・法曹類林等の編著がある。要するに平安末期の漢文學は纔に因襲によつて表面その盛を示すのみで、強弩の末勢魯縞を穿つこと能はざる情勢であつた。

### 第三章 近古の文學

#### 一、序 説

藤氏擅權の弊はつひに武家興隆の機運を誘起し、ひいて源平の擾亂を醸成し、その結果は武家政治の樹立となり、天子はたゞ虚器を擁し給ふのみで、公家は京に、武家は關東に相對立して文化の中心は東西に分れた。しかも武家の文化はいまだ進まず、一世の文運を支配するには餘りに無力であつたのに、一方公家は昔日の文化にのみ憧れて、返らぬ昔に戀々として新しい地歩を開拓する氣魄に於て缺くるころがあつた。

かくてうちつゞく天下の爭亂は漸く收つたが、人心の動搖は甚しいものがあつた。この機微を捉へて宗教界は異常に活氣を呈した。前代の貴族宗教たる天台・眞言はなほ眠つてゐたが、王朝中期から擡頭しそめた淨土教は俄然この際に抜くべからざる勢力を張つた。又教外別傳不立文字を標榜する禪宗は武家の間に絶大な信仰を獲た。偉大な信念の下に起つた救世の豫言者日蓮も既成宗派にとつて侮るべからざる強敵である。新興の宗派は人心に新しい力をうゑ

つけ、武家の剛健な風習と相俟つて新時代の思潮を形づくつてゆくのであつた。

かく武家思想・佛教思想に化せられてゆく一面に、なほ王朝の耽美的風潮をも全く脱しきれず、新舊の二潮流が相錯してゐる點に當代文學の特徴があるともいへる。後節に説くべき軍記文學及び説話文學にこのことは著しく見られる。

翻つて作家の點から見ると、前代の文運を把握してゐた宮廷の人達は既にいつたやうに氣力なく、武家また彼に代るべき素養を有してゐない。當代に於て、最も文章に明い人達は繙衣の徒であつたが故に、當代文學は法師の手になつたと考へられるものが多いのは當然のことである。貴族から僧侶へ、やがては庶民の手に文權のおつべき過渡期がこの近古時代である。

頼朝が幕府を鎌倉に創めた建久三年(一一八二)から、北條氏の覆滅を経て、南北兩朝の分立に及び、更に室町幕府の時代・安土桃山の時代を過ぎて、遂に徳川氏が江戸に幕府を開いた慶長八年(一六三二)に至る約四百年を今概略左の二期に分ける。

(イ)鎌倉時代(一一八五—一三〇〇)約百五十年の中、承久三年(一一八二)までの約三十年は嚴密にいへば平安朝時代の延長と見ていゝ。千載集に於て歸趨を得た歌が更に有終の美を濟した時代である。上に歌に堪能にまします三上皇おはし、下に定家・家隆・良經・慈鎮等の歌人輩出して歌壇に一時に絢爛の花の開いた時期で、新古今集は即ちその收穫であつた。承久の亂後幕府の權威確立し、京方の勢力は全く失墜してしまつた。政治的に關東は京を壓服したが、文學に於ては京は儼としてその地位を保つてゐた。とはいへ、京の人々といへども潑刺たる生氣は全く失せて、徒に前代を憧憬するの

みで、更に自信なく、釘釘補綴をこれ事とし、模倣假托の書が續出した。而して歌に於ける門流の争は政争とむすびついて漸く露骨となつて來た。この時代で注目すべきは軍記文學と説話文學との續出と連歌の勃興とである。

(ロ)室町時代(一三〇〇—一六〇〇)この時代の中、最初約五十年は即ち南北朝分立の時代、中約四十年は室町幕府の時代、最後約三十年は安土桃山の時代である。初中終通じて戰亂相つき、殆ど寧日なき二百數十年であつた。後醍醐天皇の建武中興の御偉業は久しく武家の手にあつた政權を皇室に收め給うたが、それも一時、やがて足利氏の興起と共に王政の夢は破れた。かくて悲境に沈んで異常に興奮した南朝方の人心は發して新葉集となり、その歌には一種悽愴の氣をおびるに至つた。と同時に軍記文學にも太平記のやうな偉篇を生じた。室町幕府の時代の前半は比較的無事であつたが、應仁以後は所謂戰國時代で、天下は全く戰亂の中に没し、生民塗炭に苦しみつゝ、安土桃山時代へと移行行く。この時代は禪宗が盛んに行はれ、萬般の藝術亦その影響を受けないものはなかつた。枯淡にして安靜、しかも無限の活力を藏する底の藝術である。この時代の文學はかの美術工藝に於ける如き發展を見ることはなかつたといへ、詠曲・狂言の發生は、やがて次期に發展すべき劇文學の萌芽であり、同時に禪宗的藝術の典型である。連歌亦この時代に宗祇の出るあつて大成した。戰國時代から安土桃山時代にかけて、連歌は更に一轉して俳諧連歌の發生を見るに至り、お伽草子の出づることもますます多く、淨瑠璃の起源亦こゝに求めることが出来る。そしてそれらはやがて近世に至つて大に興らうとするのである。

近古の文學を概説することは以上にとゞめて、以下序をおうて當代の文學を叙述しよう。

## 二、新古今集と新勅撰集

110

既に鎌倉開府のことがあつて、政權は關東に歸したとはいへ、京都には英邁な後鳥羽天皇の君臨し給ふあり、銳意朝家の恢弘を謀り給ひ、いつかは再び平安の盛時にかへさうと努め給うたが故に、上下何とはなしに活氣をおびて見えた。天皇はまたすぐれた歌人でましく、御子なる土御門・順徳の二帝亦歌に堪能でいらせられた。かくて臣下にも亦歌をよくする人々相ついで出で、潑刺たる時代の氣分と相應じて、正に歌壇の黄金時代を現出した。この黄金時代は新古今和歌集で代表せられることは前述のとほりである。

天曆の御時梨壺に和歌所をおかれて以來、歌集勅撰のことはあれど、歴朝また和歌所をおき給ふことはなかつたが、後鳥羽院は御讓位の後、建仁元年(一一八一)七月二條殿にこれを設け、左大臣良經以下十一人の名流を寄人とし、源家長を開闢とし給うた。かくて院は同年十一月歌集撰進の仰を和歌所に下し給うた。専ら撰に與つた者は右衛門督源通具・大藏卿藤原有家・左近衛權中將藤原定家・前上總介藤原家隆・左近衛權少將藤原雅經の五人であつたが、爾餘の寄人も亦その議に干與したらしく、上皇はなほ足れりとせず、御親ら御合點し給うた。而して元久二年(一一八五)一まづ撰を了へて竟宴が行はれた。しかしその後も屢々切繼が行はれたことは定家がその日記に明記して「出入如反掌」といつてゐるにても知るべく、いかに上皇が本集の完璧を期せられたかを知ることが出来る。切繼のこの承元四年(一一八七)まで行はれてゐたのは、文獻に徵すことが出来る。上皇はその後隱岐へ御遷幸の後も銳意本集の切繼を事とし給ひ、新古今和歌抄をものし給うたのである。

本集輯めるところの歌數約二千、これを二十卷に分ち、四季以下諸勅撰集の例によつて分類してある。和漢兩様の序を首尾に備へて體裁頗る完備してゐる。國文序は上皇の聖作に擬して藤原良經筆をとり、漢文序は藤原親經の執筆に成るといふ。千載集が成つてより僅に二十年、堂々たる本集の結集を見ることは實に偉觀と稱してゐる。古今集以下本集に至る八部を一括して八代集と稱して、歌壇ではこれを珍重する。

本集の序に「むかし今時を分たず、高きいやしき人をきははず」、「ひろく求め、あまねく集め」、「萬葉集に入れるうたはこれを除かず、古今よりこのかた七代の集に入れる歌をば、これをのすることなし」といつてゐるに見て本集の撰進の方針を知るべく、現代を中心とし院を始め奉り、西行・慈圓・良經・俊成・定家・家隆・寂蓮・雅經・有家・秀能・式子内親王・宮内卿・俊成女等の作多く撰ばれ、古人では、僅に人丸・貫之・和泉式部等がやゝ多いただけである。以て自ら矜持することの高位ことが知られよう。

本集の歌風は千載集をうけて、これを大成したものである。内に裏める思想に發展の迹はない、たゞその表現の形式に於て格段の進歩を見るのである。古の好忠・俊賴等のやうに故らに佶屈な語彙は用ひないが、その洗鍊せられた修辭の技巧を以てよく清新な趣致を表はさうとした苦心は多とせねばならぬ。

逢坂やこすゑの花をふくからに嵐ぞかすむ關のすぎむら

宮内卿

くれてゆく春のみなとはしらねどもかすみにおつる宇治のしばふね

慈圓

いまぞ知る思ひいでよと契りしはわすれむてのなさけなりけり

西行

しかし餘りに修辭の巧を求め極、やゝもすればその陥らうとする短所は天真を缺き、纖巧にして生氣を失ふこと

であり、又餘韻を求めて意義の晦澁を來すことである。さうした弊竇に本集の歌のあるものは證してゐないといへなす。

年もへぬ祈るちぎりは初瀬やまをのへの鐘のよその夕ぐれ

定家

しられじなおなじ袖にはかよふともたが夕ぐれとたのむ秋風

家隆

の如きはそれである。

佛教思想の浸染するや、本集にもその痕跡を見ることが出来る。釋氏の徒に作家が多いこともその一因だらうが、こゝにも時代の色彩が見られよう。所謂釋教歌の大部分は經文の翻譯にすぎないが、その他集に比して著しく數を増してゐるのも、やはり原因はこゝに求めていふ。

いづくにもすまれずばたゞすまであらむ柴のいほりのしばしなる世に

西行

おもふことなどふ人のなかるらむあふげばそらに月ぞさやけき

慈圓

前代から行はれてゐる本歌取も盛に行はれてゐる。脱胎の妙はあつて、一種の表現法の練習としてはこゝにかく、詩歌の道の邪道に入つたものと見るべきであらう。

とにかくに多少の難點はあるにせよ、本集は近古の初頭に輝く大きな光彩であつて、遂に延喜の古今集と相對して歌壇の異彩である。

新古今集と同じ時代の歌壇に於ける他の偉觀は千五百番歌合である。建仁元年に後鳥羽院はじめ三十名家を左右に分ち、その各人の百首歌をとつて、之を合せて二十卷とし、院・良經・通親・慈圓・忠良・俊成・定家・顯昭・季經・師光の十家

が各二巻づゝ判じたものである。作家も判者も共に一代の俊秀である。

かくて承久の亂後後堀河天皇の貞永元年(一一八二)また勅撰集が出来た。新勅撰和歌集である。撰者は藤原定家である。後鳥羽院・順徳院御父子は都をあとに孤島の嵐に悲涙をしぼらせ給ひ、土御門院は阿波で崩じ給うた後である。本集の歌風を見るに、新古今の華美の風は地を拂ひ、平淡の調子が現はれてゐる。撰者がこの時七十一の高齡であつたこともその一因であつたらう。

この集で注意すべきは鎌倉が京都に文化をとり入れようとしてゐること、それは宇治川(ものゝふのやそうち川)のあじろ木にいさよふ浪のゆくへしらすも一萬葉三、人丸一によつた名であるといふ異名が本集に冠されるほど東國武士の作歌が目立つて多く撰入せられてゐることである。なほ本集に承久三上皇の御詠を一首も採らずして、關東に心をよせてゐた西園寺公經の作を多くとつたことは本集に加へられる非難の一である。

### 三、新古今時代の作家

新古今時代に於て傑出せる作家としては、帝王に後鳥羽・土御門・順徳三上皇は申すも畏し、俗人では良經・定家・家隆、緇衣では慈圓・寂蓮・長明、女流では式子内親王・宮内卿・俊成女等有名である。なほやゝ後れて鎌倉右大臣實朝の歌は特異の光輝を放つてゐる。中について定家と家隆とは、恰も古今集に於ける貫之と躬恒とのやうな關係を保つて、當代にあつて、最重んぜられてゐた。

定家は千載集の撰者俊成の男で、仁治二年(一一九二)八十歳を以て館を捐てるまで、歌壇の重鎮として聲望一世に高く、

前には新古今集撰者の首班となり、後には新勅撰集を獨撰して奉つた。彼はいふ、「和歌に師なし。たゞ萬歌を以て師とし、心を古風に染め、詞を先達にならば、誰か詠ぜざらむや」。聽くべき言である。しかしその用語は専ら三代集を出づべからずと説くに至つては尙古の餘弊といはねばならぬ。かく限られたる語彙を以て新意を表現しようとするが故に、勢修辭上の技巧によつてその缺を補はねばならぬ。その歌が技巧に終始してゐるのはその故である。但しその老境に入つての作には平明なものも少くない。拾遺愚草はその家集である。

かへるさのものとや人のながむらむまつ夜ながらの有明のつき

春の夜の夢のうきはしとだえして峯にはなるよこ雲の空

玉ゆらのつゆも涙もとまらずなき人こふる宿の秋かぜ

なほ彼は父の後をうけて所謂二條家の礎を固め、歌道の宗家として後世に仰がれる基を開いた。このことについては次節に述べる。

家隆は俊成の門人である。定家と友としよく、互に相推重してゐた。定家のやうに技巧に苦心すること甚しくなく、比較的なだらかなよみぶりである。作歌の多きこと驚くべきものがある。定家には歌屑はないが、彼の歌は玉石相混滑してゐる。後鳥羽上皇の寵厚く院の遷幸の後も迭に歌を贈答して慰慮を慰めまらせたことは、定家がともすれば關東の歡心のみ買はんとする態度と對比して、その人となりを知るべきである。嘉祿二年薙髮し、翌三年(一一八)薨じた。年八十。家集を壬二集といふ。(壬二とは壬生の二位の義。彼が壬生に家居してゐたからの稱。)

かすみ立つ末のまつ山ほのくくと浪にはなるよこ雲のそら

下もみちかつ散る山のゆふ時雨ぬれてやひとり鹿のなくらむ

しがの浦や遠ざかりゆく波間よりこほりていづる有明の月

定家・家隆等と共に和歌所の寄人にさゝれた後京極良経は彼等にもました作家であつた。攝政兼實の子、後鳥羽院に重用せられ、建仁二年攝政となり、元久元年太政大臣に任ぜられた。歌を定家に學び、詩文を文章博士藤原親經に學んだが、いづれも出藍の譽がある。新古今集の撰集のこゝにも、寄人として與つたものゝやうである。なほ同集の國文序はその作るところだといふ。(なほ漢文序はその師親經の作である)その歌は感情のゆくにまかせてすなほにのみ出で、故らに作爲した迹がなく、清新の氣に富んでゐる。實に當代第一流の作家と稱すべきである。惜しい哉年齒三十八の壯齡で、刺客の凶刃の下に墮れた。時に新古今集の成つた翌建永元年(一一八)三月であつた。月清集はその家集である。

あふ坂の山こえはてながむればかすみにつゞく志賀のうら波

人すまぬ不破のせきやの板びさしあれにし後はたゞ秋のかぜ

きりくすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき一人かもねむ

天台座主慈圓も當代の作家である。良経の叔父、多作を以て鳴る。従つて姪良経の作が金玉の詠に富んでゐるに比して駄作の多いのは當然である。彼も亦和歌所に召された一人だが、緇衣の徒なるが故に、歌にもその臭のするものが多い。嘉祿元年(一一八)示寂した。世壽六十九。慈鎮はその謚號である。家集は拾玉集といふ。

天の原富士のけぶりの春の色霞になびくあけぼのよ空

うき身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月



わがこひは松をしぐれのそめかねてまくすが原に風さわぐなり

これらの作家達をその傘下に集め、當代歌壇の保護者の地位に立つていらせられたのが後鳥羽院である。院の作家としての天分も亦すぐれたものである。鬱勃たる霸氣を内に藏して、姑く歌に翰晦し給うたことゝて、潑刺たる御氣宇は自ら御製の上に表はれて、清新の趣は輒ち語句の間に溢れてゐる。しかも事御志と違うて晩年を孤島に侘び住み給うては感慨深い御詠が多かつた。延應元年(九八)聖壽六十を以て隱岐に神去り給うた。

おく山のおどろの下をふみわけて道ある世ぞと人にしらせむ  
人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふ故にも思ふ身は  
われこそはにひ鳥もりよおきの海の荒き浪風心して吹け

増補  
一、おどろ下を二折  
鳥もりを見よ

以上の作家と時を同じくして、鎌倉に出た源實朝は特色ある作家である。頼朝の子で、兄頼家について源家の統をついだが、承久元年(七九)鶴岡社頭に右大臣の拜賀式を挙げようとして、甥公曉のために、社頭の白雪をそめて、二十八歳を一期として非業に瘞れた。若くして定家に歌を問うてその風をうけたが、後萬葉集を知るに及んで、その歌風も變じて、たど／＼しい修辭の迂路を避け、端的に衷情を歌詠に發した。語彙も古語・漢語をとはず、道勁の調は全く他と揆を異にし、實に當代に異彩を放つてゐる。歌集を金槐集といふ。

はこ根路をわがこえ來れば伊豆の海やおきの小島に浪のよる見ゆ  
いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる  
時によりすぐれば民の歎なり八大龍王雨やめ給へ

### 四、師範家の興起

平安朝の末期に、藤原顯季・顯輔・清輔等相次いで出て、六條家の勢力が一世を風靡したことは既に述べたところである。清輔の後に、顯昭・季經・有家等が出て、近古の初頭に六條家の命脈を維いでゐたといへ、漸く擡頭し來つた二條家の力には抗すべくもなかつた。顯昭が宏才博識を以て二條家と對抗してゐたことを外にして六條家の活躍はあまり見られなかつた。顯昭については前章に附説したところがある。彼と二條家との間を知るべきものに六百番陳狀及び顯註密勸を擧げることが出来る。前者は建久四年(五三)秋左大將良經の第で行はれた六百番歌合の俊成の判詞に對する批評であり、後者は彼の古今集註に對する定家の勸(かたがへ)を慶融(定家の孫)が録した書である。顯昭の弟季經と定家との反目、實治二年(〇八)仙洞御歌合の爲家(定家の子)の判に對する知家(清輔の弟)の連性陳狀など亦兩家の消息を窺ふに足るものである。

二條家と六條家との確執はその學風の相違から來たものであると共に、また一面政治上の權勢の争に附隨して深められたとも考へられる。即ち土御門通親對後法性寺兼實の争がこゝに反映して、前者が六條家を援けば、後者は二條家を支持し、こゝに相對抗してゐた觀がある。そして兼實の一統が廟堂に地位を確保すると共に六條家は衰滅の淵に淪んだのであつた。しかし、さうした世俗的理由以外に二條家が興つた所以は勿論定家の力に職由する。

定家の歌人としての天分はとにかくにして、その學界に致した多大な貢獻は仰ぐべきものがある。その絶大な精力と明敏な頭腦とは後世に幾多の校定本を残した。老來視力の減衰にも拘らず孜孜として倦むところを知らなかつたそ

の精進よりは敬仰に値する。青表紙本源氏物語がいかに後世に弘通したか、貞應本古今和歌集がいかに定本として重んぜられたかを思へ。その他多くの彼によつて校定せられた本文がどれほど後の學者を裨益したことか。

又彼は従来の歌論を集大成して後生をしてその依るところを知らしめた點にその偉大さを見る。彼によれば歌の理想は有心體にとゞまるといふ。そしてよい歌は「よく／＼心をすましてその一境に入りふしてこそ稀にも詠まるゝこととは」あるといひ、「歌の大事は詞の用捨にて侍るべし」とて、「すべて詞にあしきもなく、よろしきも有るべからず。つゞけがらにて歌詞の優劣侍るべし」きて、詞のつゞけがらに調和あるべきを力説し、心と詞との相關を論じては、「心をさきにせよと教ふれば詞を次にせよと申すに似たり。詞をこそ詮とすべけれといはゞ、又心はなくともといふに似たり。所詮、心と詞とを兼ねたらんをよき歌と申すべく、心詞の二つはたゞ鳥の右左の翼の如くなるべきにこそ」きいつて、内容と形式との調和を説いてゐる。彼が歌論は詠歌大概・近代秀歌・毎月抄等の著によつて、ほゞうかがふことが出来よう。なほ彼の名によつて傳へられる歌論の書は随分多いが、その大部分は後人がその説に權威づけんがための假托に出でたものである。

俊成によつておかれた礎石の上に、定家によつて築き上げられた二條家は、その子爲家(建治元年(一一九一)没、七八)によつて確實に後代に傳へられたといつていゝ。爲家は父祖の衣鉢をついで歌を以て知られ、後醍醐院の旨を奉じて建長三年(一一九一)續後撰和歌集を撰進し、こえて文永二年(一二五)同院の仰によつて續古今和歌集の撰に與つた。もと本集は爲家單り院宣をうけたのを、後藤原家良・藤原基家・藤原行家・藤原光俊(但し家良は泰覽に先立つて文永元年に歿した)亦撰に與るに至つたので、爲家は心算かに平でなかつたといふ。彼は父に見るやうな霸氣もなく才氣にも缺けてゐた。たゞ温厚な君子人で、その點守

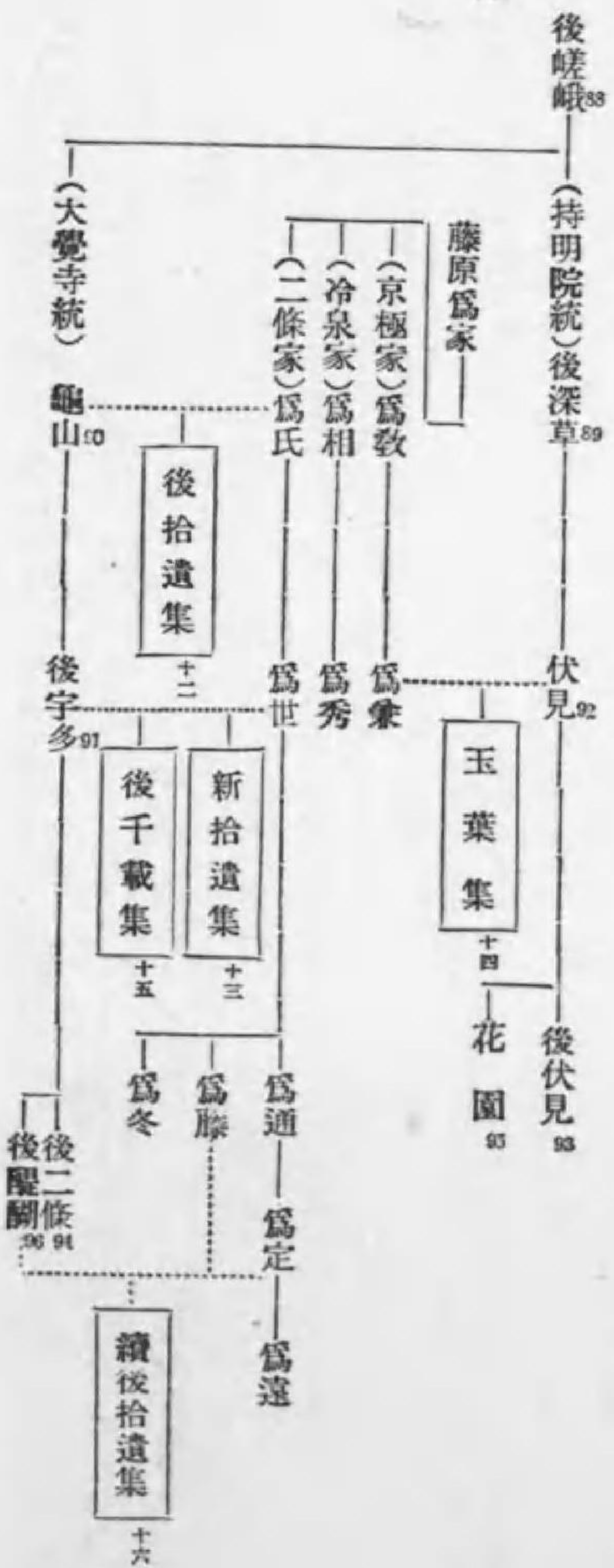
成の人として父祖の業を繼承して、二條家の家名を安泰の域におくに力あつたと見ていゝ。彼は「和歌を詠ずること、必ずしも才學によらず、たゞ心よりおこると申したれども、稽古なくては上手のおぼえとりがたし」といひ、又「歌をば一つ橋をわたるやうに詠むべし。左へも右へもおちぬやうに斟酌すべきなり」といつてゐるやうに、保守的・消極的な考をもつてゐた。要するに定家の説を祖述して、その持外へは一步も出でじとするのが彼であつた。

爲家に至つて二條家の歌壇に於ける地位は確保せられた。爲家の歿後その三子爲氏・爲教・爲相各々家を立てゝ互に相反目したが、その正統をついだのは長子爲氏で、父祖三代の獨撰に成る千載集(俊成)・新勅撰集(定家)及び續後撰集(爲家)等を以て「家の三代集」と稱し、歌道の宗家を以て居た。爲氏の二弟、爲教の家を京極家(又毘沙門堂家とも)、爲相の家を冷泉家と稱した。が、爲氏と爲相とは、父爲家の死後遺産相續のことによつて、骨肉相争うたことは、爲家の後室で、爲相の實母たる安嘉門院四條(判髮して阿佛尼といふ。弘安六年(一一九四三)歿)がその暴狀を鎌倉に訴へたことによつて有名である。但し冷泉家の歌論に於ける主張はさして見るべきものもなく、歌壇に於ける勢力も大したものではなかつた。

爲相の爲氏と争ふや、爲教は同母兄爲氏に對する不快感から爲相と相援き、二條・京極二家亦相関ぐに至つたが、その子等の時に及んで、持明院・大覺寺兩統迭立の争議と結び、その間歌論に於ける主張の扞格、詠歌に於ける歌風の相違から兩家の軋轢はますます激成せられた。即ち爲氏の子爲世は自ら定家の正統を傳へたと思惟して依然退嬰的意見を有せるに對し、爲教の子爲兼は「歌と申し候ものは、此頃花下に集る好事などのあまねく思ひ候やうにばかりは候はず」とまづ痛棒を正統家の頭上加へ、「古歌を多くおぼえ家々の抄物を見るばかりによつて、歌のよく詠まれば、末代の人々次第に見てはかしこくぞあるべき」と擲論一番し、直に古歌をとつてその目標とすべきをいひ、所

謂制の詞などの説を破して、心ゆくまで新奇・自由な主張を高潮してゐる。かくて、兩派の論争相つき、その結果各自の説を權威づけんとして故人に假托せる偽書の出るものが相つぐに至つた。

後嵯峨天皇の後、深草・龜山の兩皇統相ついで實祚を踐み給ふやうな事態に立ち至つたが、二條家は龜山院の統(大覺寺統)と、京極家は後深草院の統(持明院統)と相資縁し、相次いで歌集撰進の命をうけたが、兩派の争ひはかの延慶兩卿訴陳狀を見て、これを知ることが出来よう。こは花園天皇の延慶年間(一九六八—一九七〇)に勅撰の企があつて、爲兼これが撰者たらんとするに當り、爲世陳狀を上つて、そのあるべからざる所以を訴へたに對し、爲兼の駁詠となり、更に爲世が再度陳訴した際の陳狀である。今三家鼎立以後鎌倉時代末に至る兩皇統の勅撰集及び撰者等の關係を示表してみよう。



兩皇統を背景とした二條・京極兩家の争は元弘二年(一九)に爲兼歿して嗣なく、その風を慕ひ給うた花園院も崩じ給うた(正平三年(二二) 後はまた箕裘をつぐ者もなく、二條家はその遺緒をうけた大覺寺統の天子が南遷し給うた後も、なほ京洛の地にあつて持明院統に仕へて、歌壇の正統を誇つてゐたが、直系にその人なく、門下から出た頼阿がその衣鉢をつぐに至つた。

### 五、鎌倉時代の歌

歌壇に師範家の興起したこと、及びその隆替については前節にこれを述べた。本節では本期に結集せられた諸集及び注目すべき歌人について述べよう。

まづ最初に勅撰集の状態を見よう。爲氏以後、當期の末までに撰進せられたものは次の五集である。

(書名)	(勅、院宣)	(撰者)	(撰進の年)
續拾遺集	龜山院	藤原爲氏	後宇多・弘安二年(三九)
新後撰集	後宇多院	藤原爲世	後二條・嘉元元年(六三)
玉葉集	伏見院	藤原爲兼	花園・正和二年(七三)
續千載集	後宇多院	藤原爲世	後醍醐・元應二年(八〇)
續後拾遺集	後醍醐天皇	藤原爲定	後醍醐・正中二年(八五)

即ち文永二年の續古今集撰進から年を閲すること、六十。その間に五勅撰集が成つたのである。平均十四年に一集

のわりになる。盛なりといふべきである。しかしその内容に至つては著しく貧弱といはざるを得ない。その多くが二條家の手に成るものなるからに、概していへば平板にして興趣轉た索然たるものがある。中について異色あるものは玉葉和歌集である。

玉葉和歌集二十卷、伏見院の仰を承つて京極爲兼これを撰進したこと前表の通りである。實に京極家の撰んだ勅撰集の唯一のものである。(京極家系のものとしては、次期に入つて花園院御撰の風雅和歌集がある) 歌數二千七百首に餘り、歴代の勅撰集中最多數の歌を集めてゐる。二條家が「家の三代集」を金科玉條としてゐた時、爲兼は「古今にも、假名・眞名序ともに、歌やうく降れることをいへり」として、定家が「鎌倉右府將軍に歌の道を授け申すにも、寛平以住の歌にたちならはむとよむべき由を申し」たとして、そこに目標を置いてゐたが故に、その撰集に當つても、近體に追隨することなく、二條家の人達をも必ずしも嫌はなかつたとはいへ、獨自の標準を立てゝゐるところにその識見が窺はれて、全卷を通じて一道の生氣を感得することが出来る。

玉葉集の歌人としては撰者爲兼を外にして、伏見院の中宮であつた永福門院(西園寺實兼の女、御名璋子、興國三年(1100)崩) や、爲兼の妹なる藤原爲子(はじめ後醍醐の中宮大宮院に仕へ、後に伏見院に仕へ奉つて、從二位に叙せられた) などが聞えてゐる。今その作各數首を擧げて作風の一斑を示さう。

しづみはつる入日のきはにあらはれぬかすめる山のはのおくの月

枝にもるあさひのかけのすくなきにすゞしき深き竹のおくかな

さゆる夜のしぐれの後の夕山にうす雪ふりて空ぞはれゆく

以上爲兼

秋かぜは軒ばの松をしぼる夜に月はくもむをのどかにぞゆく

いりあひのこゑする山のかげくれて花の雲まに月いでにけり

あめの脚よこさまになる夕風にみの吹かせゆく野への旅人

おもひつくす心よゆきて夢に見ゆなそをだに人のいとひもぞする 以上爲子

玉葉集の成るや、二條家の人々は、喜撰以下寂蓮に至る十人の連署に托して、歌苑連署事書を記して、彼等の立脚地から見、巻頭の歌をはじめとして集中の歌三十七首を抽出して、縦横にその下品の歌なるよしを論じて、所謂今やうすがたを難じたといふ。しかしその多くは彼等の偏見に出でゝ取るべきふしもないやうである。

要するに、當時にあつて沈滞せる上流の空氣に育まれた歌壇の大勢が萎靡の極にあつたことは、蓋し當然といはなければなるまい。かく萎靡沈滞せる歌人の群にあつて、とにもかくにも一味清新の氣を轉じただけでも、よし二條家からは異端と譏られたとしても、京極家の歌人達の努力は認められて然るべきである。たゞそれがあへなくも後繼を得ず終つたことは、かへすく惜まれることである。

次に、この時代に私撰せられた歌集には萬代和歌集二十卷と、夫木和歌抄三十六卷とがある。前者は後深草天皇の寶治二年(1191)の夏頃に撰定し、同年暮秋に添削したもの、由奥書に見えるが、その撰者を詳にしない。(丹波叢書戊申秋に收む) 後者はその跋文によつて藤原長清の撰なることを知るとはいへ、その撰集の年月は不明である。但し伏見天皇の朝若くは之を去る遠からぬ頃の撰であらうといふ。この二集は共に私撰であるが故に、諸體の歌を博く採録して、勅撰集以外の別乾坤を提示するところ、興趣轉た儂かなものがある。

その他風葉和歌集二十卷亦注意すべき撰集である。文永八年(一九)に出来たよしは序に見えるが、撰者が誰れであるかは不明である。萬代・夫木等の集と趣を異にするところは、本集は古物語中の歌を勅撰集に倣うて類別したにある。故に現今既に散逸してしまつた古物語も本集に載せられてゐる歌によつてその一斑の知られるものなどもあつて、古文學研究の上に有益な資料である。

歌の流行と共に本期に於いて據頭し來つた連歌については後節に譲り、以下少しく散文の文學を見よう。

## 六、軍記文學の勃興

鎌倉時代は既に述べたように文學の沈衰した時代ではあつたが、中古の末にまき起された社會的動亂は、當代人士の心に悲劇的興味を感じしめること深きに至り、遂に之を題材とした文學を産むに至つた。所謂軍記と稱せられる一群の作品がそれである。軍記は、即ち彼等の眼前に展開した一世相に取材した點に於て、正に中古の榮華・大鏡等の系統をひくと見ていゝ。たゞ彼が思ふだに倦意を感じしめる宮廷生活を中心にして、太平の日に於ける貴族生活に取材したとは異なつて。これの描く世界は動き動いて瞬時も止む時のない動亂の國であり、中心として活躍する人物は、かの時代にあつてはものゝ數とも考へられなかつた所謂武士である。その全篇を貫く空氣が中古の歴史物語と全然異なるものゝあることは想像するに難くない。しかし四百年昇平の情力は一朝一夕にして抜くべくもなく、藤原氏に代つた平氏は、覆つた前車の轍を踏みて衰亡の道を辿つた。中古風の戀愛譚が殺伐な軍記の中におり込まれて一道の情味を漂はしてゐるのはその故である。要するに軍記は中古の榮華・大鏡の系から出た作物と見て可なるべく、そ

の全く異なりと見えるのは、時代が推移し、その素材が變化したがために外ならぬのである。

なほ軍記文學の源流をなすものとして、かの中古時代にもせられた將門記・純友追討記・陸奥話記等が戰亂の顛末を記した記録體の作品を數へることが出来る。これらは共に文學的價值はさまざまなき作品であるが、これが、かの歴史物語と合流して文學的色彩を多分に加へられた時、こゝに當代の軍記が発生する。

保元物語と平治物語とは、普通に軍記物語の權輿と考へられてゐる。いかにもその文學的修飾の粗野な點などから見て、しかるべく思はれるけれど、必ずしも平家物語等との前後は爾く輕々に斷ぜられない。前者が保元の亂を、後者が平治の亂を、それゝその素材とせることは、その書の標題を見て知ることが出来る。この兩者は形式・内容兩方面から見て、種々の類似點は、その同一作家の手に成つた二部作なることを思はせる。然らば作者は誰れか。或は葉室時長といへど信ぜられず、中原師梁(嘉暦元年(一九)歿といふ)の鈔する所といふも、必ずしも原作者たるをいふのではない。たゞ書中山門を稱揚せる語句あることから、わづかに叡山關係の人の筆なることが想像せられるのみである。

將門記等に源流して今昔物語集にほゞ大成を見た新體の文章は本書等に於て著しく洗鍊を加へられて新時代の文學たるの面目を備へ、七五の諧調をなせるところも少からず、殊に用語の點では頗る自在を加へ、その驅使せられる漢語・佛語等は國語の中に混入せられていみじき調和を保つてゐて、この種の文學中簡素にして道勁なる、頗る見るに足るものがあつて、軍記文學の佳作を以て稱される。

これについて説くべきは平家物語と源平盛衰記とである。ともに筆を平家勃興に起して、その覆滅に及び、建禮門院と六代御前との末路に至つて筆を收めてゐる。盛衰記は四十八卷、平家は普通十二卷又は十三卷に分つ。かくその

内容に精練の差が著しくあるとはいへ、もとの兩書は別箇の著作ではなくて、一の源泉から流れ出た二つの存在に過ぎない。そのいづれが先であるか後であるについては、これを決定することは至難のわざであるが、現存の書についていへば、盛衰記は到底平家に先立つものとは認め難く、平家の諸種の異本及びその時代の記録等を集めて増補大成したものと考へられる。

今平家物語にとつてこれを見る。恐らく現存の古典中平家物語ぐらゐ異本に富むものはあるまい。山田孝雄氏の研究によれば七十七種の異本があり、それ以外なほ発見せられるものもあつて、驚くべき數に上る。而して異本發生の原因は、この書が單に讀みものとして傳はつたのみでなく、琵琶に伴ふ語りものとして發達して來たによる。原平家物語が如何なものであつたかは知ることが出来ないが、當初は三卷ぐらゐなものであつたが、漸次増補せられて六卷となり、十二卷となり、果ては長門本(山口縣赤間宮に傳つた古寫本)と稱せられる二十卷本や、源平盛衰記の如き四十八卷本などが生れて來たのではないか。そはとにかく現存の平家物語は琵琶の二流に伴うて明らかに二種に歸納せられる。即ち最後に別に灌頂卷を立てる一方流の語り本と、然らざる八坂流の語り本とである。さて平家物語が原作せられたのはいつか。卷五物怪の事の條なる中納言雅頼卿家の青侍の夢に八幡大菩薩が「平家のあづかり奉る節刀をばめしかへして、伊豆國の流人さきの右兵衛のすけ頼朝に賜はするなり」と仰せられた時、その側にゐられた春日大明神が「その後はわが孫にもたび候へ」とぞ仰せられたとあるを證として藤氏將軍の世になつてからの作だといふ説もあつたが、古き寫本に春日大明神のこの見えない本もある。徒然草に

後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古のほまれありけるが、……この行長入道平家物語を作りて生佛いひける旨

目に教へて語らせけり。

とあるのが、本書の作者及び年代の見える文献の最古のものであつて、信じてよからう。とすれば鎌倉の初期、承久以前に既に本書の形態は備つてゐたと見なければならぬ。

平家の作者に擬せられる行長とはどうした人か。彼は月輪關白兼實の家司で、かなり詩才のあつた人である。通世後慈鎮和尚に扶持せられたと徒然草にあるのも、慈鎮和尚が兼實の弟であることを思へば點頭される。その外葉室時長(保元・平治の作者にも擬せられること前述のとほり)や菅原爲長・源光行・その他なほ多くの人々が本書の作者に擬せられるが、これはたゞ平家が唯一人の手によつて作られたのではないことを語つてゐるので、そのいづれもが平家物語を今日の形にはぐむに與つた人達なのであらう。

内容から平家を見ると、前後二部に分たれる。即ち前年は平家の盛時を現し、後半はその歿落を描いてゐる。前半の中心人物はいふまでもなく清盛である。その歿後は、さしにも華やかだつた一門の榮耀も一場の夢と消えて、都門は源氏の武者達の馬蹄に蹂躪せられた。前年の華やかさに對して、いかに後半の哀愁に満ちてゐることか。しかも作者が後半で最も力をこめて寫さうと試みた人物は義仲と義經とであつた。全篇を通じて、戦亂の巻を背景とした悲壯な叙事詩が展開する。そしてその間に幾多の抒情詩的要素が點綴せられる。かくて祇園精舎にはじまつて、女院御往生に終る、全卷を通ずる本書の基調は強い無常觀である。清盛時代の平家にも既に凋落の蔭はさしてゐた。流離時代の平家、滅亡期の平家、そして寂滅の彼岸にのみ榮光はかゞやいてゐる。首尾を通じて一貫せる人生觀は本書の有する大きな力である。

## 七、説話文學

一一八

承久の亂後、京都は政權に全く離れて、意氣銷沈昔日の榮華も空しく一場の夢と消えてしまつた。鎌倉は政令の中心として、日にましての繁榮を加へてゆけど、そこに住せる武士にはまだ文學的修養は求め難い。文運は依然京師にとどまつてゐるが、退嬰的な彼等に偉大な制作を求めるのは木に縁つて魚を求めめるが如く、不可能といはざるを得ない。歌が不振の淵に沈淪したことを思へ。彼等は徒に往時の花の香をなつかしむか、でなければ轉變なき現世の悲哀に泣く。宗教界が俄然活氣を呈して人心を把握するに至つたことは、決して偶然でない。

この時代の説話文學は雄大の創作をもつる氣力のない者が、過去をなつかしむ心から生れる。我國の説話文學が佛教と密接な關係を有してゐることは既に述べた。ここに當代のそれは著しく佛教的色彩を有してゐる。宇治拾遺・十訓抄・古今著聞集・さては寶物集・撰集抄・沙石集等、この範疇に攝して然るべき作品である。

宇治拾遺物語十五卷は作者を知らない。古の今昔物語集の流をひいて説話的二百條を収録してゐる。しかし今昔物語集のような類纂的なものでなく、筆のゆくまゝに録していつたものゝやうに見える。今昔が平安朝に出て、その文體に於て近古の魁をしたに對し、本書は鎌倉期に出て、しかも中古の遺響を帯びてゐるところ、頗る拘すべき雅味に富んでゐる。本書の成立については、その序によれば、宇治大納言が洛南宇治の南泉房に籠つて、旅人の物語を簾を隔てて聞きつゝ、これを筆記して十五卷の冊子を編んだが、それが子孫の家に傳つてゐたのに、後人の書き入れで物語の數も著しく増した、その頃に、隆國の冊子に漏れた説話を輯め、又彼以後のことなどを書き集めた書が出来てこ

れに宇治拾遺物語といふ名を負せたといふのである。この序の信じ難いことは先哲既に論があり、現に本書の説話で今昔と重複するもの八十五話の多きに達して、全篇の十が四を超えてゐるに徴して、本書が決して今昔物語集の補遺的編纂でなく、彼れに粉本を得て、新に編纂せられたものであることは明らかである。而して本書編纂に當つて著者は今昔その他幾多の成書を涉獵し、又口碑・街談を廣く集めてゐることはいふまでもない。

本書の制作年代は、本書の記載に證左を得て、或は建保四年(前徳天皇の御代、一八七六)といひ、又壽永・文治(壽永は安徳天皇の御代、その元年は一八四二、文治は後鳥羽天皇の御代、その元年は一八四五)の交だらうともいひ、又壽永頃から四條天皇の仁治三年(一一九二)以後までの六十餘年間に漸次後人の増補を経て成つたものだらうともいつて、容易に決し難い。要するに制作年代は鎌倉初期のものなるを知るの外、他に確然たることを把握するを得ない。

十訓抄はその序によれば建長四年(一一九二)の冬に、「草の庵を東山の麓にしめて、蓮の臺を西土の雲に望む翁」の筆に成つたもので、凡そ世人は「賢なるは得多く、愚なるは失多」きを思ふが故に、「昔今の物語のたねとして、よろづの言の葉の中より、聊其二の跡を取て、よき方をば是をすゝめ、あしきすぢをば是を誡めつゝ、いまだ此道を學びしらざらん少年のたぐひをして、心つくる便となさしめむ」とて、作られたもので、全篇を分つて左の十門とし、

第一、可定心操振舞事 第二、可離憍慢事 第三、不可悔人倫事 第四、可誠人上多言事 第五、可撰朋友事  
第六、可存忠信廉直旨事 第七、可專思慮事 第八、可堪忍諸事 第九、可停懸望事 第十、可庶幾才能藝業事  
以上の各門のはじめに序分を載せてゐる點は、隨分堂々たるものだが、その内容は標目にふさはしくないものもある。かく十門に分けたのは十善業道經の影響をうけたのだといふ説もあるが、かにかくに佛教で十條を以て規矩とす

るものゝ多いことに影響せられてゐることは確かだらう。

本書の作者は或は橘成季といひ、菅原爲長といひ、又六波羅二藤左衛門入道といふ。成季説は根據なく、爲長は建長四年に先立つ七年なる寛元四年に薨じてゐる。六波羅二藤左衛門入道は、その詳しい傳記は知られないが、北六波羅探題なる北條長時(實治元年(一九〇七)から康元元年(一九一六)まで)・時茂(康元元年(一九一六)から文永七年(一九三〇)まで)に仕へてゐたことは知れるが、老境に近づいて念佛に餘生を送つた人らしい。この人を作者に擬する人が多い。當れるに近いものだらう。本書亦前出の諸書に負ふところ多く、その典據の指示し得られる箇條は頗る多く、編者の博覽を思はせる。

教訓を標榜せる説話集は恐らく本書を以て嚆矢とすべきか。宇治拾遺物語にも教訓的口吻を洩してゐる説話はないでもないが、彼に於てはそれは飽くまでも従たるものである。かく教訓的作品の出るやうになつたのも、要するに時代相のあらはれで、文學が漸次情動的から意的に移つてゆくことを暗示せるものではあるまいか。しかもその例話の平安朝式趣味に終始してゐるところに時代の一面がうかがはれる。

宇治拾遺・十訓抄と類を等うして古今著聞集がある。橘成季の作るところである。成季はその傳を詳に知り難く、たゞ序に、「余喜<sub>レ</sub>芳橘之種胤、願<sub>レ</sub>瓊材之樗質。而琵琶者賢師之所傳也、儒辨<sub>レ</sub>六律六呂之調。圖書者愚性之所好也、自養<sub>レ</sub>一日一時之心」といへるによつて、その一端を知り得るのみである。本書の成つたのは十訓抄に後れること二年、建長六年(一九)で、著者の所謂「宇縣亞相巧語之遺類、江家都督清談之餘波」を標榜して、庶事を搜索して三十篇二十卷が成つたのである。その規模今昔物語集のやうに宏大ではないにしても、その分類の精細なことは、こゝに極つたといつていい。今本書の分類を示せば、

神祇、釋教、政道忠臣、公事、文學、和歌、管絃歌舞、能書、術道、孝行恩愛、好色、武勇、弓箭、馬藝、相撲、強力、畫圖、蹴鞠、博奕、偷盜、祝言、哀傷、遊覽、宿執、鬭爭、興言利口、怪異、變化、飲食、草木、魚蟲禽獸

の三十である。この分類の目を一見しても、いかに平安朝文化の餘香がなほ當代に漂うてゐるか、そしてその間に武家時代の色彩がいかに加味せられてゐるかを窺ふに足らう。

次に佛敎的色彩の殊に顯著な説話文學について説かう。即ちいづれも前代に出た往生傳・高僧傳等の系統をひき、假名文もてものせられた諸種の著作は、當代に入つてかなり成つた。或は發心して佛門に入つた物語、信仰の功德で往生をとげた物語、不信の結果冥罰をうけた物語等、或は和歌と佛敎とを關聯せしめて、その功德をとく等、この種の説話集亦見るべき作に富んでゐる。

さて寶物集はこの類では出色の作か。本朝書籍目錄によれば平康頼が本書の作者である。康頼は鹿谷の陰謀に參畫したが事破れて成經・俊寛と共に鬼界島に配流せられ居ること年餘、赦されて歸洛して洛東双林寺の山莊に籠居し、そこで「うかりしむかしをおもひやり、ほうぶつ集といふ物がたりを」作つたよし平家物語にいつてゐるが、それがやがて本書なのである。

本書の結構は、著者歸洛して嵯峨の清涼寺の釋迦佛が天竺へ歸り給ふ瑞桐のあることをきき、あさましきの餘り二月二十日寺に詣で、御堂に通夜してゐると、物の心ある人ばかり目を覺しつゝ、世間の事ども既往又來(こゝろまた)まで語りあうてゐるときに、その中のある一人が、「抑人の身に何か第一の寶にてありける」といひ出したので、實に何か第一に



てあるらんと書いてゐると、或は隠れ簀といふものこそよく實にて有るべけれ」といひ、打出の小槌よ・黄金よ・玉よといひ、或は親のためには子こそといふもあれば、壽命が第一だといふ者もあつて、どゝ「情思解くに生々の實には佛法と申す物こそいみじき寶にて侍れ」といふに歸し、こゝで若い女房の問ふにまかせて、僧が三寶・六道を説き、十二門を開示する程に、「鐘打つ後夜に行ひなど始るほどに、人々も出合ひぬれば、この僧も何地か紛れて失せ」た。その物語の中に歌を多く挿んだが、筆者も折ふし「この道に力を入れて、一卷の文を作るべき事を營む程に、寺に佛の御前の物語を記して、名を寶物集といふなるべし」と結んでゐる。(流布の七卷 本による)

本書立つるところの趣向の大鏡に倣ふたものであることは言を俟たぬ。しかしその内容に至つてはその書の性質上全く相異なる。文章は簡樸の中に捨て難き味をもつてゐる。

さて本書の傳本は數種あつて、康頼の自筆と稱せられる一卷本も傳つてゐるが首尾を闕いてゐる。但し果して康頼の筆か否かはなほ疑はしい。その他二卷本・三卷本・七卷本等がある。後人が漸次加筆して今見る如き體裁をなすに至つたものであらう。或は康頼眞作の物は疾く散逸して、後(こゝ)いつても、勿論鎌倉初期だらうがの沙門等によつて彼に假托せられたものかともいふ。

撰集抄は古來西行の撰と傳へられる。しかし序に「すぎにし方四十餘年の霜をいたゞき」といつてゐると、卷末に「于時壽永二年むつきの下の弓はりに、讚州善通寺の方丈のいほにしてし終りぬ」とあると、西行にしては年紀が合はない(西行は壽永二年には六十六歳である)ところから推しても、なほその他の點から見ても西行撰といふ説は傾かれるふしが多い。本書にも廣略二本があつて、その先後にも論があり、いづれにしても後人が西行に假托したものだらうと考へられて

ゐる。或は承久四年以後の作だらうともいはれる。

さて本書の作られた趣旨は序に明らかなやうに、作者は浮世の無常を觀じて、すゞろに心細さを感じ、「同じ夢の中の遊にも、新舊の賢き跡を撰び求めける言の葉を書集め」、「座の右におきて、一寸ちに知識に頼まう」としたのである。而して「卷は九品の淨土に思ひつゝ、十に一をもらし、事は八十隨好に思よそへて、百に二十を殘せり」といつてゐる。卷數及び説話數はこの序の文で明らかである。但し現存の流布本は共に説話數に於てこれに一致しない。後人の加除があつたが故であらう。

本書は後世の文學にかなりな影響を及ぼし、謡曲には本書に取材した「江口」・「雨月」・「松山天狗」・「實方」・「初瀬西行」等の曲を存し、その他江戸時代にも素材をこゝにかりた作を見ることが出来る。寶物集と並んで佛教説話集の双璧といふべき作である。

沙石集は無住法師の著である。無住法師は鎌倉の人、梶原景時の裔である。寛元元年(一九〇三)十八歳で剃髮し、爾來園城寺に、南都に、京師に顯密禪を兼學し、尾州木賀崎長母寺に住し、又勢州桑名蓮華寺に兼任し、花園天皇の正和元年(一九七二)八十七歳で入寂した。沙石集は弘安六年(一九四三)無住が五十八歳の時に書かれたものである。「夫施言軟語皆第一義に歸し、治生産業しかしながら實相にそむかず。然れば狂言綺語のあだなる戯を縁として佛乘の妙なる道に入れ、世間淺近の賤き事を譬として、勝義の深き理を知しめむと思ふ。是故に老の眠をさまし、徒なる手ずさみに、見し事、聞し事、思出るに隨て、難波江のよしあしをもえらばず、藻塩草手にまかせてかきあつめ侍り」ミ作者が序してゐるところを以て本書述作の旨趣を知ることが出来る。



本書十卷、神明の事、佛菩薩の事、言説の事、女人の事、學匠の事、和歌の事、説法の事、正直忠孝の事、愚癡・愛執・慳貪の事、鳥獸譚、遁世談、往生談等を収録してゐる。その材料は従來の成書に得たるあり、當時の實話を得たものがあり、殊に作者が東國の人なるからに關東方面の材料の豊富なことは他と趣を異にしてゐて、吾人の興味をひくものが多い。

本書の佛教思想は他の多くが淨土教を主とするに對し、淨土教を批判し、眞言の功德を述べ、禪は殊にその讚嘆するところで、「吾國の佛法の濫觴、文珠達磨大師の善巧より起れるにや。かゝる因縁なれば禪門尤あがむべし」といつてゐる。又道德的教訓に富んでゐることも、無住が青年僧の頃南都に律學を修したことを思へば、うなづかれるだらう。而して孔子を説くところに時代の背景を窺はせられる。又滑稽・諷刺の物語に富むことも本書の特色と見ていい。かうした内容を平談俗語を以てやり、淡々として愛すべきものがある。

無住にはまた雜談集の著がある。「此物語雖雜談、多是述懷也」といひ、又「雜談ト云ナカラ、法門多ク記レ之」と、自ら著者がいつてゐるので。内容は知れよう。嘉元三年(一九)作者八十歳の時の作である。

當時の説話文學として述ぶべきものは、なほ他に古事談・續古事談があり、佛教文學としては發心集は後段説き及ぶべく、向阿上人の三部假名抄(歸命本願抄・西要抄・父子相迎をいふ)についても述ぶべきであるが、今は割愛する。その他各高祖の遺文等亦省略に従ふ。

### 八、鴨長明と方丈記

鎌倉時代の作家として鴨長明の名は著聞してゐる。長明は賀茂御祖神社の禰宣長繼の男で、俗名を菊太夫といつた。和歌・管絃に通じてゐた、社司を望んで叶はず、爾來怏々としてゐたが、遂に出家したのだといふ。法名は蓮胤。そのいつの年であつたかは判然しないが、文治三年(一八)であつたともいふ。出家後大原に籠り、晩年日野に移つたと傳へるが、果して然りしや、疑ふ學者も少くない。建仁元年後鳥羽院の和歌所を置き給ふや、召されて寄人に補せられたが、幾ほどもなく辭し、再度の恩命に接しては、

しづみにきいまさら和歌の浦なみによせばやよらむあまのすてぶね

の一首を捧げて辭し奉つたとも傳へる。その一世に重んぜられてゐたことを見るに足らう。建曆元年(七一)十月には鎌倉に下り、將軍實朝に謁し、法華堂で念誦して、

草も木もなびきし秋の霜きえて空しき昔を拂ふ山風

と一首を堂の柱に註した由吾妻鏡に見えるその歿年及び享年は明らかでないが、或説によれば、建保四年(七六)六十四歳で歿したといへど、確でない。

長明が歌人として如何の地位を占むべきか、その聲名爾く籍甚してゐるわりに、その什も多からず、秀歌にも乏し

石川やせみの小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ

松島やしほくむあまの秋の袖月はものおもふならひのみかは

などは人口に膾炙してゐるが、西行などに比して雲泥の差あるを覺える。

長明が文學史上に著名なのは歌よりも、その方丈記あるがためである。

方丈記は十訓抄の記載、下つて東齋隨筆などの記事によつて、從來長明の著として動かないものと考へられてゐた。然るに藤岡博士は流布本方丈記と、源平盛衰記及び平家物語との間に幾多の類似點があることを指摘し、玉葉集なる「山鳥のほろ／＼と鳴くこゑきけば父かと思ふ母かと思ふ」の歌をひけること、卷末の「月影は見る山のはもつらかりきたえぬ光は見るよしもがな」の詠が新勅撰集なる源季廣の作なることなどを擧げて、「後人が諸書の一部を釘俎補綴して作りなせる偽書にして、長明の作にあらざるべしと信ず」と否定せられてから、野村八良氏は慶滋保胤の池亭記(本朝文粹卷十二)と比較することによつて、「流布本方丈記の結構並に文辭は全く池亭記の模倣なり。單に構造を則り、字句を引けるものとは大に趣を異にす。もし長明が一廉の文章家にして、又知者ならんには、拙劣なる手段を取ること此の如くならんや」とて、「長明に果して方丈記の作ありたらんには、そは今の流布本の如きものには非ざるべし。流布本方丈記は後人の偽作なるべし」との結論に達してゐられる。

然るに近時京都府船井郡高原村大福光寺から發見せられた方丈記一巻は鎌倉時代中期の書寫なること疑なきが如く、卷末の「月影は」の詠もなく、明らかに流布本本系の古寫本である。野村氏は、たゞ偽作の年代がこの本の出現によつて、長明の死後大した年代の經過してゐないことを示すに過ぎぬことを注意してなほ偽作説を擧げられない。

方丈記偽説は果して信すべきや否や。動かすべからざる確證ありと認め難い。長明について記載せられた最も古い文献なる家長日記に方丈記について何の記事もないとして、長明の時代を去る久しからざる時代に既に書寫せられた本があるからに、長明作者説も輕々に否定し難いのではなからうか。

方丈記はその末尾に「于時建曆のふたとせやよひのつごもりころ桑門の蓮胤とやまのいほりにしてこれをしるす」とある。全篇を一貫する思想は厭世觀である。「ゆく川のながれはたえずして、しかもよとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつきえかつむすびてひさしくとどまりたるためしなし」と書きおこせる冒頭の文は既にその内容のすべてを物語つてゐる。しかもその遁世は徹底的でなく、その隱栖にあつて、なほ「あとのしらなみにこの身をよするあしたには、をかのやにゆきかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もしかつらのかぜはをならすゆふべには、尋陽のえをおもひやりて源都督のをこなひをならふ。その餘興あればしば／＼松のひゞきに秋風樂をたくへ、水のをとに流泉の由をあやつ」らうとするが如き、こゝにも平安朝式詠歌の痕を見ることが出来る。その文章は和漢の文脈を折衷して、華麗の中に一道の敦厚味を失つてゐない。たゞしその文に生氣のないのは大きな缺點である。

長明の著にはなほ説話文學の範疇に屬すべき發心集がある。厭離穢土、欣求淨土の思想が、その全篇に溢れてゐる。「發心集は殊に心を用て、始に名利を捨果たる立賓僧都、増賀上人などを出し、それより難行易行さま／＼の行狀を連ねて取捨せず、其人の意業を顯はし、是を見る人もまた縁にしたがひていづれにもあれ、傲はんことをおもはるゝ成べし」と伴蒿蹊がいつてゐるので、その書の大體を知ることが出来る。

その外無名抄はその歌論を知る上に大切な書であるが、今詳説を省く。伊勢記はその完本の傳はるものなく、神宮文庫に拔書(寫本)一巻を藏してゐるといふ外、夫木和歌抄によつてその一斑を知り得るにすぎない。

## 九、日記と紀行

日記文學は中古の精粕を嘗めて新味の見るべきもの少く、紀行には海道記・東關紀行等々見るべきものなしとせざるも、亦甚しくいふに足らない。以下少しくこれらについて述べよう。

轉寢記（せいふんき）と十六夜日記（いざよひのじ）とは共に阿佛尼の作である。著者は藤原爲家の室で、安嘉門院四條又は右衛門佐の名で、續古今集以下にその作を残してゐる。轉寢記はその若年の頃の筆とおぼしく、十六夜日記に「むかし父の朝臣にさそはれて、いかになるみの浦なればなどよみしころ、とほつあふみの國までは見しかば」と書いてゐる、その折のことと考へられる。前半は失戀の殘骸を看經に慰めてゐた頃の日記の體をなし、後半は「さそふ水だにあらば」と思つてゐたその頃父に誘はれて、遠江に下つた旅の日記にもせられてゐる。かくて都から幼くからはぐんでくれた人の病重き報を得て歸れば病者も快氣し、わが心地もおちついたよしで結んでゐる。

十六夜日記は前にも述べたやうに爲家から爲相に譲つた所領を兄爲氏が横領したのを訴へるために、婦人の身を以て百里の旅程を遠しとせずして鎌倉に下つた折の日記で、その強い母性愛の發現はそゝろ人を感動せしめるものがある。阿佛はこの撃争中、判決を見ずして、鎌倉の旅舎で弘安六年に歿した。因にこの訴訟は結局爲相の有利に解決がついて、阿佛の志は酬いられた。この日記は擬古文學中の傑作と稱してゐる。

源家長日記は建仁から承元に至る、筆者が和歌所に奉仕中の日記で、當時の和歌所を中心とした数々の事情が本書を通じて知られる。作者の才筆の見るべきものがある。辨内侍日記と中務内侍日記とは女流の日記としてやゝ見るべきも、とり立てゝいふまでもなからう。

これらの中について特記すべき作品は建禮門院右京大夫集である。歌集の體をなすと雖も、寧ろ所謂日記文學とし

て見るを妥當すべきか。作者は建禮門院（高倉天皇の中宮、安徳天皇の御生母。御名徳子、平清盛の女）に奉仕せる右京大夫が、老後定家の求めによつて、わが歌を集めたもので、全二巻、一巻は平家榮華の日を追憶しつゝ、華やかなりしありし日を紙上に再現しようとして試みたものである。平家の没落は彼女にとつて最も悲しい日であつたらう。下巻はやがてそれ以後の彼女を語るものである。時には大原山深く寂光院に女院を訪ひまゐらせ、或は比叡の坂本に暫し移り住みなどして、悲しき日を送つた後、召されて宮廷に奉仕したが、變りはてた後宮のさまは如何にその心をいたましめたことか。

右京大夫は世尊寺伊行の女である。定家が撰集に歌を求めて、いつの名をとか思ふと言うたに對して、

言のはのもし世にちらばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ

といひきつたその心根のあはれさ。彼女の文も歌もこの二巻の集にとどめられて、千歳の下なほ人を感じしめるものを見る。

さて鎌倉開府以後、海道の往還はかなり頻繁になつたことは想像せられる。従つて海道の紀行がもせられる。海道記及び東關紀行はその代表的の作である。

海道記は貞應二年（八三）四月四日洛を出て、海道の宿々をすぎて十七日鎌倉に着いたが、かくてたま／＼の下向なれば遊覽の志切であつたが、故山の老母の病を思ひては歸洛の志頻りに動き、經過わづか一句にして五月某日東國を立つまでの記のある。通篇駢儷體の和漢混淆文である。文藻豊贍にして暢達、能文の才筆である。東關紀行亦海道記と同じく海道下りの記で、仁治三年（〇二）八月都を立つて鎌倉まで十數日の道の記及び鎌倉逗留中の見聞記で、十月二十三日東國出立に擱筆してゐる。海道記に比して文品やゝ下るもののあるを覺える。

この兩書の作者については古來説があつて、或は兩書共に鴨長明に附會するものもあれど、長明が關東下向は貞應二年でも仁治三年でもなく、(前節)或説によればこの年は既にその歿後に當る。扶桑拾葉集(徳川光圀編、元祿二年)に前者を源光行、後者をその子親行の作と定めた。光行ははじめ元暦元年(四一八)光季の命乞ひの爲め下向したことがあるが、その後承久に院方に味方した廉を以てその三年(八一八)關東に召されたが、その前より關東にあつた親行に申宥められ、爾後鎌倉に在つて有職家として重んぜられてゐた。親行は貞應三年一應上洛したが再び鎌倉に下つて幕府に仕へ、建長の末年までは生存してゐた。

さて光行の關東下向は元暦・承久の兩度あつて、いづれも海道記の貞應二年以前のことである。一方夫木抄によれば光行の路次記の歌を載せてゐるを見れば、光行に紀行のあつたことは知られるが、その歌は海道記中のものでなくて、却て東關紀行中のものである。然して東關紀行の仁治の頃は光行存命ならば八十の高齡である筈である。かく考へると光行も親行もこの兩書の作者でなく、海道記は無名の隱士の筆に成つたものなるべく、東關紀行は光行の路次記を本として、好事の後人が潤色したものであらうか。

因に光行と親行とについて一言しよう。光行は源氏物語の校勘者として名高く、その校本は河内本と稱せられて、定家校合の青表紙本と共に、源氏校本の双壁といはれる。なほ彼は家々の口傳を抄して水原抄を作つた如き、源氏研究史上特筆せらるべき人である。なほその蒙求和歌(元久元年一)は翻譯文學として注目し、親行も萬葉古今集の校勘を以て聞えた人であるが、又行阿假名遣の名に於てその名は國語學史上に忘れられないだらう。

## 一〇、鎌倉時代の小説

この時代の小説——物語は、平安朝の後塵を拜するにまゝつて些の見るべき作をもとめぬ。風葉和歌集によればこの時代に書かれたと見るべき作品の名は多く傳つてゐるけれども、その作の残つてゐるものは甚だ少ない。今現存せる當代の作についてその大概を窺はう。

源氏物語(繪合)の卷に「次に伊勢の物語に正三位をあはせて」といへる正三位はとくに減びて、今日その名を負うて傳つてゐるものは鎌倉時代に入つての假托であつて、石清水物語のことである。關白の弟なる左大臣の宰相君に生まれ、た女兒が宰相君の姉婿なる常陸守に養はれたが、常陸守の死後養母と共に上洛して、洛南木幡に住んでゐた。左大臣の子なる秋の中將のかいまみから、姫君は父左大臣にあふことになる。故常陸守の遺兒に伊豫守といふがあつて、この姫君に懸想してゐたが、或日つひにはかなき契を結んだ。時に左大臣は姫君の入内をいそいでゐたのであつたが、八幡の託宣で、之をさめて、老いた中務宮の妻としたが、後つひに入内することゝなつた。まもなく宮は薨じ、伊豫守は高雄に上つて出家した。——かうしたのがこの物語のあら筋である。

東國武士が主要人物として物語の舞臺に上つたこと、戦亂のことが、よし大省筆せられてゐるとはいへ、物語の筋にからんで来たことなど、さすがに鎌倉時代の作たることを思はせる。而して文章は精彩に乏しく、さして見るべき作ではない。「三月づゝ京にのぼりて大番と云事を勤むる事云々」の語あるを證とし、本書の歌が風葉集に見えるところから推して寶治元年(〇七)乃至文永八年(三九)の作とせられてゐる。

「物語はすみよし・うつば」と清女がいつた、その住吉を名に負ふ物語がある。現存の住吉物語は枕草子や源氏物語などにいふところのものでなく、古き物語は鎌倉時代の初頭に既に湮滅し了り、僅に残存せる断翰により、口傳に語り傳へるところの梗概に則つて新に制作せられたものであらう。そして風葉集に引くところの六首がほゞ現存本中に求め得られるところから推して、文永八年には既に新しき住吉物語が存在してゐたものと考へられる。

中納言で左衛門督をかけた人に二人の姫君があつたが、なほ今一人の妻にも、姫君があつた。その姫君は幼い時に母に死別して中納言家に引取られてゐたが、繼母はこれを虐遇してゐた。時に右大臣の子の少將これを慕うたが、繼母ははかつて、わが女と婚せしめたが、少將は後に知つてなほ姫君を忘れることが出来なかつた。かうしてゐる中に姫君は都にありわびて母の乳母の尼になつて住吉にあるがり身をよせたが、少將は長谷に詣で、夢にこれを知り、住吉に姫君を訪ひ、遂に都に伴うた。かくて姫君は少將(やがて中將をへて大將になつた)の寵を得て、子女を生み、數年の後父君(當時大納言に)にも對面した。往年の少將は累進して關白となり、繼母は零落して死んだ。かうしたのがこの物語の略筋で、一讀して前代の物語——殊に落窪物語を模倣した迹の歴然たることが知られる。

この書には異本が多く、諸本の間の異同もかなり甚しいものがあるが、とにかくその結尾に

むかしも今も人にはら黒なる人はかゝることなり。これを見かむ人々はかまひて人々よかりぬべきなりとぞ。

といつて勸善懲惡の意を明示せるは、なほ時代のこゝにも反映せるものといつて然るべきであらう。

その外當代の作と認められるものに昔の衣・松浦宮物語・山路の露・風につれなき物語等がある。

昔の衣は源氏物語を模倣せる作で、父子三代に亘る戀愛物語であるといふ。刊本はない。藤岡氏は建長頃の作だら

うといひ、傑作を以て許すべきではないが、大體よりいへば「落葉たる鎌倉時代の小説界にありては、なほその白眉たらむか」といつてゐる。

松浦宮物語は奥に「貞觀三年四月十八日、染殿の院のにしたいにて書きをはりぬ」とあるが、もとよりしかく上代のものでない。「風葉のうたはみな本書にあへど、色葉には名目見えねば、さのみ古からぬ事掲焉なるものなり」と黒川春村はいつてゐる。宇津保・濱松中納言等を粉本としてゐるらしいが、生硬の作である。たゞ後の時代に現はれるべき本地物の趣が現はれてゐることは注意すべきである。

山路の露は源氏物語の最後の卷なる夢の浮橋の後をついで、後の人が補作したものである。世尊寺伊行(行成卿の川院右京大夫の父、源氏奥入の作者)の作と稱せられるが、或は風葉集以後の作でないかともいはれる。

風につれなき物語は丹鶴叢書(丁未)に收め、又續々群書類從(歌文部)にも收めてあるが、現存せるはたゞ一卷だけで、缺本である。

以上は從來鎌倉時代の作と認められてゐる諸作だが、その外時代の判然しないもので、或は當代の作に係るものがないと断言することは出来ぬ。例へ一に異本堤中納言物語と傳へられる小夜衣なども從來室町時代のものといはれてゐたが、近時の研究では鎌倉時代の作にあらずやと考へられるやうになつた。

要するに當代の物語は前代をうけて、その糟粕を嘗めるにとゞまり、思想の上はもとより形式の方面にも著しき沈滞の氣を感じざるを得ない。

## 一一、宴 曲

鎌倉時代の謠ひもの——特にその遊宴歌謠の系統をひいて當代に行はれたものに宴曲がある。

「宴曲の名目は遊宴に供へるための歌曲の意味であらう。郭曲・早歌なども呼ばれる。起源は明らかではないが、鎌倉幕府の中頃から末期にかけて摺紳家・武家・僧家の一部に行はれてゐたものだらうといふ。

宴曲の今日に傳はるもの百七十二篇。輯めて真曲抄(水仁四年一九五六)・宴曲集・宴曲抄・究百集(以上正安三年一九六一)・拾葉集(嘉元六年一九四七)・別紙追加曲(同上)・玉林苑(文保三年一九七九)及び外物(未詳)の九部としてゐる。そしてその多くは實に沙彌明空によつて集められたのである。

明空はたゞに宴曲を集成したのみでなく、彼自身亦その大部分の作者であり、作曲者であつたらしい。その傳記については知るところかない。大原の聲明道の人々と親交のあつた天台宗の僧であらうと思ふと高野博士はいつてゐる。拾葉抄等の調曲者に月江と見えるのも明空の省畫に因れる一名だらうといはれてゐる。なほ月江は明空の門人だらうともいはれる。明空・月江の外その作歌・作曲者については撰要目錄卷に載するところの曲目の下に細記せるによつてほゞ之れを窺ふことが出来るが、洞院大相國家(守公)・花山院右幕下家(家教)・洞院左幕下家(泰實)等の堂上家や、漸空上人・法印忠覺等の浮屠氏がその多きを占めてゐる。

さて宴曲は漢土の故事、四季の風物、年中の行事、祝賀・戀愛はいふに及ばず、その取材の範圍所る廣汎に亘つて殊に三島詣・江島景・諏方効驗・鹿島靈驗・鶴岡靈威等、東國的題材の採られたことは前代文學には殆ど見られな

つたところで、注意すべきことであらう。又新興宗教の勢力に影響せられて佛敎的題材にも富み、倫常の破壊せられた世相を戒告して儒敎的題目も諷詠せられたが、そのいづれにも深い強い信念を缺いて、たゞ術學的臭氣の甚しきを感ずるにすぎない。かくて「術學に急で、諷諭も敎導も切實でない宴曲は、一向當時の世相を反映してゐない。殊に下層民の風俗心情を告げるものは絶無で、近代味は更に求め難い」高野博士がいはれるやうに、宴曲は「その時世には随分かけはなれてゐた歌謠」といはねばならぬ。

次に宴曲の詞章についてこれを見よう。「宴曲の文句の構造は或人の言の如く、題によりて、故事成句を綴り合せ、絶えむとして又つゞき、首尾統一なく」と吉田東伍博士もいつてゐられるやうに、(國書刊行會本宴曲十七帖の卷頭宴曲概考参照)その章句を個々に見てもゆけば美しいが、全篇として見る時はそこに貫通せる意義を捕捉することも難いものが頗る多い。

蕭颯たる涼風(ヤサシク)。一時の秋を告とかや。桃花雨に潤ふ。桐葉風涼し。林を繡紅葉。綠苔を掃もてなしも。皆秋の興を増て。色々にみゆる百種千種の花。下ひも早解染(初)いと秋に。亂て結ぶ白露。薄霧の立旅衣(オビ)の。袖かともがふ初尾花。分行末もはるんと。ほのかにきけば妻籠に。男鹿鳴野の眞葛原。未枯ぬれば蟲のねも。絶よはる夕暮。よしさらば今夜はここに宿(ヤ)どらん。男山花にあだ名は立ぬとも。我脱懸(ワガ)む蘭(ラン)。なまめき立る女郎花。げにそもえならぬ色なれば、あたりのゆかりまでも。心(ココロ)をかるる夕露の。手枕さむきかりがねの床。第一に心を病(ヤ)しむる。何の所にすぐれたる。月のあきらかなる前。此夜はじめて長ければ。かうくたる星の。あけなんとする曉。壁(ツツミ)に背る灯の。幽(カサカ)にのこる窓の中。(宴曲集卷第一——秋興)

などは優れた作品だといはれるが、いかにそれが「緩れの錦」的章句であるか。朗詠と古歌を補綴して、しかもそ

の手際は甚だ香ばしからざるものがある。これらに比して

行々たる露の驛に。思を千里の雲に馳。吵々たる風の泊に。心を幾夜の波に碎む。霞隔。霧を凌ぎ。立別れば旅の空。雲居の外にや成ぬらん。馳來し都をかへりみて。會坂越て打出の。濱より遠を見渡ば。鹽ならぬ海に歌る。石山詣の昔まで。其面影の心地して。山田にかゝる湖の波。矢橋を急ぐ渡守。(宴曲集卷第四—海道上)とつゞけてゐるやうな道行の類は著しく發達したのを見る。

要するに宴曲は前代に行はれた雜藝から、次代に現れいづべき謠曲へうつる中間をつなぐ謠ひものと見てよいだらう。その章句の古歌。朗詠等を補綴して成るところ、又古物語——伊勢・源氏等に取材してゐるものゝかなりあること、さては神佛の靈驗を語るものゝあることなど、皆やがて現れるであらう謠曲を思はせる。

その他當代の謠ひものに延年があるが、これは文學としてよりはその演技の方面に於て後の能及び歌舞伎等に影響するところが多かつたらしい。その他佛教の興隆に伴ふて、佛會歌謠としての和讃の作もこの期には盛であつたが、今はこれが叙述を省く。

### 一二、南北朝以後の歌壇

文學が萎靡不振を極めた鎌倉時代にひきつゞいて來た南北朝時代は、恰もかの新古今集の時代のやうに、各方面にやゝ活氣をおびて來た時代であつた。今當時の歌壇を瞥見しようとするに當つてまづ勅撰集の状態から見よう。

風雅集 (書名) (勅、院宣) (撰進の年) 花園院 後村上・正平元年(二〇)光明・貞和二年

新千載集 後光嚴天皇 藤原爲定 同 正平十四年(二〇)後光嚴・延元四年

新拾遺集 同 藤原爲明、阿 同 正平十九年(二〇)同・貞治三年

新後拾遺集 後圓融院 藤原爲遠 後龜山・弘和三年(二〇)後小松・永徳三年

新續古今集 後花園天皇 飛鳥井雅世 後花園・永享十年(九八)

かく兵馬控徳の間にも歌集勅撰の業は前代を承けて盛に行はれたが、花園院が前述の如く京極家の歌風を承け給ひ、雅世が飛鳥井の流から出て勅を奉じたを除いて、他の三集は悉く二條家の手によつて撰ばれたのである。以てその歌風の如何なるものであつたかは想像するに難くはあるまい。新續古今和歌集の撰進を以て和歌勅撰の業は永く跡を絶つに至つた。願れば延喜の世に古今和歌集が勅撰せられてからこゝに至つて約五百五十年、二十一の撰集を残してゐる。數からいへば盛んなものであつた。しかもその多くは様に依つて畫かれた胡蘆の類。二三傑出した集の残されたのがまだしものである。

二條・京極兩家の確執は既に述べたところである。しかも二條家は爲世歿して後また道に堪能の士の出づる者がなく、家學は將に地を拂うて空しからむとした時に出了のが僧頼阿であつた。京極家は爲兼の歿後嗣なくして自ら滅んでしまつたことは前にいつた。大覺寺統の天子崇徳後の京師で、頼阿は彼と親交のあつた二條良基に縁つて持明院系の天子に仕へ、こゝに地を拂はうとした師家の歌風を再興した。

頼阿(文中元年(二〇)俗名を二階堂貞宗といひ、年二十四の時に出家して叡山にのぼつて佛學を修めたが、後淨土の教義に歸依した。二條爲世に師事してその高足であつた。その五十歳の時、師爲世の物故にあひ、詠歌を思ひ絶たう



としたが、勅説によつてその志を翻したといふ。新拾遺集はその師爲世の孫爲明が勅命を奉じてその業半ばにして爲明は歿したので、更に頼阿に撰進すべき勅が下つたので、乃ち戀の部と雜の部とを撰んで奉つたものである。實に正平十九年(北朝の貞治三年)のことで、彼が年七十六歳の折のことであつた。その著作の主なもの、歌集に草庵和歌集があり、歌論に井蛙抄・愚問賢註がある。二條家の風格を株守して、その外に出でざらんことに力めた彼が歌の平俗に流れたのは致し方もない。たゞその暢達の趣は認めてよからう。後の歌人達が稀代の歌僧なるかに尊崇してゐたのはあまりにその價値を過大視したものである。

霞たつ空にはそれと見えわかで聲のみあがる夕ひばりかな

百舌のなく尾花が末の夕日かけのこるもさびし秋のやまざと

などはその佳調とも見るべく、

月やどる澤田のおもにふす鳴のこほりより立つあけがたのそら

は人口に膾炙して、澤田の頼阿と世間からよばれるに至つた。

頼阿と雁行して、彼と共に當時和歌の四天王と稱せられた人々に兼好・淨辨・慶雲等がある。それ／＼

手枕の野邊の草葉の霜がれに身はならはしの風のさむけさ

兼好

みなぎ江の氷にたてる芦の葉に夕しもさやぎうら風ぞ吹く

淨辨

いはむすぶ山の裾野の夕雲雀あがるもおつる聲かどぞきく

慶雲

の詠によつて、手枕の兼好、芦の葉の淨辨、裾野の慶雲とよばれてゐた。しかし彼等の歌はいづれも頼阿の亞流にす

ぎずして、特にいふべきものもない。たゞ兼好については後に説き及ぶところがあらう。なほ頼阿と協力して二條家の復興に努力した二條良基は寧ろ連歌の方面で傳へられるべき人であらう。

かつて大覺寺統に資縁してゐた二條家は、その蒙塵以來持明院統に仕へて新千載集以下の勅撰の事に與つたが、その集中大覺寺統に屬する君臣の詠は殆どこれを探ることをしなかつた。こゝに於いてかこれに憚らせ給はず、宗良親王は起つて新葉和歌集を撰ばせ給うた。「かみ元弘のはじめより、しも弘和のいまにいたるまで、世は三つぎ、としはいそとせのあひだ、かりの宮にしたがひつかうまつりて、をりにふれ時につけつゝいひあらはせることの葉どもを、玉のうてな・金のとのより、かはらのまど・なはのとほそのうちにいたるまで、人をもちてことをすてず、えらびさだむるところ、千うた四もうちあまり、はたまき、名づけて新葉和歌集といへり」と序に宣へるによつて、その撰歌の範圍を知ることが出来る。後龜山天皇叡感のあまり勅撰に擬せられる旨の論旨を下された。「これによりてところ／＼あらためなほして、」奏覽せられたのは弘和元年(二〇)十二月三日であつた。

新葉集の作家は皆戀刺不遇の間に世を送つてゐた吉野朝の人々であつたが故に、その歌も實際の境遇に立脚して詠んだ歌が多く、國家の亂離を憂へ、一身の不遇を愁へるなど、その眞情の惻々として人を動かすものが多い。

きゝわびぬは月長月ながき夜の月のよさむに衣うつこゑ

都だに淋しかりしを雲はれぬよしのゝおくのさみだれの空

以上後醍醐天皇

思ふことなくぞ見ましほの／＼と有明の月のしがの浦なみ

思ひかねいりにし山をたちいでゝ迷ふうき世もたゞ君がため

以上藤原師賢

さびしさもつひのすみかと思ふには心ぞとまるみねの松かぜ

新待賢門院

しかも二條家の流弊をうけて平板無味な歌の頗る多いことも亦否定することは出来ない。なほ本集の詞書の中には歴史の資料として参考すべきものが多い。

新葉集の歌人として注意すべきは撰者宗良親王である。親王は後醍醐天皇の皇子で、御母は藤原爲子、二條爲世の女である。はじめ剃髪して尊澄法親王といひ、天台座主ともなり給うたが、後還俗して宗良と稱し給ひ、遠江國井伊の城に居給うたが、城陥つて後は、信濃・越後・甲斐・駿河等の各地に轉戦し、後河内國山田にかくれて、干戈を捨てさせ給うた。薨去はいつのほどのことか分らないが、新葉集は御年七十歳の時の御撰だといふ。

思ひきや手もふれざりしあづさ弓おきふしわが身なれむものとは

君がため世のためなにかをしからむすてゝかひある命なりせば

の御詠に親王の御風格は偲び奉ることが出来よう。李花集はその御集である。

親王の新葉集の御撰を輔け奉つた藤原長親亦當時の作家として注目すべく、師賢の孫、家賢の子、父子三代相ついで作家として著聞してゐる。後村上・長慶・後龜山の朝に仕へて、權大納言・文章博士・右大將を経て、従一位右大臣に至つたが、南北合一後は致仕して洛東南禪寺畔に隱栖し、薨髪して明魏といひ、耕雲と號した。晩年には遠江横谷なる耕雲寺に籠つて、やがて薨じた。耕雲口傳は應永十五年(二〇)に成つた歌論の書であり、耕雲千首はその歌を集めてゐる。その外假名の研究に倭片假名反切義解がある。

新葉集は既にもいつたやうに、その環境に刺戟せられて多少清新味をおびたといへ、なほ要するに二條家の流風

を汲んでゐる。二條家はその正系にこそ家風を繼ぐに足る俊高の士がなかつたといへ、頼阿等が出て、その歌風は益々宣揚せられた。しかもなほその風に反抗する者が皆無であつたのではない。そして彼等は皆冷泉家の門に出た。冷泉家の祖爲相は二條家の爲氏と不和であり、二條家との對抗上京極家に近づいたことは前節既にこれを述べたところである。その歌風亦比較的自由で、二條家のそのやうな煩瑣な點はなかつたものゝやうである。爲相から爲秀に、爲秀から爲尹に傳へ、その二子爲之・持爲に至つて上下二家に分れて今日に至つてゐるのである。

爲秀の門に出た今川了俊(應永二十七年(二二)は俗名は貞世・義詮・義滿二代の將軍に仕へた武人であつたが、その青年時に夢に源經信を見て歌に志したといふ。和歌へ所不審の條々(又二言抄とも)・辨要抄(應永十)・落書露顯(應永廿)等にその識見を窺ふことが出来る。「人と生けるもの、心なく言なきは有るべからず。然れば其思ふ事を口にいはひ事かたかるべしや。たとへば、あら寒しやと思はゞ、小袖を着ばや、火にあたらばやと言ひ出だす、これ則ち歌なり」といひ、「されば歌の本體といふは、有のまゝの事を飾らず言ひ出だすを本とせり」といつてゐるのは、當時にあつては確かに卓見といはねばなるまい。一時に名聲籍甚たる頼阿も彼から見れば、「たゞ一節讀えたる姿のほかをばつや〜よみ侍らず」といふ程度に過ぎなかつた。その歌は果して所説のやうに卓越してゐるか否かは、傳はるところのものが多くないから知り得ないのは遺憾である。

了俊に學んだ東福寺の書記正徹(長祿三年(二二)はまた得易からぬ逸材であつた。「歌よみは才覺おほゆべからず。たと歌の心をよく心得て解くにあるがよきなり。よく心得てとはさとの心なり。如何にも歌をよく心得たる人は上手にたるなり」と情趣に重きを置いたのは時流を超えた見解である。正徹物語にその歌論を窺ふべく、草根集はその家集

である。草根集は十五卷、一萬餘首を収めてゐる。驚くべき多作である。しかもその壯年期から五十餘歳の頃までの歌三十餘帖二萬七千首をその草庵と共に焼失したのだといふ。作風は定家の温雅よりは、むしろ好忠・爲兼の風に近きものと稱せられる。

古き世の野守のかゞみくだけでや底にのこれる水とみゆらむ

むらさきの一もとあふち散らばをし里はみながら匂ふ山かぜ

かく異を樹てる二三家は出たといふものゝ、大勢はやはり二條家の歌風を支持してゆく。その間飛鳥井家(新古今の人たる雅親)に雅世(新編古今集の撰者。寶徳四年(一一二二)歿、六十三)・雅親(延徳二年(一一二五)歿、九十六)等が出たが二條家の傍系であつた。二條家の正統は頼阿から經賢・堯尊と父子相承けて堯孝に至り、堯孝から東常縁(明應三年(一一二五)歿、五十四)に傳へられた。常縁の祖重胤は定家の門に入り、その子胤行は爲家を岳父としてその家學を受けた人で、代々歌を嗜んだが、彼に至つて、大に著聞するに至つた。東野州問書・同消息等にその歌論を知り、常縁集にその詠を見ることが出来る。その所説・詠歌についてはさしていふべきことはない。是よりさき歌道の門閥その根柢を固めて自由討究の風地を拂ふに至つて、徒らに師承を尊信するに至つて、所説を神秘化するや、傳授・秘傳等盛に行はれた。既に二條爲定は足利尊氏に三代集の傳授を授け、後光嚴院は二條爲明から古今集の傳授を受けさせられたといふ。而して古今傳授が特に喧傳するに至つたのは、常縁がこれを高足宗祇(宗祇のことは後節に述べよう)に傳へたに始まる。その所説は蓋し兒戯に類するもので、學説としては何等價値のないものである。

かくて應仁以後戦亂相次ぎ、和歌は堂上に殘骸をとどめるに過ぎなかつた。この間三玉集——後柏原天皇の柏玉

集、三條西實隆(道隆院)の雪玉集、冷泉政爲の碧玉集を併せていふ——がやゝ名高いとはいふものゝ、さした特長を見ることも出来ず、武人にして歌を嗜んだもの——太田道灌(基賢集)はその最も名あるものである——亦いふに足らない。かくて歌壇は沈衰の中に近世を迎へるのである。

### 一三、兼好とつれづれ草

平安朝時代に清少納言の枕草子が書かれて以來、隨筆文學にすぐれたものは出なかつた。南北朝の頃に至つてつれづれ草が出て、やゝ彼と肩を並べるに足るものがある。

つれづれ草の作者は兼好である、京都吉田神社の社人で、卜部兼顯の子、仕へて藏人・左兵衛尉となり、後宇多院の厚い眷顧を蒙つてゐたが、正中元年その崩御にあひ、哀痛の極、剃髮して、俗名兼好をそのまゝ兼好と稱した。その後は隱遁生活を造り、或は雙が岡に蝸牛の庵を結んで住み、或は東國遍歴の旅に出でなどしたが、晩年伊賀國見山の麓に草堂を營んで住み、そこで正平五年(北朝の觀應元年(一一二〇)に示寂した。時に年六十八。)

兼好が歌で當代に知られてゐたことは前節にもいつたところである。元享三年に先坊(邦色親王)の歌合に、正中二年に春宮から歌合の歌を徴されて居り、建武二年には内裏の千首にも題を賜はつて歌を奉つてゐる。皆遁世前後のことで、その頃は勿論有數な歌人として見られてゐたことを知る。その歌は

大井がはくだす筏も早き瀬にあかでや花のかけをすぐらむ

しほらじよ山わけ衣春雨にしづくも花も匂ふ袂は

のやうに二條家の平弱な調子のもので、とり立てゝいふほどのものではない。その永久に傳へられるのは、つれづれ草あるがためである。

つれづれ草の成立については、三條西實枝(三光院といふ。道善院實隆の孫)崑玉集に、

兼好法師つれづれ草は其世に知るものなかりしを、童命松丸今川了俊のもとに仕へてありしに、「兼好もしや歌などのこれるか。作の物語やある」と問はれしに、「書きすてられしもしほ草あるは歌のすゞろ言葉も、げにや多くは庵のかべにはられて候。こゝにもおはしませども、自が重寶にもかたみにもと貯へ候」と語りければ、それたづねさせよとて、吉田の感神院へは命松丸をつかはし、伊賀の草庵へは従者伊豫太郎光貞といふ者、歌の志ありとてつかはされしが、歌の集は伊賀の草庵にて五十枚斗集め、つれづれ草は吉田にて多く壁にはられ、或は經卷などを寫せる裏書にてありしを取り來りぬ。之を了俊、命松などとり揃へ、命松丸がもとにありしをも、また二條の侍従の方によみつかはされしをもとひ集め、歌の集二冊とし、又草子をも二冊とせしなり。「つれづれなるまゝに」と書出せし語意のおもしろくあはれ深きになぞらへてつれづれ草といふ題號はつけられたり。

とあつて、これが一般には信ぜられて來たのであるが、既に藤岡氏も「まことしからず」といつて居るやうに、了俊の落書露顯にも、命松丸を扶持したことはいへど、つれづれ草についてはいふところがない。家集は前田家に兼好自筆のものを傳へてゐるといふし、かたゞつれづれ草も歿後の編纂ではなくて、兼好がつぎ／＼書きついで、大體現在形にしてゐたのではないたらうか。

さて本書の制作年代については土肥經平(天明二年(二四四)は春湊浪話に、上卷は建武三年正月以前に、下卷は四年

五月以後に成つたものといひ、藤岡氏は「二百三十八節の如きは、或は尙建武三年以後にも渡りしならんか」といつて居り(二百三十八節とは「當代いまだ坊におはしまし、」中村直勝氏は當代と申し奉るが後醍醐天皇をさし奉る以上、この段から出發する年代論は、當然その崩御になる延元四年までひき下げられるべきだといつてゐられる。要するに本書の制作年代はこれを的確に知ることは出來ない。

すでに隨筆である。その内容が多岐に亘ることは當然である。その全編を通じて流れてゐる中心思想が佛家の厭世觀であることは疑ふべくもないけれども、融通無礙或は老莊の説を交へ、王朝の趣味に徘徊してゐるところ、そゞろに達人の襟懷の掬すべきを見る。彼を目して雜駁だといふのも、無節操だといふのも、たゞ一面の觀に過ぎない。廣く諸道に通じて、しかもその何物にも煩はされないとところに兼好の眞面目があり、つれづれ草の價值があるのではないだらうか。

いふところが既に洒脱の佛がある。文亦これに伴ふて輕妙を極めてゐる。枕草子を學んだ文だといふが、なるほどさうした點もないではないけれども、兼好には兼好獨特の筆致を見る。枕草子に感ずるやうな辛辣味はなく、方丈記に見るやうな執拗さは勿論ない。中には王朝の物語文からの拔萃といつても首肯せられるやうな文などもあつて、その才筆のほど、うたゝ敬服にたへないものがある。

#### 一四、雜史と軍記

平安朝の大鏡の流れをひいた所謂「鏡もの」の作に王朝末期に今鏡のあることは既にいつた。それからつき／＼に

左の諸作があつて、國初から當代までの假名文の歴史が完備した。今これを内容の順に従つて列挙してみよう。

水鏡 神武天皇から仁明天皇まで  
 大鏡 文德天皇から後一條天皇の萬壽二年まで  
 今鏡 後一條天皇の萬壽二年から高倉天皇の即位まで  
 彌世繼 高倉天皇から後鳥羽天皇まで  
 平心見の増鏡 後鳥羽天皇の即位から後醍醐天皇の隱岐から還幸まで

右の中大鏡と今鏡については既にいつた。爾餘について少しくこれを述べよう。

水鏡は本朝書籍目録に従へば中山忠親(建久六年(一一八八)歿、六五)の作である。七十三歳の老尼が初瀬に參籠して、年のほど三十四五の修行者にあひ、「修行しありき給ひけん物がたりし給へ」と望んだところが、その修行者が一昨年(一一八七)の九月葛城山で仙人からきいた物語とて語つたところを記述したのだといふ。主として扶桑略記(釋皇圓の作)によつて書かれたものゝ如く、史書としても卷中まゝ見るべき叙述もないではないが。大體に於いてしかも重要視せらるべくもない。

彌世繼は後にいふ増鏡の序に「まことやいやよつぎは隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御ほどまでをしるしたりとぞ見え侍りし」とあるによつて、さる書のありしことを知るのみ(本朝書籍目録にもその名が見える)で、今傳はらない。著者隆信は藤原爲隆の子、定家とは異父兄弟である。この書の散送によつて缺けた平家時代を補はうとして江戸時代の才女荒木田麗女(文化三年(一一二四)歿、七五)に月の行方の著がある。

増鏡は一條冬良(永正十一年(一一二二)歿、七四)の作と傳へるけれど、その生前なる永和二年(大授二年(一一三六)歿、六一)の奥書ある本があつた

といへば、冬良の作でないことは明らかである。二條良基(元中元年(一一二〇)歿、六九)・一條經嗣(應永二十五年(一一三二)歿、七八)等いふ説もあるが、確證はない。たゞ本書の獲麟たる元弘三年(一一三三)から永和二年に至る約四十年間に成つたことを知るにすぎない。さて本書は後鳥羽天皇の即位に筆を起して元弘三年後醍醐天皇が隱岐から還幸し給ふに至る約百五十年間に亘つて、皇室と武家との交渉を描いた歴史物語である。きさらぎの中の五日は鶴の林に薪つきにし日なれば、かの如來三傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて、傍に參籠せる老尼からきいた物語を寫した體にかきなしてゐるのは、大鏡に濫觴した例のゆきかたであり、今鏡・水鏡と共にそれが響みに倣うたものである。しかもおどろの下・新島もり以下、久米のさら山・月草の花に至る卷名も、宇津保・源氏に淵源して榮花・今鏡にうつた體裁であり、その全體の筆致に至つては寧ろ物語の系統をひいてゐるものといふべく、道勁・簡潔の趣には乏しいが、暢達・流麗の致は得てゐる。就中承久の亂前後及び元弘の亂前後の部分は特に光彩を放つてゐる。「鏡もの」では大鏡と前後相對して双璧といふべき作である。

「鏡もの」の増鏡に對して軍記には太平記がある。全篇四十卷から成る大作である。後醍醐天皇の即位から後村上天皇の正平の末年まで約五十年間の治亂興亡の顛末を精叙してゐる。盛衰記から出て、更に絢爛の筆を弄してはゐるが、その全體の調子が著しく散文的であることは否むべくもない。戰亂の記事を點綴して王朝物語風の戀愛談を挿入して讀者の氣分を轉換せしめようと試みることも前行諸軍記に用ひられて來た慣用手段であるが、さうした挿話も、その内容が著しく時代の影響をうけて散文的になつて來たことも否めない。その他外邦の故事を挿み、佛法の談義を試みることも盛衰記等の模倣ではあるが、一層頻繁に之を用ひて全體の氣分を弛緩させてゐることも注意すべきであ

る。要するに本書は平家に比してはその詩味に缺けてゐることはいふまでもない、盛衰記に比してすら感興を覚えること少きは蓋し定説であらう。

太平記の作者は、舊くは叡山の女憲法師が、後醍醐天皇の勅命によつて筆をとり、其後數人の編徒が書きついで大成したのだといはれてゐたが、果して然るや疑はしい。近ごろ洞院公定(應永六年(二〇)五九)歿、六〇の日記、應安七年(二〇)三五月三日の條に

傳聞、去廿八九日之間、小島法師圓寂云々。是近日斷天下太平記作者也。凡雖爲卑賤之器、有名匠聞。可謂無念。

とあることが發見せられて、小島法師がその作者であることが明らかになつたがなほ小島法師一人の作か、順次書きつがれたもので、小島法師はその作者の一人かは明らかでない。とにかく卷中の記載から見ても、叡山關係の僧徒の手になつたものであることは疑ひないらしい。小島法師もその山法師の一人だつたらうが、果して如何の經歷の人かは今日之を明らかにすることは出来ないが、吉野朝廷に深甚の同情をよせてゐた者であることは、今川了俊が難太平記で此記の作者は宮方深重の者にて、無案内にて押て如此書たるにや云々と罵つてゐるによつても察せられる。

なほこの書名が、安危由來記・國家治亂記國・家太平記・天下太平記などいひかへられたとも傳へられるが、公定の日記や難太平記等によつてその虚妄なことは知られよう。

難史と軍記との雄篇は前二者に盡きるが、こゝに史論の書として逸すべからざる名篇がある。神皇正統記がそれで

ある。後醍醐天皇の回天の鴻業半途にして覆り、足利尊氏は京師に持明院統の龍種を奉じて武家政治を樹立した。この紛争裡にあつて世人はその環境に禍せられて去就に迷うてゐた際、大義名分を明らかにしようとして筆をとられたのが本書であつた。作者北畠親房(正平九年(二〇)一四)歿、六二は村上源氏、五朝に歴仕して重望があつた。後醍醐天皇の皇子世良親王の傳となり、親王の薨去にあうて一時致仕したが、元弘亂後天皇隱岐より還幸して中興の政を布き玉ふや、再び出仕して従一位に叙し准大臣となる。足利尊氏の叛くや義良親王を奉じて海路陸奥に赴かうとして、途で暴風にあひ、親王等と相失ひ、常陸に着いて小田城に入り、所在の勤王の士を糾合して賊徒に當つた。當時兵馬倥傯の間に執筆したものが本書である。その開卷、まづ

大日本は神國なり天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此の事有り。異朝には其の類無し。此の故に神國といふなり。

と宣揚し、更に

唯我國のみ天地開けし始より今の世の今日に至るまで日嗣を受け給ふ事邪ならず。一種姓の中におきても、自傍より傳へ給ひしすら猶正に歸る道ありてぞたまちましくける。これしかしながら神明の御誓あらたにして、餘國に異なりべきいはれなり。抑神道の事はたやすく顯さずといふ事あれど、根元を知らざれば、みだりがはしき端とも成ぬべし。その弊を救はんために、聊か勸し侍り。神代より正理にて受け傳へる謂を宣べん事を志して、常にきこゆる事は載せず。然れば神皇正統記を名づけ侍るべき。

といつてゐる。この精神を以て建國のはじめから後村上の踐祚に至る全篇を一貫して、巧まず飾らない中に一道の氣

魄が躍動して、誠に得易からざる史筆である。江戸時代に成つた新井白石の讀史餘論は本書に負ふところ多大なりといはれてゐる。なほ親房には文學的著作ではないが、職原抄・元々集・二十一社記等の作がある。

吉野拾遺は吉野朝廷に關する説話を輯録したもので、かなり興味饒かな作である。作者自らのいふところによれば、正平十三年戊戌の春に成つたものである。隱士松翁と名のる作者は藤原吉房侍従のことだといふ。

以上の外軍記の範疇に攝すべき作に義經記と曾我物語とがある。ともに前記の諸作よりやゝ時代が下つて室町將軍時代の作であらうと考へられる。その書名の示すやうに前者は義經傳説を集成して、特に幼時の義經と、没落の義經とを取扱つて居り、後者は曾我兄弟の復讐談に取材して、軍記通有の敘述法によつて煩はしきまで天竺・震旦の故事を挿んでゐる。この兩書ともに國民性にふれてゐるあるものを有して、世人に愛讀せられること廣く、従つて後の文學に影響するところは多かつた。

### 一五、謠曲と狂言

演劇の起源が祭祀に關してゐることは東西共にその揆を一にしてゐる。しかし劇的組織の歌舞が覺束ないながらに行はれたらしく考へられるのは平安朝頃からである。藤原明衡の新猿樂記に福原聖之袈裟求・妙高尼之禰禰乞・京童之窟左禮・東男之初京上などいふ曲目の見えるのは後の狂言のやうなものでなかつたらうかといはれる。又田樂といふものがある。田植の時農夫の勞苦を慰めるために笛・鼓・さくらをならして歌舞したのがその濫觴であつた。しかし平安朝末期に入つては田樂は貴族の遊樂を助けるものとなり、又神事にも奏せられるやうになつて、専門の田樂法師

が生じた。かくて武家時代に入つて田樂はいよ／＼盛になり、北條高時の如きはその熱愛者であつた。そしてかなり劇的發達をしたものらしいが、今ではその傳も絶えて、當時の田樂の能のいかなるものであるかも、その歌曲も知ることが出来ない。

さてかくの如く田樂の能が行はれる一方、猿樂は諸國の大寺・大社に附屬してその傳を保つてゐたが、室町ころには、大和の四座、即ち春日神社に仕へてゐた金春(圓流)・觀世(結)・實生(外)・金剛(坂)の四座と、近江の三座即ち日吉神社に仕へてゐた比叡・下坂・山階の三座とは互にその盛を争うてゐたが、その藝風は「江州には幽玄の境を取立てて物真似を次にして風情を本とす。和州には先づ物真似を取立てて、物敷を盡して、しかも幽玄の風體ならんとなり」と世阿彌の花傳書にあるを以て知ることが出来よう。しかも大和猿樂は遂に近江猿樂を壓して、應安七年(三〇)今熊野の能の時に、觀阿彌の演技は將軍義滿の感賞を得て、やがて武家の式樂として用ひられるやうになり、こゝに猿樂の能は田樂の能と並行して盛行するに至り、遂には田樂の能を壓倒して、能とだにいへば、直ちに猿樂の能をいふやうになつたのである。

謠曲は即ち能の詞曲である。謠曲はその流派(大和の四座はやがて能の流派であり、後、江戸時代の初に金剛流から喜多流が分れ、最近觀世流から梅若流が分れた)によつて詞章にも多少の差異はあるが大した違ひはない。普通に行はれてゐる曲目の数は二百番ではあるが、刊行せられてゐるものゝみでも六百番はある。未刊のものを合せて千の上にも出るだらう。而してこれら多數の詞章はその創始時代から近く江戸時代の初期に亘る長い年月を経て順次制作せられたものであらうが、近世に入つて作られたものは比較的少數であり、且つ流布せられることもなく、今日行は

れてゐる作の多くは創始期を去ること遠からぬ時期に作られたものと考へられる。そして世阿彌の作が非常に多いことは、特に注目に値する。

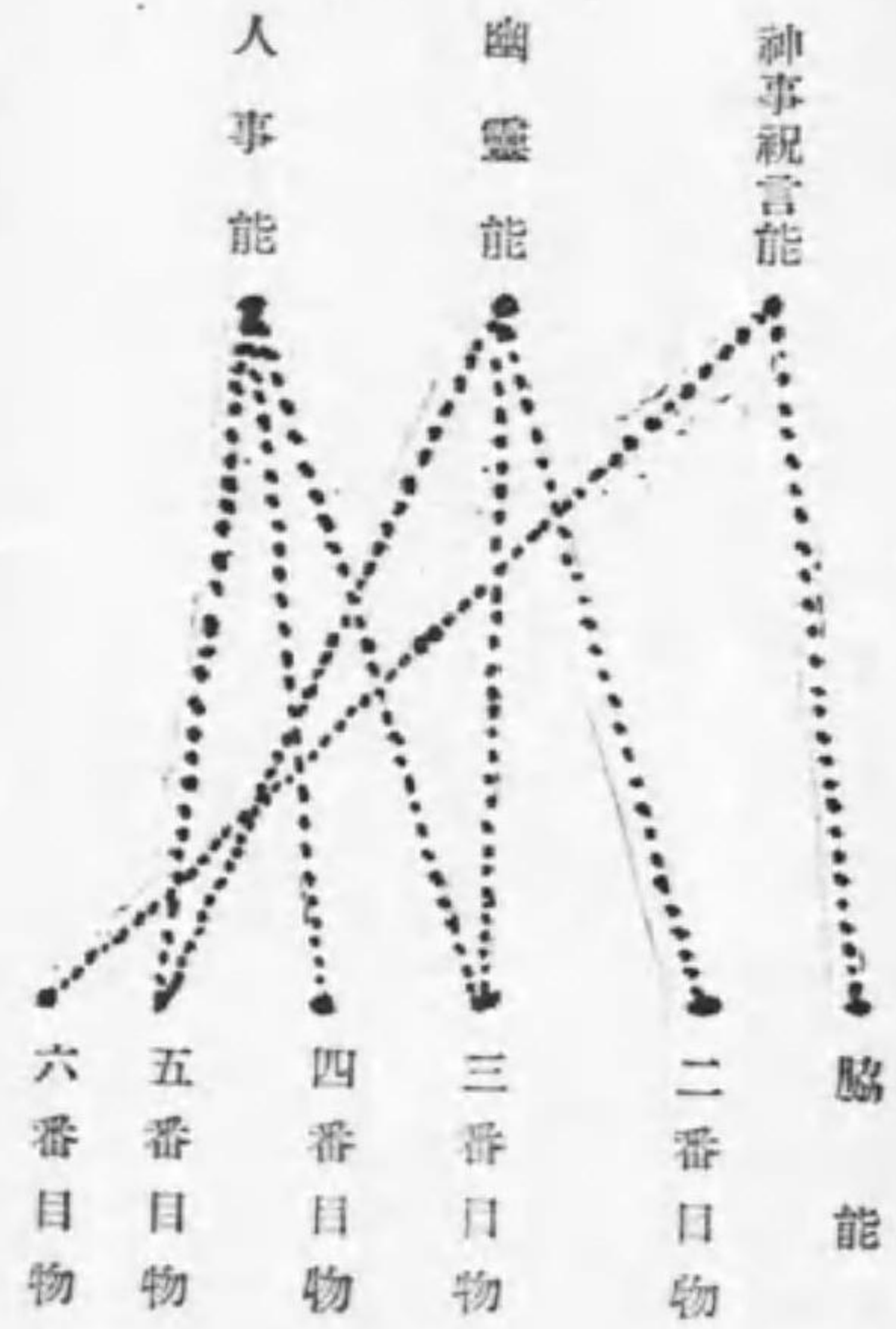
観阿彌と世阿彌とは實に能樂の創始期を飾る二大家であつた。彼等の藝術に對する態度は花傳書以下所謂世阿彌十六部集をとほして知ることが出来る。観阿彌は結崎清次といふ。元中元年(二〇)五月五十二歳で歿するまで藝術に精進した。その死ぬる月の四日(十九日に彼)に駿河國淺間の社頭で法樂をしたが、特に花やかで見物の上下一同に褒美したとのことである。小町・自然居士等はその作だと傳へられる。世阿彌名は元清、父と共に義滿將軍の保護の下に父の遺業を襲いで、能樂を大成した。七十の頽齡に及んで「子ながらも類なき達人」と頼んでゐた息男善春(元)に死別し、剩へ將軍の忌憚に觸れて佐渡へ配流せられたが、約三年の後都に歸ることを得て、嘉吉の三年(二二)頃八十以上の高齡で歿した。世阿彌の作として申樂談義に明記せるもの二十一曲、その自筆として今日に残れるもの松浦之能・阿古耶松・布留之能の三篇、その外、彼の作と傳へるものは數十に及んでゐる。

能の形式にはおのづから二種あるものゝやうである。一は主人公たるシテが前後一貫せるものと、他は前後二段に分れて、シテが前段と後段とで姿をかへるもの、即ち故芳賀博士の所謂複式能である。而して複式能にありては後シテはその本來の姿を現して、或は國土の安穩を祈り、御代の長久を祝福し、又は中有に迷へる亡魂の解脱を得、鬼神天狗が調伏せられるやうな形をとる。前シテと後シテとは同一人の假の姿と本來の姿とであるのが普通であるが、稀には全く別人である場合もないではない。これは物まねの域にとゞまる單式能から、説教的色彩を濃くした複式能にうつつて來たものとも見るべく、能の本領は後者にありとせられてゐる。

能の演技に當つて、變化あらしめて、觀る者をして飽かさらしめんがために、曲柄によつてそれ／＼前後がきまつて、これをそれ／＼脇能・二番目物・三番目物・四番目物・五番目物・六番目物といはれてゐる。今簡單にこれを説明すれば、脇能とは多くは神社の縁起を述べ神徳を讃へたもので、神能ともいはれる。賀茂・三輪・龍田等がそれである。二番目物は即ち田村・兼平・忠度等の修羅物で、その中田村・八島・簾を勝修羅といつて祝言にも用ひる。三番目物は女物で鬘物ともいふ。井筒・熊野・松風など。四番目物とは人情を主にして人に感動を與へるやうなもの。狂と呼ばれるが、それは狂ひ物が特に賞せられたからのもので、必しも櫻川・三井寺などの狂ひ物のみとは限らず、現在物と稱せられる鉢木・七騎落など亦四番目物である。五番目物は賑かで人氣をひく鬼物(船辨慶など)・天狗物(鞍馬天狗など)・太刀打物(夜討會我など)・早舞物(融など)等である。六番目物とは祝言物であるが、これは略せられることが多い。

今これを内容の上から見れば、凡そ三つに分けられよう。その第一は最も原始的のものであらうと考へられる神事祝言に關するものである。第二は神事祝言能を除いた一切の夢幻的結構を有するものを包含する所謂幽靈能で、これにはその幽靈が、(イ)人間の靈である場合、(ロ)動植物の精である場合、(ハ)天狗・鬼妖である場合とを考へられる。そして謡曲の大部分はこれであらう。第三はすべての現實的脚色の作で、人事能ともいはれよう。勿論この中には歴史的事實を取扱つた時代物と、現在の社會に取材した世話物の區別を立てることが出来る。そして幽靈能のやうに複式能の形式に捉はれることなく、劇的興味も饒かな作に富んでゐる。勿論この分類はかの演能順序による分類と彼此相渉つてゐることはいふまでもなく。即ち





謡曲の中心思想はいふまでもなく佛教思想である。現世の凡百の事、一として吾人の安心を繋げるに足るものはない。吾人の願ふべきは神佛の加護であり、望むべきは安養の淨土である。謡曲は這般の道理を演技の間に宜べようとする。畢竟現世に執すること深いが故に妄執の鬼ミなり、會者定離の理を悟らず、煩惱やる方なくして遂に狂するに至るのである。然るに神明佛陀の靈驗あらたかなるが故に、迷へる衆生も彼岸に光明を望むことを得るのである。謡曲はそれを説かうとしてゐる迹は歴然たるものがある。

謡曲は能樂の詞曲として地の謡と對話とから成る。不完全な樂劇の形をもつてゐて、本邦劇文學のために第一聲を擧げたものとして特記すべきものである。勿論劇文學としての完成は望むべくもなく、人物の性格なども描かれては

ゐず、事件の發展なども、支離滅裂といふの外なく、さうした方面からいへば價值は殆どないといつてもよい。又その詞章たる、作者は必しも自らこれを創作しようとはせず、かの宴曲と同じく古典の引用によつて詞章を飾らうとした。しかし、古今の美辭麗句を集めて「祝言・幽霊・戀・迷・懐・望・憶いろ／＼の縁によるべき詩歌の言葉を能の風體によりて、とりあてがひて書くべし」といひ、又「その人體々々を分けて書くべき言葉あり」とて、その引用の妥當ならんことを念とし、人物の用語の自然であるやうにと苦心を拂つてゐたことはうかゞはれる。しかもあまりに引用に重きをおくところから、

や、山寺のや、春の夕暮きて見れば、入逢の鐘に花ぞ散ける。／＼。／＼。去程に／＼寺々のかね、月落鳥鳴て、霜ゆき天にみち、しほ程なくひたかかの寺の、江村の漁火うれひにたいして、人々ねふれば、よき隙ぞと、立まふやうにてねらひよりて、云々 (道成寺)

のやうに、奇異な詞章もうまれるのである。これ即ち山里の春の夕ぐれ来てみれば入あひのかねに花ぞちりける (新古今、能因)

月落鳥啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。(三體詩、張繼)  
 の二作によつて綴り成されたもので、春晩秋夜の矛盾などに頓着しないのである。かく一語の上の聯絡をのみ思ひて、意の上の聯絡は考へざる也。その聯絡なく變轉するところに、却つて多方面の興味は存在するなり」とは故芳賀博士の説である。

ともあれ、謡曲は當代文學の雄として特筆に値するものである。しかしそれ自らとしての價值は果して爾く高いも

のかは疑はしい。たゞその曲節と伴ひ、更に能樂と相俟つて始めてその渾然たる藝術味が發揮せられるのである。附けていふ。謡曲が元雜劇に倣うて作られたものだといふ説が荻生徂徠や新井白石等の碩學によつて唱へられたが、それは殆ど根據のない臆説で、多く顧みるに足らぬ。

古典的な能樂の間にその嚴肅味を緩和して、見る人々の氣分を和げるために行はれたものが狂言である。能が猿樂本來の滑稽さを脱して著しく神秘的宗教的になつたに對して、古猿樂の佛を傳へて、もこは單なる滑稽の演技から出て、やゝ趣向を構へて脚色したものである。世相を正視して、これを理想化しようとしたのが謡曲であつた。狂言では現實の世の弱點を強く寫し出さうとするのである。無學・無風流にして而も臆病な大名、怠惰・狡猾な冠者、破戒無慚の僧侶、かうした登場人物は當時隨所に見られたものなるべく、狂言作者は巧みにこれを捉へ來て、公衆の面前に暴露して、哄笑せしめ、或はその間まゝ諷刺の意を寓して、よく時相の一面を描いてゐる。

今日に残つてゐる狂言は二百番、載せて狂言記・續狂言記・拾遺狂言記・狂言記外に載つてゐる。大藏・鷲・和泉の三流があるが、今普通に行はれてゐるは和泉流の狂言である。その作者は玄惠法師といふ説もあるが、勿論信じることは出来ない。今からこれを考ふべき資料は殆どない。

狂言は演出の方面から見ても、末廣がり・寶の槌など、祝賀の意をあらはした脇狂言、薪大名・墨塗等大名を主とする二番目狂言、及びその他の雜狂言に分けられるが、内容によつて分てば、(一)祝賀の意あるもの、(二)神靈的なもの、(三)人事に關するもの、(四)謡曲的なものともすべく、その中第三類に屬するもの最も多く、狂言の中心をなしてゐる。

なほ狂言の大きな特色といふべきはその全篇對話のみから成立つてゐることである。勿論劇の原始的演出法として登場者の傍白を以て事件の推移を説明することがないではないけれど、他からこれを説明することのないのは、やがて後の脚本に一步近づいて來たのである。又既に述べたやうな一般性質からしてその用語も謡曲のやうな貴族的の語彙を用ひることなく、當代の口語を以て終始してゐるのも國語史上注意すべき點である。

## 一六、舞の本

猿樂能と並び行はれた當代の歌舞に幸若舞があり、その詞章に舞の本がある。

幸若舞はまた舞々ともいふ。桃井播磨守直常の孫直詮が創めたといはれる。その幸若舞といふ所以は直詮の幼名を幸若丸と稱したからである。幸若丸は父直知の歿後叡山に上つて、所縁なる光林房詮信の許にあつて學問に出精してゐたが、天性音樂の才があつて、ある日、屋島合戦の事を叙べた草子に曲節をつけて謠うところが、山法師等が嘸稱したといふ。これがもとで彼は藝道に専念し、遂に一流を立てたのだと傳へる。直詮は文明十二年(四〇)七十八歳で歿した。

幸若舞は猿樂・田樂などは異つたもので、曲舞から出たものだらうといはれる。曲舞は猿樂能などに先立つて平家のやうな叙事詩をいくらか所作をもて演じたものである。(曲舞は室町初期にはかなり發達して、その長所は觀阿彌によつて猿樂能にとりいれられたことはいふまでもない)さうしたものゝ影響をうけて幸若舞は創始せられ、主として軍記に取材した曲目を以て一派の武人の趣味に合うて戦國時代から江戸時代に入つて、その初頭にはなほ行はれて

わたが元祿の頃から花やかな能に壓倒せられて、今では殆ど滅びて、わづかに九州の一角に餘命をとめてゐるにすぎない。

幸若舞曲は舞三十六番と稱してゐるけれど、實際はなほそれに洩れたものが數曲あつて、四十數曲を數へることが出来る。そして内容の上から見ると、それは平家物語から出たもの——硫黄が島・敦盛・奈須の與一など、義經記と材を共にするもの——未來記・烏帽子折・高館など、曾我物語と材を同じくするもの——元服曾我・和田酒盛など古傳説によるもの——日本記・入鹿・百合草若大臣などに大凡わけて見ることが出来る。因にいふ、舞曲は新群書類從第舞曲部(國書刊行)に最も多く集められ、それに洩れたものは島津久基氏の近古小説新纂にも數種輯められてゐる。

舞の本の詞章は謠曲のやうに律語的でなく、著しく散文的である。殊に平家に取材したあるものゝ如きは殆ど原文のままなものもある。義經記・曾我物語と舞の本との間にも亦本末關係があるらしいけれども、その前後はかの二書の制作年代の不明である以上、今日からは到底知ることが出来ない。そはともあれ、武人的趣味に投合せる曲目たるだけに勇壯悲愴な情景を描いては當代に匹疇稀れなものがある。腹を切つた辨慶が一堀の舟橋をかぶくと渡つてゆく。

奥の軍兵この由を見るよりも、あら恐ろしや、又辨慶が懸るは、こゝを引けやといふ儘に、われ先にとぞ逃げにける。衣川颯と趣し向のははたにて漂蕩するつはものを十七八騎斬りふせ、此方の端へ歸らんとしたりしが次第に性根亂るれば、西向につゝ立つて、薙刀眼にゆりたてゝ、光明眞言稱へつゝ、生年三十八にして衣川の立往生を惜まぬものはなかりけり。

かくても敵はなほその死を知らないさしつめひきつめ遠矢に射るが、

武藏に中るその矢は葦を束ねて楨の板戸を突く風情、固より死したる辨慶にて、その身ちつとも痛ます。

寄手のぬまたての庄司が心の剛な者は立ちながら死ぬこともあるものだとて、弓弦をおつとりのべ、おづくつく

固より死したる辨慶で枯木を倒す如くにたんぶとまろびけり。まろびけるその前に、持つたる長刀ひらりとするを見るよりも、ぬまたての庄司は、死したる者と知らずして、又切つて懸ると心得、氣も魂も身に添はず、駒より下に轉びおち、うきぬ沈みぬ流れて、衣川の堰にせかれて死んだりしを貴賤上下おしなべて惡まぬものはなかりけり。

といふが如きは殊に勝れたものゝ一であらう。

かうした散文的の作品で舞曲はあつたが故に、羣書一覽に舞の本とあるものが貞享の書籍目録には普通の草子類と並べて出してあるぐらゐで、舞の本は多分に讀物的素質を有してゐる。當時の草子物語については次節にこれを見る。

## 一七、御伽草子

前代をうけて當代にも、なほ平安朝ぶりの戀愛小説がかなり行はれたが、その間にも自ら時代の風潮は看取すべく、同性愛を描いた作がこの時代に入つてはかなり書かれた。秋夜長物語・鳥部山物語・幻夢物語等の作がそれであ

御伽草子とは婦幼の徒然を慰めるあそび相手の草子とでもいふ意味らしく、いつごろからかくいはれたものか定か

る。しかしさうした物語と共に當代に於いて多く書かれたものは所謂御伽草子とよばれる一羣である。御伽草子とは婦幼の徒然を慰めるあそび相手の草子とでもいふ意味らしく、いつごろからかくいはれたものか定かならねど、近世期の初めに御伽物語御伽婢子等御伽を名に負ふ作の多く出たことから推して、かくの如き一類の小説を總括して御伽草子といひならはしたものであらう。さて普通にいふところの御伽草子とは、享保の頃、大阪の書肆澁川某繪入横本の叢書として發售した左記二十三種をいふ。この二十三編は明治二十四年に今泉定介、畠山健の二氏によつて、校刊せられ又有朋堂文庫本御伽草紙中にも收められてゐる。

- 文正ざうし 小町草紙
- 御曹司島わたり 唐糸草紙 木幡ぎつね
- 七草草紙 猿源氏草子 物くさ太郎
- さゞれいし 蛤の草紙 小敦盛
- 二十四孝 梵天國 のせざる草紙
- 猫の草紙 濱出草紙 和泉式部
- 一寸法師 さいき 浦島太郎
- 横笛草紙 酒吞童子

これはたまく／＼享保の頃に輯められたものだが、御伽草子の名目は勿論これに限らるべくもない。この叢書に漏れた古草子二十種を集めて新編御伽草子が明治三十四年萩野由之博士によつて校刊せられた。なほ平出鏗<sup>ニ</sup>或郎氏の室町

時代小説集、島津久基氏の近古小説新纂、及び有朋堂文庫本御伽草紙等に採れるものゝみでも約五十種を數へることが出来る。作者はすべて誰と知り得ない。たゞおしなべて室町季世の作と推定せられる中に江戸時代に入つてから作られたものゝ若干雜つてゐることも否み難い。たゞ内容の方面から見れば、戀愛譚・武勇譚・繼子いぢめ・逆世物・縁起物・異類物等に區別することが出来るが、大體に於て趣向、文章共に幼稚で、筋が通らず前後矛盾せるもの、叙述に主客輕重の權衡を失ふもの、挿話の冗漫繁褥に過ぎるもの、引用の詩歌故事のその當を得ないもの等比々皆然らざるなく、加之説話に形式が生じて模倣に模倣を重ね、讀者の倦怠を誘ふ。且つ作者の無學なる、頼朝を左近の右大將といひ、公卿の私第に日の御座があるなどの滑稽をも敢てしてゐる。その他全體に亘つて澁刺たる新鮮味に缺けてゐて、文學的香氣は爾く高いとはいひ難い。

平安朝に一時隆盛を極めた物語が鎌倉時代を経て、いかにその衰頹を極めたか、而して江戸時代の小説、淨瑠璃がどうしたところにその發祥の源泉をもつてゐるか、さうした歴史的興味を以て見る時。室町時代の小説——御伽草子にも一脈の生命が生じる。そして今昔・宇治拾遺等の説話文學の系統がどんな形を以て繼承せられたかも御伽草子の語るところである。

### 一八、連歌から俳諧へ

南北朝から室町時代に入つて、歌がますます沈衰の域に入つたことは既に述べたところである。一度二條家に私せられた歌は、或は制の詞といひ、その他種々の束縛が、その用語・思想の方面に加へられ、傳授と稱する祕事によつ

て神祕化せられてからは、戦亂に際なき當時の人士の容易く近づくべからざるものとなつた。こゝに歌に代つて當代にもてはやされたものは即ち連歌であつた。

連歌の起源は二條良基の筑波問答によれば、諸冊二神が游能基呂島に天降りまして、天の御柱をゆき廻りあひ給ひて、伊弉册命まづ

阿那邇夜志愛衰登古衰

とのり給ひ、ついで伊弉諸命

阿那邇夜志愛衰登古衰

とのり給うた、その唱和に始まるとなすものゝ如く、その後、景行天皇の御宇日本武尊東征の御歸途甲斐國酒宮にとどまり給うた時、尊が

新治つくばを過ぎていく夜か寝つる

と仰せられた時、そこなる御火燒の老人が、御歌をつぎて

かどなべて夜には九夜日には十日を

と歌うたのも連歌であるとする。これらも連歌と見られないではないが、諸冊二尊の唱和の如きは果して連歌と見るべきか、又日本武尊のその如きも、なほ古事記神武天皇の條等にも見えて、これを以てこの種の唱和の嚆矢とも見るべきでない。いふところの連歌——一首の歌を二人にてよむところの——の權輿とも見るべきは、萬葉集卷八なる、尼が頭句を作り、また大伴宿禰家持が尼に誂へられて末句をついで、或者に和へた歌

佐保河の水をせき上げて植ゑし田を尾の作刈る早飯早飯は獨なるべし家持つて

であらう。爾來かうした一首を二人で分ちよむ底の遊戲的唱和は平安朝に入つても衰へなかつたことは伊勢物語その他に於てこれを認めることを得べく、拾遺集雜の部には數首の撰を見たのであるが、なほ連歌の目は存しなかつた。勅撰集でその目の始めて見えたのは金葉集に至つてである。しかし一聯の連歌は短歌の上下句の關係を有して居り、表現の形式もたゞ機智を旨として文字の末枝に走るのみで、未だ文學として見るに足るものはない。かくて鎌倉時代に入つて、古來の二句のみの連歌は長大の形式をとつて、五十韻・百韻等が行はれるやうになつた。それは後鳥羽院の建保頃からで、定家隆なども屢御召に預つたといふ。八雲御抄に

昔は五十韻・百韻とてつゞくる事はなし。唯上の句にても、下の句にてもいひかければ、いまながらをつくる也。今の様にくさる事は、中頃よりの事なり。

と仰せられてゐることによつて順徳院の御時には既に五十韻・百韻等の行はれたことを知る。そしてかうした長大の形をとり無韻の句に五十韻百韻と稱するのは、支那の聯句の影響であらう。

後鳥羽天皇の御宇に、連歌にたづさはる者を柿本衆・栗本衆と二流に分ち給うたといふ。柿本はよの常の歌、是を有心とし、栗本は狂歌、これを無心といつたといふ。換言すれば前者は優美典雅を旨とし、後者は機智滑稽を主としたのであつた。この二流は並び行はれたが、いつしか無心流は有心流に壓倒せられて、連歌はその詩想に於て表現に於て歌の後塵を拜するに過ぎず。しかも歌人はこれを以て歌の餘興と心得て、歌の下位に列せしめてゐた。かくて堂上歌人の蔑視は、やがて地下人をして親しみ易からしめ、連歌流行の端はこの間に開けたのである。

かくて連歌は、歌を壓倒して隆盛に赴き、二條良基に至つて、攝關の貴に居て之を好むこと甚しかつたが故に、世間的にもその地位は高まつて來た。

良基は歌道に於て頼阿と共に二條家歌學をもり立てた人であることは前節に述べたところである。彼は同時に連歌道にも忘るべからざる人である。鎌倉末に斯道の達人といはれた善阿の門より出た救済をその師として、連歌に精進し、後村上天皇の正平十一年(北朝の後光嚴天皇の延文元年(一〇一六))師救済と共に撰した菟玖波集は古來の連歌を集めて、連歌の集の陳吳であつた。而してこの書が翌年勅撰に准ぜられてから連歌の地位は確固たるものとなつた。ついで應安五年に(二〇三)冷泉爲相(定家の孫)の制定した式目を取捨して新しい法式が成つた。所謂應安の新式で連歌のよるべき準則を示して廣く斯道に遊ぶ者の寶典となつた。但し煩瑣な形式上の拘束はその自由な發達を阻害したことがなかつたとはいへないが、ともかくにもよるべき道を明らかに指示し得た點に於てその功績を認める、

良基は藤原道平の男、後醍醐天皇の御代に總中納言となり、天皇蒙塵の後も京にあつて北朝の天子に仕へ、累進して光明天皇の貞和二年關白となり、後圓融天皇の永徳元年太政大臣となり、翌年後小松天皇の攝政となつたが嘉慶二年(二〇四)六十九で薨じた。歌道に關する著書は既に説いた。連歌の方面では菟玖波集・應安新式の外に筑波問答がある。救済良基等の後、斯道に名ある者が相ついで出て、連歌はますます盛に行はれたが、連歌がその發達の頂點に達したのは宗祇の出るのを俟たなければならぬ。

宗祇は紀伊の人、少くして律僧となり、後京に出て連歌を心敬・宗砌等に學んだが、出藍の譽があつた。性雲水の癖があり、南究又北馬、四方に歴遊して、詩藝を肥した。晩年北國の旅から關東に轉じ、相模湯本の客舎で長逝した。

實に文龜二年(六一)七月のことで、時に宗祇年八十二歳であつた。なほ宗祇は連歌道の人たるのみならず、歌道に於ても古今傳授を東常縁にうけたといへば、その地位知るべく、又萬葉・古今・源氏等の古典の研究家としても實に當代有數の學者であり、當時にあつては誠に得易すからざる大才であつた。

- 雪ながら山もと霞むゆふべかな 宗 祇
- ゆく水とほく梅にほふ里 肖 柏
- 河風に一むら柳春見えて 宗 長
- 舟さすおともしるきあけがた 宗 祇
- 月やなほ霧りわたる夜に残るらん 肖 柏
- 霜おく野原秋はくれけり 宗 長

これは長享二年水無瀬三吟三百韻の一部である。單に相隣る二句が歌の上下句のやうな關係にあつた從來の連歌から、毎句獨立した意義をあらはすと共に、前後二句の間に隱微の關聯を保ち、しかも全體に變化を求めるやうになつたのは宗祇以後の連歌である注意すべきことである。

宗祇は明應四年(五一)新撰菟玖波集二十卷を撰した。菟玖波集に踵を接して成つた大連歌集である。吾妻問答老のすさび等は連歌道についての著述である。その他古典についての述作はかなり數多い。

宗祇の流を承けた者の多い中に牡丹花宵柏・柴屋軒宗長等が最も名高い。宵柏(大永六年(一一二一)八六(八五))は師から古今傳授をうけたほどの高足であつた。連歌には新式今按の撰がある。これより先き享徳元年(一一二二)に應安新式を改訂して新式

追加が宗鑑(康正元年(二) 一一五) 歿と一條兼良(文明十三年(二一) 四一) 歿、八十)とによつて成され、それを又更に改訂し成つたのが新式今按であつた。文龜元年(六一) 六二のことである。かく式目の改訂せられると共に、その規則も漸を追うて煩瑣を加へ來り、その結果斯道の衰微を來すに至つたのである。即ち良基に興つて宗祇に榮えた連歌は、宗祇と共に混びてしまつたといふも誣言ではない。

連歌に柿本衆・栗本衆の別が當初あつたことは既にいつたところである。而して良基・宗祇のそれはやがて柿本衆の流であることもいつた。こゝに古の栗本の風を望んで室町時代の末に立つた二人がある。山崎宗鑑と荒木田守武とである。

宗鑑(天文二十二年(二二) 一三) 歿、八十九)は近江の佐々木氏の族、姓を支那といふ。將軍足利義尙に仕へたが、義尙の薨去にあひ、無常を觀じ、名を宗鑑と改めて遁世した。後山城國山崎に住んで山崎宗鑑と稱した。犬筑波集はその集である。

霞の衣裾はぬれけり

佐保姫の春尿ちながら尿をして

月日の下に我は寝にけり

唇にて破れをつゞる古ぶすま

守武(天文十八年(二二) 〇九) 歿、七十七)は伊勢の神宮で、宗祇等と交つて連歌を學んだが後その桎梏を厭うて自由な道に進んだ。獨吟千句にその作を見る。

さて俳諧とてみだりにし笑はせんとはかりはいかん。花實を具へ、風流にして、しかも一句たゞしく、さてをか

しくあらんやうに、世々の好士の教なり。

といつてゐる言葉に彼の俳諧に對する考は看取せられよう。

飛梅や輕々しくも神の春

われもくゝの鳥うぐひす

長閑なる風ふくろうに山見えて

めもとすきまじ月残る影

宗鑑と守武と共に連歌から出て一きは奔放な世界を憧れたとはいへ、二人者の性格の相違はまたその作の上にも見え、宗鑑は粗野にして露骨、時に卑猥讀むに堪へないものもある。守武は温健雅醇、その滑稽も諧謔も上品ではあるが、たゞ文字・言語の上のみ低迷して、淺薄なものがある。この二人者の連歌は即ち俳諧の連歌と稱せられるもので、連歌に對する革命の事業は、やがて次の時代を俟つて完成せられる。

## 一九、五山の文學

平安朝の初頭に一時榮えて以來漸く衰運にむかうて來た本邦に於ける漢文學は、室町時代に至つてまた一時の盛運を見るに至つた。

鎌倉時代の初頭に僧榮西が入宋傳法して以來、僧徒の彼土に渡る者漸く多く、彼土の文物の移入せられるもの年を透うで盛であつた。殊に正安元年(一九) 九五に元僧寧一山來朝歸化するに及んで、漢文學が僧侶殊に一山が建長寺を主と

り、圓覺・淨智兩寺に住し、後京都南禪寺を董した關係から五山の禪僧の間に盛行するに至つた。文運陵夷の當時に在つて文字を解する者僧徒に及ぶ者はなかつたのに、加之五山の學僧には練達堪能の士が輩出したので、室町時代を通じて五山は實に文學の淵藪であつた。

五山の文學を通觀して、凡そ應永(元年は二〇五四)の頃を以てこれを二期に分つことが出来る。前期は即ち詩文の發達した時代、後期は學問の研究を以て著聞する時代である。

一山の會下に虎關と夢窓とがあつた。虎關(正平元年二)は元享釋書・濟北集が著聞してゐる。虎關から中巖に傳つた學統はやがて絶えてしまつた。五山文學の濟々たる多士は多く夢窓(正平六年二)の會下に出た。



夢窓門下の義堂は恐らく最も偉出した作家の一人だ。空華山人と號した。土佐の人はじめ叡山に上つて受戒したが、十七の時臨川寺(峨)で夢窓國師に謁してその會下に列して、印可をうけた。國師の示寂後、或は圓覺に住し、建

仁を董し、遂に南禪寺に住したが嘉慶二年(二〇四八)に示寂した空華集十卷はその家集である。明僧楚石は空華集を見て三嘆して、意はざりき、日本にこの郎あらんとはいつたといふ。いかに彼の詩作が和習を脱して、直に彼土の作に迫らうとしたものゝあることが知られよう。

義堂と並んで詩人を以て聞えてゐるのは絶海である。蕉堅道人と號した。土佐の人。義堂と同じく夢窓國師に參して、甚だ重んでられた。應安元年(二二〇)明に遊び、永和元年(三二〇)歸朝した。後將軍義滿は師を請じて相國寺に住せしめたが應永十二年(二六五)入寂した。その詩文集蕉堅稿を明僧道衍が見て、詩に於てよくわが性情の正を寫出してある詩をいふ者は必ず師とせねばならぬと評したといふ。いかにその作の傑出してゐたかを知ることが出来る。義堂の門下に岐陽があり、その門に一度・惟肖出で、惟肖の門下に景徐・蘭波・了庵・桂庵等が出た。中に就て最も注意すべきは桂庵である。

桂庵(永正五年二)は山口の人、幼少にして上洛して、南禪寺の惟肖について學んだ。刻苦精勵、内外典に博通して學徳一時に高かつた。應仁元年(二二七)明に至り、杭蘇の間に遊んで、諸儒を訪うて程朱の學を究め、居ること七年、文明五年に歸朝したが、時恰も應仁の大亂の後をうけて、餘燼なほ熄まず都門に道を廣めることは不可能の有様であつたが故に、彼は西の方石見に赴き、更に九州に渡り、遂に鹿兒島で客死した。その間薩南の地に宋學を講じ、或は大學章句を刊行し、桂庵家法和點を公にした。程朱性理の學が次代に盛行すべき機運はかくして醸成せられたのである。

桂庵の門下は多い南村梅軒は石見時代の門弟で、學を土佐に傳へた。野中兼山・小倉三省・山崎闇齋などはその學



統をひいてゐる。鹿兒島時代にはその門に集つた者は甚だ多く、島津氏の一門をはじめ、その重臣の中にも學をうけたものは多い。緇衣の徒は擧げて數へ難いが、中にも郁芳・舜田・月渚は薩隅の地に儒學を宣揚するに功のあつた者である。その他遠く上野越後等から風を望んでその傘下に集つた、盛なりといふべきである。

かくてうちつゞく戦亂を外にして、將に滅せんとする學燈は禪林に維持せられてやがて、江戸時代に入つて大に興るべき潛勢力を養ひつゝあるのであつた。いかなる點に於て國文學との交渉があるかについてはこれを語るに足るものがない。或は謡曲のあるものは五山の學僧によつてつくられたといふ説もあるが、那邊まで信じてよいかを知らぬ。たゞ彼等の齎した文化は不知不識の間に國民の性情を陶冶することの多かつたことのみは首肯せられる。

要するに五山の文學は純然たる漢文學であつたが、その發達の程度についていへば、前代までのいづれの時代のそれよりは高い標準に達してゐた。そして彼等の殘した講筵の筆記には國語の参考となるもの多く、日記(臥雲日伴錄、藤涼軒日)の類は史料として重んぜられる。

## 第四章 近世の文學

### 一、序 說

元和偃武以後二百七十年、時に干戈の動くことなきにあらざりしも、四民太平に酔うて現世謳歌の聲は所在に湧いた。太平の日はやがて藝術の花の開く日である。而して貴族・僧侶・武士といふが如き上流の士のみの中に受享せられた文化は漸く民衆の間にも浸潤して、彼等の間にも亦藝術の園に遊ぶの餘裕を生じた。否、何等傳統に觸せられない

民衆の間こそ、眞の囚はれざる藝術があつたといつていい。しかも階級制度は頗る嚴であつて、武家と町人との間には截然たる障壁が築かれて、また踏えるすべもなかつた。故に武家には武家の藝術があり、町人には町人の藝術が存して、彼此相通じて渾然たる藝術の生れなかつたことは、かへすゞ口惜しい至りであるが、他の藝術はさておき、文學の方面でもその制作の分量の多いこと、及びその實質に於いても、前古に未だその比を見ざる盛觀を來したのであつた。

前代から漸次發達して來た武士道は、鎌倉・室町の紛亂の世になつて鐵火の洗禮を経て大成し、この期の始めに於ては、その内容・外觀大に備り、利弊共に著しくなつて來た。忠孝を旨とし、武藝を練り、義の爲めには生命をも惜まず、然諾を重んじ、廉潔を學び、私慾のために意志をまげること最も卑劣な行爲とする。その弊の極まるところは、伐に流れ、人を殺すことを朽木を伐るほどにも思はず、些末なことののために生命を捨てるに至る。義理を重んじることはいゝが、はては形式に流れ、名譽心に拘はり、今日これを見れば頗る滑稽に感じられるものがないでもない。かうした世相は當代の文學に著しく反映せられてゐる。西鶴の武家物、京傳・馬琴等の讀本を思へ。

前代にさしにも隆盛を極めた佛教は、當代にあつては寧ろ衰頽の運にむかつた。形式的信仰を繋ぎとめてはゐるけれども、それはたゞ前代の惰力にすぎない。有徳の聖僧の出現ること全くなかつたのではないが、教界一般の空氣は退嬰的に傾き、布教に熱心を缺いたこともその一因である。百違相ないが、これ亦時代の大勢の趣くところ、如何ともし難いのであつた。

佛教に代つて精神界を指導したものは儒教であつた。儒教が移入せられたことは古い。しかも人心を支配するに至

つたのは近古以来のことである。殊に近世の初頭徳川家康が儒教主義を以て天下に臨んでから、その盛行驚くべきものがあり、武士道と相並んで當代思想の基調をなしたのである。かくて戀愛は極度に卑しめられ、男女七歳にして席を同じふせざる底の道徳は上下に亘りて認められ、青春の男女が美しい戀愛に酔ふが如きことは絶対に許されないことであり、町人の家にあつてさへ、さうしたことは許さるまじきことと考へられてゐた。

かうした男女關係は、一方遊廓の公許を見るに至り、遊廓に於てのみ儒教主義の假面を捨てた人間性の發露を見るに至つた。身分ある人々もこゝに出入するを爾く恥ぢることがなかつたが故に、彼等に應接する必要上遊女亦多少趣味文字を解する者もあり、江戸時代を通じて遊廓と遊女とは文學の上に重要な役割を演じるやうになつた。元祿の西鶴物・享保の八文字屋本・天明の洒落本・天保の人情本等から遊廓と遊女とを取り去つて、後に何が残るだらう。従つてこれらの文學がともすれば卑猥に墮して、心ある士の矚感を買ふのも亦已むを得ざるところである。

江戸時代に於て社會を形成せる二大要素は武士と町人である。武士に武士道ある如く町人には自ら町人道がある。町人は孝行を第一とし、神佛を學び、重代の家業をついで、これを子孫に傳へ、勤儉己を持って財寶を重んじなければならぬ。かくの如き町人道を鼓吹したものは即ち心學であつた。心學は陽明學を基として、神・儒・佛三教の説を混じて、専ら町人の爲めに平易通俗な道徳を説いたので、享保の頃(かの元年は二二七六年)石田梅巖(享元年二二四〇四)歿、六十が京都車屋町に講席を開いたにはじまる。町人道は必ずしも心學の勃興にはじまるのではなく、既に存してゐた町人道に一層明瞭な説明を與へたものである。近松の淨瑠璃、八文字屋の氣質物に見える思想が、心學の起らない前に出て、しかもその説くところと符節を合す如物のあるを思へ。

以上述べたやうな背景に立つ江戸文學は概して樂天的であり、現世的である。千年の歴史を有せる佛教の影響といつても、淺薄な因果應報説にとどまつて、深刻に人生の裏面に徹することがない。偶々現世に不滿の意を寓した諷世嘲俗の文字を見ないではないが、それとも多くは皮相にとどまつてに骨に徹するやうなものとは殆どない。樂翁公の政道を諷したといふ蜀山人の狂歌、喜三次の黄表紙も、何等の辛辣味を感じ得ない。なほ甚しく感情を抑壓し、道義を偏重する風はひいて文學を倫理の奴隸となし、直接世道人心に益のないものは無用の文字なりと認められたのである。功利的道徳に附會しない以上、いかに世態人情の真相を描寫するも、些も顧みられるところがなかつた、故に作家も力めて教訓の意を含ましめようとして、その結果結構の不自然となるのを顧みなかつた。なほ江戸文學は大體に於ては事件の變化をよるこんで心理の解剖に筆の及ぶことが少い。性格の描寫に成功してゐる者が果してどれだけあるだらう。人物の觀察は大まかで集團的である。そしてその型にあてはめて類型的に描寫して、個人的の性格を忘却したのが江戸文學のゆき方であつた。

さて、家康の江戸開府(慶長八年二二六三)から明治天皇の即位(慶應三年二五二七)まで、約二百七十年に亘る近世の文學はこれを二期に大別して、その中心たるべき時代を以て、前者を元祿者時代、後者を文化文政時代、略して化政時代といふ。前者にあつては文學の中心は京坂にあり、後者にあつては、それは江戸に遷つた。その各について少しく述べる。

(イ)元祿時代(二一六〇)大體江戸開府から後櫻町天皇の即位(天皇の即位は寶曆二年二四二二)のことである。に至る約百六十年間である。この間に又凡そ三小期を劃することが出来る。即ち

(一)慶長——寛文(二二六〇—二二六六)は古書の出版、古典の注釋等によつて學問普及し、前代の御伽草子をうけて假名草

子、支那小説の翻譯が漸次流行して、次代への津梁となつた時代である。律語の方面もまだ前代の餘喘を保つてゐるに過ぎず、すべて次代の發展を見るべき準備時代である。

(二)延寶——正徳(二三三〇—二三三〇)は、即ちこの時代の中心をなすべき所謂元祿時代である。假名草子から出た西鶴の浮世草子、古淨瑠璃の定型を破つた近松の院本、貞門の古風から蟬脱した芭蕉の俳諧等その外すべての方面に發刺たる生氣の横溢した近世文學の黄金時代である。

(三)享保——寶曆(二三三〇—二三三〇)は、前代の盛觀は見らるべくもないが、なほその餘勢を保つてゐた時代で、西鶴を祖述する八文字屋本、近松の後繼たる出雲、芭蕉の衣鉢をついだ諸弟子等がこの時代を賑はしてゐる。しかし強弩の末勢の觀がないではない。

要するにこの時代の文學は戰亂の世を去ることなほ遠くないので、すべて大まかで織巧でないが、そこにえもいはれぬ力強さのこもつてゐることを感じる。

(四)文化文政時代(二四二〇—二四二〇)假武以後百十年を閲して江戸の文化は進んだ。政治の中心を外れた京阪は萬事に活氣なく、文化に於ても今や遠く江戸に及ばなくなつた文運は京阪を去つて江戸に遷り行く。この時代も三小期に分つ。

(一)明和——天明(二四二〇—二四二〇)元祿に榮え、享保に衰勢を見せた文學は、こゝに至つて再び離伏を餘義なくせられた。その間に文運は東漸しつゝあつた。一方老中田沼侯の失政からひいて、風俗輕佻に流れ、その風は文學にも反映して川柳・狂歌・黄表紙・洒落本の類が盛に行はれた。

(二)寛政——文政(二四五〇—二四五〇)所謂大御所様時代で家齊將軍となり、松平定信之を輔佐して前代情弱・風を匡正し

學問を獎勵して知識いよく普及し、江戸の文化は正に爛熟の極に達した。文學では小説全盛の時代で、大家輩出して、正に前期の元祿時代とも立並ぶべき近世文學第二の黄金時代である。

(三)天保——慶應(二四九〇—二四九〇)幕府の運命は正に累卵の危きにあり、内外多事にして、人心に餘裕なく、文學亦見るに足るものもなく、漸く前代の情力によつて多少の頹廢的氣分の人情本があるばかりである。

要するに化政時代の文學は太平の氣分に生れた文學で、繊細にして著しく都會的なことが看取せられる。但しその長所はやがて短所で、道勁の趣は、これを感じることは出来ない。

## 二、書籍の刊行と學問の興隆

家康は天下を治めるには、上に於て學問をすゝめ人倫を明らかにする必要ありとして、文祿元年(五二二)名護屋の陣中に藤原惺窩を引見し、同三年江戸に招いて貞觀政要を講ぜしめ、慶長六年(六一)には足利學校の閑室和尚を招いて伏見に學問所をたて、翌年江戸城内に文庫を造り、金澤文庫の藏書その他を收めた。同十年職を秀忠に譲つてからは益々學問の獎勵に力を致した。林道春が惺窩の推舉によつて家康に見えたのもその頃であつた。家康は學問・宗教に關しては公平無私な考を抱いてゐたので、儒教を獎勵する一方では中院通村に源氏物語を、冷泉爲滿に古今集を講ぜしめた。

かくて、家康は公武の制度を定める参考として普く天下の古書を博搜し、從來公卿等が秘書として篋底に藏してゐた書をも嚴令を下して提出せしめ、道春及び金地院崇傳(寛永十年(二二二)寂、六五)の監修の下に謄寫又は板行せしめた。その数およそ三十二部約五百五十冊である。

抑も本邦に於ける印刷の濫觴は遠く奈良時代に溯るを得ることは前章既に説いたところである。爾後その發達は遅々たるものではあつたが、鎌倉時代には既に外典の出版も行はれた。室町時代に入つてはその業ますます盛になつたが文明十三年(四二)には大學章句が薩摩で刊行せられたが、(萬葉參照)これやがて本邦に於ける大學刊行の嚆矢であると共に、實に朱子新註を開板した最初のものである。かく書籍印刷の業は相次いで行はれてゐたが、未だ徹々たるものであつたが、家康の遺臣の事業は出版界に一大刷新を加へたもので、その功績は永久に記念せらるべきである。

近世の印刷史はまづ活版を以て始まる。蓋し文祿征韓の役に彼國の法を傳へて木活字・銅活字並び行はれてゐたが、やがてそれが廢れて木活字のみ用ひられ、寛永の頃まで續いたが、遂に整版に壓倒せられてしまつた。

後陽成天皇(元和三年(三三)崩、四七)は頗る寂慮を學問の振興に注がせ給ひ、書籍梓行の志を抱かせられ、朝鮮の法に倣うて木活字を作らしめ給ひ、まづ文祿二年古文孝經一卷を開板せしめ給うたが、ついで慶長二年に錦織段勤學文を、同四年に神代紀四書等を刊行せしめ給うた。所謂慶長勅板である。家康は天皇の叡旨を奉體して、木活字十萬餘を作つて伏見學校に下附し、慶長四年に孔子家語・六韜三略・同五年に貞觀政要、六年に七書、七年に東鑑・周易等を刊行せしめたが、晩年には道春・崇傳を監督として銅活字を製せしめて大藏一覽(慶長二)・羣書治要(元和)を出校した。これより先き慶長十一年上杉氏の臣直江兼繼が刊行した六臣注文選こそは本邦銅活字の最初であつた。が元和七年後水尾天皇(延寶八年(二二)崩八、五)勅版の皇宋事實類苑を最後として銅活字は全く廢れたのである。

かく慶長以來勅版駿河版等に刺戟せられると共に時代の要求に應じて印刷術は發達し、所在に私版の勃興を見るに至つた。その魁といふべきは小瀬甫庵の刊行した補注蒙求(文政五年)と、平井休與が開板した節用集(慶長二年)とであらう。

慶長十三年角倉素庵が伊勢物語を出板したが素庵はその外平家物語・方丈記・徒然草・諸本等二十餘種を開板した。所謂角倉本(又嵯峨本とも光悅本とも)である。素庵は了以の子、通稱を與一郎といひ、父を助けて各地の河川の改修に従事したが、又學を好み惺窩について學んで詩歌をよくし、又書は光悅について門下隨一と稱せられた。寛永九年(九二)六十三歳で歿した。角倉本は書中多く繪畫を挿み、平假名を用ひ、近世の文學書の印刷の體裁を導くに至つた。家康が書籍を印行し、學問を奨励したことは既にいつたが、三代將軍家光亦乃祖の志をついで、寛永八年(九〇)上野忍岡の地を林道春に賜うて學寮を建てしめ、次で尾張義直は爲めに聖廟を建て、釋奠を行ひ、將軍亦これに參拜した。後の昌平塾の前身である。かくて漢學は日を追うて隆昌の運にむかうたが、かくの如き機運を醸成したについては、主唱者たりし藤原惺窩の功が最も多い。

惺窩は定家十二世の裔で、播磨國細川村に生れた。郷國の戰亂を避けて一時僧籍に入つたが、浮屠氏のことを喜ばず、儒を以て立たうと欲したが、良師がなかつた。こゝに於て彼は渡明の計を樹てまづ薩摩に行つた。當時薩摩は朱子學の淵藪であつたことは既にいつた通りである。彼はこゝで大學章句を得て大に喜び、渡明の志を捨て、専心これが研鑽に従事し、遂にその學を成就したのであつた。彼の學問も後世から見ればなほ足りないところが多かつたらうが、その人格の高いことは倨傲小早川秀秋の如きですら尊崇してゐたことによつても知られよう。遺著に惺窩文集(二種ある。一は林羅山の編にかゝり、一はその子爲景の編である。後者には後光)・假名性理・千代もと草等がある。後二者は母のために平易に儒教の大意を説いたものである。又歌をもよくして、惺窩和歌集の著もある。徂徠が王仁・吉備氏・菅原氏と併べて彼を以て代々學宮に尸祝すと雖も可なりと稱したのも溢美の言ではない。元和五年(七九)五十九